

產政塾

XVI

產政塾

この編は、三十歳前後の前途有為な若者が
溢れる心の叫びを綴ったものである。

目次

●産政塾Ⅶの発刊によせて

(財)中部産業・労働政策研究会

小田桐 勝巳

●「2005年、産生塾日記」	1
----------------	---

全ユニー労働組合 青山 泰孝

●体験と経験が新たなステップに	7
-----------------	---

トヨタ紡織労働組合 赤川 直也

●「道」	15
------	----

松坂屋労働組合 安東 英二

●「三十而立」	23
---------	----

中部電力株式会社 大橋 弘章

●『殻』と向き合うことが大切	31
----------------	----

トヨタ紡織株式会社 小川 恵孝

●「Do My Best !!」	37
------------------	----

株式会社豊田自動織機 加藤 基成

●「基本の徹底」	47
----------	----

トヨタ自動車労働組合 小西 圭造

● 9日間の塾生活を振り返る 55

デンソー労働組合 小林 竜太郎

● 産政塾に参加して 65

豊田工機労働組合 酒井 推幾

● 冒険者たちよ! 73

アイシン精機株式会社 佐宗 晋治

● かけがえのない体験 83

トヨタ車体株式会社 佐々 慎治

● 自分の「殻」とは? 91

トヨタ自動車株式会社 高橋 鉦二

● 「殻の外へ飛び出すとは? (これまでの自分を振りかえって)」 99

全トヨタ労働組合連合会 竹下 太一郎

● 「産政塾」を終えて!! 107

株式会社デンソー 田中丸 庸

● 「殻」からの卒業 117

名古屋鉄道労働組合 富田 晃弘

● 「嵐のように去って」 125

東邦ガス労働組合 中根 陽造

● 16期 産政塾を振り返って 133

豊田市役所 中野 将

● 「生きがい」の追求	豊田自動織機労働組合	服部敦哉	141
● 産政塾を振り返って	中部電力労働組合	番条喜芳	147
● 卒業、そしてこれから	刈谷市役所	平野元章	155
● 「殻」ってどうしたら破れるの？	フタバ産業株式会社	宮川修一郎	163
● 産政塾を振り返って	アイシン労働組合	山口 覚	171
● 産政塾	トヨタ車体労働組合	吉 續 武 俊	179
● 第16期産政塾を振り返って	株式会社松坂屋	吉 原 昭 浩	187
● 「16期産政塾の感想」	中部産政研	松 井 英 治	193
● 産政塾活動記録			201
● 歴代卒業生			217

産政塾XVIの発刊によせて

(財) 中部産業・労働政策研究会が主催している若手セミナー「産政塾」が、このたび第十六期の活動を修了し、今年も二十四名の塾生が卒業いたしました。

産政塾は、異業種の若者二十名前後の方に、ご参加をいただき、約一年間に亘って行うセミナーであります。セミナーといっても、あらかじめテーマやスケジュールを決めて講師の指導を受けるといった通常のスタイルとは異なり、参加したメンバー達が自らの企画でテーマや講師を選び、現地に出向いて体験や教えをこうといったプログラムを組み、その中で学ぼうとするものであります。また、産政塾は異業種の若者の集まりですから、多様性を取り入れた論争の場でもあります。企業や仕事の枠を越えて、お互いが夢を語り、天下国家を論じ、講師を交えて論争をし、論争の中から新しいエネルギーが生み出されもします。この活動を通して、参加者は自らの考えを改めて検証し、自分自身の存在や役割を自覚することができるとなり、産政塾は言わば「自らを磨く道場」というようなものであります。

今回も産政塾への参加者は三十才前後の若者達であり、意欲においても能力においても次代を担うにふさわしい人材の集まりとなりました。

人間形成の基本の時期は青春期であると言われておりますが、仕事や家庭における人間としての枠を形成するのも三十才前後からの十年ぐらいと言えるでしょう。一応仕事にも慣れ、自分で判断できる能力も備えつつあり、精神的にも肉体的にも充実し、仕事面でも家庭面でも先頭に立って活躍する時期でもあります。このような若者が集う産政塾は、今期も塾生がお互いに夢を語りあい、自らの企画によってその実践に情熱を注ぎ、そして一年近くにわたる活動を終え、このたび修了いたしました。

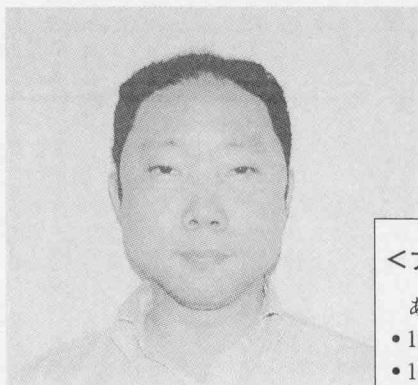
第十六期にあたる二〇〇五年の活動では、塾生は各企画をよく練り上げ、「創造性」「独創性」「チャレンジ精神」に富んだ実のあるものにしてくれました。このセミナーを通して、参加者一人一人が新しい時代に対応するパラダイム、ものの考え方を築くための「何か」を得ることができたものと確信しております。

この冊子は、第十六期生が産政塾での様々な体験をふまえて、自らの想いを「若者のロマンと叫び」として綴ったものであります。ぜひご一読をお願い申し上げます。また、産政塾は極めて小規模の催しであり、参加対象も限定されたものではありませんが、こうした冊子を通して一人でも多くの方の共感を呼ぶことができばと思つて発刊をした次第であります。塾生と同世代の方々の糧となることはもとより、指導的立場にある方々にとつても参考になることが多いと思います。

最後に、これまで産政塾の運営に対して格別の理解と協力を賜りました講師の方々をはじめ、関係者各位の皆様にご感謝を申し上げます。また同時に産政塾および塾生に対して今後ともご指導、ご声援を賜ることができれば誠に幸いです。

塾長 小田桐 勝 巳

「2005年、産生塾日記」



全ユニー労働組合

青 山 泰 孝

<プロフィール>

あおやま やすたか (36歳)

- 1969年11月 愛知県豊田市生まれ
- 1993年 3 月 (株)さが美入社
- 2004年 9 月 全ユニー労働組合 専従中央執行委員
現在に至る

<家族> 妻

<趣味> エアロビクス

「緊急事態発生、緊急事態発生、太田川から中部国際空港へ向かっている車両は、緊急停車してください」初めて電車の運転席に入れてもらった時は、まさかそんな事になるとは夢にも思いませんでした。

開塾式、中電ウイング、中京女子レスリング部、女将塾と、4回連続で参加できなかった私が、初めて参加できる産生塾が、「仙台へ行つて楽天球団と地域との共生を勉強する」でした。（ちよつと違ふかな）そして中部国際空港から仙台へ旅立つ前に、名鉄労組さんのご好意により、行きの名鉄電車の運転席に乗せてもらえることになりました。まず始発の電車で金山駅まで行き、産政塾の一部メンバー（運転席に乗るメンバー）と合流し、予定の車両に乗り込みました。神宮前駅から交代で4つの組で体験のスタートです。神宮前駅→太田川駅間の3名、太田川駅→朝倉駅間の3名に引き続き、自分たちの班の朝倉駅→新舞子駅間のスタートです。実際に運転席のドアが開き中に入っていくと、何とも言えない緊張感が漂っていました。乗客全員の命を預かる運転手さんの真剣な表情、加速に合わせてギアチェンジしていく手の動き、車両から見える正面の見晴らしの良さ、すべてが新鮮で、子供の頃に憧れた、電車の運転手さんのイメージが脳裏によみがえっていました。

しばらく運転を見ていると、急に無線から連絡が入りました。新舞子駅周辺で何か発生した模様という第一報で、徐々に誰かが線路内に入ったのではとか、踏切内で車が立ち往生したのではといううな連絡がありました。が、確実な内容がはつきりとせず、一旦状況把握が出来るまで一時停止という連絡が入りました。時間と共に詳細がはつきりとして、新舞子駅の先で車が線路の外の電柱に衝突し、衝突の勢いで倒れた電柱が線路内の架線に引っかかり、それが邪魔をして電車が通れなくなつて

いるとのことでした。最初は簡単な事故か何かで、すぐに電車も動くだろうと考えていた僕たちは、状況の悪さを聞いた時に、このままでは飛行機の出発時間までに空港へたどり着けないのではないかと思い始めました。他の乗客もそう感じ始めたのか、それぞれ様々な行動を取り始めました。割とご年配の方が多く乗っていたのですが、一番多かったのが直接乗務員へいつ動くのか聞く人、遅れたらどうするのかと文句を言う人でした。その点産政塾生はというと、それぞれが空港へ先に到着しているはずの塾生や事務局の松井さんに連絡をとる人、空港の航空会社に次の便が何時か聞いて手配の準備を始める人、他の乗客に状況を説明する人など、みんな冷静に判断して行動していて、やはり色々な場で揉まれていると違うなあと感じました。

電車が新舞子駅に止まると、何とか空港までたどり着こうとする人たちの、大移動が始まりました。しかし早朝の田舎の駅ではタクシーもおらず、臨時にバスを出そうにも運転手を始めバス自体が万博の利用で余裕がなく、全くといって良いほど対応が出来ない状況でした。塾生の誰かが、空港ならタクシーもいっぱいいるし、すぐに駆けつけてくれるだろうと言ってタクシー会社へ連絡しましたが、ここで初めて知ったのですが、タクシーにも担当エリアが明確に決まっており、エリアをまたいで行くことは出来ないということでした。こんなところにも規制があるんだなあと感心しつつ、さてどうしたもんだらうと対策を練っていると、一部の塾生が空港へ向かうためのタクシーの誘導と、それに乗る人の順番を決めたり、相乗りを調整するなどの行動に出始めました。結局運転席乗車チームは2時間新舞子駅に立ち往生し、先に空港へ着いていたチームは予定通りの飛行機で出発することになりました。残された私たちは結局名古屋まで戻り、新幹線を乗り継いで仙台へ向かうこととなりました。

その新幹線を乗り継いで仙台へ向かう途中でも様々なドラマがあり、先にチケットを手配して行っちゃう人（実は私ですが）、タッチの差でみんなと同じ新幹線に乗れず更に遅れる人など、すったもんだしながらなんとかみんな仙台へ到着し、最初の予定である楽天対ロッテの試合を観るために、楽天フルキャストスタジアムへ向かいました。そこで先に行ったチームとやつと合流し、当初の計画の流れに返ることが出来ました。本来は聞けるはずだった球団の方のお話は、私たちの遅れたチームは聞けませんでしたが、非常時にもあわてずに次の対応をしっかり図る先を見た行動や、自分たちも同じ状況なのに周りの人たちを優先して助けることが出来る精神を見ることが出来て、これはやはり楽天球団のためにボランティアで頑張る地域の人たちの精神に通じるものがあるし、逆に大変な出来事だったけど、もの凄く貴重な体験が出来たなと改めて思いました。

そしてもう一つだけ、私が参加できたものが自分の班で企画した、愛知万博でのボランティア体験でした。今期の産政塾は中電ウイングから始まり、仙台の企画なども含めてボランティアにかかわるものが多かった気がします、本当のボランティアって何だろうをテーマに企画することになりました。事前の何回かの打合せの中で、折角だから今しか出来ない愛知万博に行つて、その中でボランティアが出来たら記念にもなるんじゃないかという話になりました。丁度連合がN.P.Oや市民団体と協力して、地球市民村というパビリオンを出展していましたので、何とかそこに協力する形で参加出来ることになりました。

その中にれ・あ・ろファミリースクールと言う名前の、連合と愛知労協共同の企画があり、毎月のテーマを決めて、子供たちに世界の文化を伝えていく教室を開いていました。私たちが参加する8

月については世界の遊びがテーマで、お手玉やベーこまに始まり、海外のこまがあったり、アフリカの民族衣装を着せて写真を撮ったりと、様々なことを子供に教える月でした。事前の研修会でそれぞれの担当を決め、子供に教えられるレベルになるまで、特訓をしました。私たちも子供の時分に体験した遊びも多かったのですが、運動神経も頭の反応も鈍ってしまった私たちの年代にとつては、実際にやってみると非常に難しいものでした。しかし私たちにとつても体験すること自体が楽しく感じられ、教えることについても非常に楽しみな企画でした。2日間にわたって参加したのですが、まず初日の8月18日、万博も非常に盛り上がっていた頃なので、まず時間通りに会場に集合することが第一のハードルでした。そして実際にファミリースクールが始まる前に、万博会場のボランティアセクターを見学させてもらいました。もの凄くたくさんの方がボランティアにかかわり、万博運営に携わっていることを聞きながら、それぞれの人が楽しみなながら参加していることを聞いて、ついに日本のボランティアもここまで来たかと思われました。このボランティアの精神が日本に定着してきたことは、他人のことを思いやる気持ちを持った人が増えてきているのではないかという、少しうれしい気持ちにさせられました。西ゲートから入場するときのあのウキウキドキドキした感覚、これはもう万博にいったことのある人しかわからないと思いますが、その独特の高揚感を味わいながら、スタンプ証を首からぶら下げ、スタンプ用ゲートから入場しました。私は万博に来ること自体初めてだったので、会場内を歩いているだけでも全てが珍しく、楽しいものでした。ゴミの分別に始まり環境対策にも様々なところが試されていて、ボランティアの方にその説明を受けながら、その都度感心したことを覚えていきます。そして地球市民村に着き、中に入っていくとまず色々な企業のブースが

あり、そこでそれぞれの環境問題への取り組みが紹介されました。トヨタ自動車を筆頭に富士通、コスモ石油など、大企業の取り組みが紹介されましたが、それを熱心に勉強している人の多さにまた感心させられました。れ・あ・ろファミリースクールの会場に入り、準備を終えるといよいよボランティア開始です。会場を開けて受付を始めると、あつという間に整理券がなくなり、体験型の人氣の高さに驚かされました。そして親子一緒に遊びを学び始めるのですが、子供より親の方が熱中してしまったり、私たち教える側よりも上手な人がいたり、とてもにぎやかな雰囲気を楽しさと共に熱気を生み出していました。ほとんど休憩もせずにつつ通して教えていたのですが、参加している親子の楽しそうな表情や会話が私たちの疲れも癒してくれて、なんだかボランティアをしている私たちが自身が楽しんでいる、そんな感じの教室でした。その日の夜はつどいの丘に集まり、第16期産政塾の閉塾式を行いました。もうこれで会えなくなるのかと思うと自然に話はずみ、数えるほどしか会っていないのにこんなに仲良くなれたことは、産政塾の活動を通じて人と人との繋がりがやかかわりの大切さや他人を思いやれる心、コミュニケーションの大切さを身をもって体験できたことが一番の収穫であり、今のみんなの人間関係に繋がっている要因になったと思います。翌日は朝から日本フライングデイスク協会の先生のお話を聞いた後、もう一日万博のボランティアに取り組みました。昨日とは違うメンバーで行ったのですが、昨日と一緒に参加する親子以上に、ボランティアする私たちの方が楽しんでしまい、あつという間に一日が過ぎていきました。そしてすべてのボランティアが終わってから万博会場内で仲間と飲んだビールのおいしさ、そして第16期産政塾生のみんなと学べたこと、ずっと忘れません！

体験と経験が新たなステップに



トヨタ紡織労働組合

赤川直也

<プロフィール>

あかがわ なおや (35歳)

- 1970年10月 安城市生まれ
- 1993年4月 豊田紡織㈱入社
- 1993年10月 品質保証部 配属
- 2002年10月 豊田紡織労働組合の専従
- 2004年10月 トヨタ紡織労働組合の専従
現在にいたる

<家族構成> 妻・娘1人・息子1人

<趣味> ドライブ・旅行

はじめに

今回、産政塾に参加し、普段の社会人生活ではできない体験・経験をさせていただきました。産政塾テーマ「殻の外へ踏み出そう」は、私自身今日までの人生を振り返る良い機会でもあり、何かのきっかけ作りの1つに繋がればと思い取り組んできました。そういう意味では普段の職場ではなく、新しい集団つまり産政塾という枠組みで取り組みをはじめるということは、大きな不安もありましたが、大きな期待もありました。

今回の体験・経験で、「殻の外へ踏み出せた」とは思ってはいません。しかし、この貴重な体験・経験を短期間で得られたのは紛れもない事実であり、今一度、産政塾の活動を振り返ることで、何をすることができたか整理してみたいと思います。

第1回 開塾式 2005年1月19日

「どんなメンバーが集まるのだろうか?」、「何をやるのだろうか?」、そんな期待感からか、足取り軽く開塾式に向いました。実際、イメージしていた以上に、幅広い業種からメンバーが集まっており、グループ討議を行っているうちに、これからの経験が、「きっと何か自分にとって、良い財産になるだろう」と感じさせられた1日でした。

第2回 官民の社会福祉への取り組みを学ぶ 2005年4月8日

社会福祉という言葉は、よく耳にします。しかし、私のイメージとしては、高齢の方々や何かの障がいを持っている方々に対して、何かをしていく、何かをしてあげるといような感じをもっていました。しかし、この企画を通じて感じたことは、社会と共生していくことを目指し、そのためのサポートが、これからの社会福祉ではないかということです。中電ウイングさんで職場見学させていただいた時、従業員の皆さんに笑顔で挨拶され、改めて挨拶の大切さを感じ、実際の作業を見学し、黙々と打ち込んでいる姿をみて、私自身と実際の現場との認識に差があったと感じた瞬間でした。また、私自身もいつ障がいを持つかもしれないと思った時、何か切実に考えさせられるものがありました。

第3回 夢・希望への挑戦 2005年5月11日

夢・希望への挑戦。なかなか聞こえの良い言葉であるが、その夢が世界一やオリンピックとなると、日常生活からはかけ離れた世界となります。その選手に会えるというだけでも楽しみなのに、その人の話が聞け、練習まで体験ができる。とてもワクワクした気分でこの企画に望みました。レスリングの栄監督の「目標が明確」、吉田選手の「勝つ喜び、達成感」のそれぞれの言葉が強く印象に残りました。そのため、選手たちが日々こなす練習を体験しましたが、こなすことができない現実を受

け入れたとき、改めて、明確な目標を掲げていくことで、自分を見失うことなく、自分が向上できる。夢が現実のものとなり、希望がかなうのであらうと感じました。

第4回 女将塾の体験を通し 2005年6月24日・25日

女将とは、字のごとく、女性特有の職業。その塾となると何か新たな体験を期待させてくれました。それにしても、産政塾の塾生は短期間でよく様々な企画を考えてくると、感じさせられました。女将塾は、旅館の運営から経営まで、一つの小さな会社をみる事ができるプロ育成と人間形成の場。なにげない宿泊客の動作などから、さりげない気遣いをし、喜んでもらう。あるサービスを、旅館は最大効率で提供するために、なにをすべきか？つまり、仕事は一つ一つだが、それらを繋げる、コミュニケーションを体得できました。なにか、今の企業やさまざまな場面で求められていることではないかと感じさせられました。

第5回 企業人として社会貢献の重要性 2005年7月10日・11日

これは、わたしたちAグループが企画したものであります。当初、事務局より、宿泊の企画が一つは認められていたので、これに、飛びついたのも一つありますが、森の都 仙台にある地域密着を目指した楽天球団とそれをサポートする地域・行政に、何か得るものがあると期待し、望んだ企画でし

た。

この企画を進める上で、事務局の松井殿とはいろいろと議論を交わした記憶があります。事務局としての立場、Aグループの企画を進めたい思いが交わりながら、できた企画でもありました。

当日、事故による塾生の到着遅れなど、想定外の出来事に対し、冷静に受け止め、塾生のみなさんが、自ら考え行動し団結したことで、この企画を無事進めることができたのではないかと思います。

楽天球団では、地域と共に生きる球団を目指した、新時代に適合した球団運営とその取り組みの環として、斬新であったのが、ボランティアによる、きれい・たのしい・やさしいスタジアム作りの活動でした。実際、スタジアムを視察したときに、観客のマナーのよさや一体感もあり、きれい・たのしい・やさしいスタジアムに相応しく、胸をワクワクさせる球場であったことです。

また、地域はこの野球を通じて、行政が市民を巻き込んだ地域発展活動への取り組みに繋がっていることがわかりました。

直接、現地へ行き、見たり、聞いたり、経験したことからしか得られない、たくさんの方があつた企画だと感じました。

第6回 愛知万博でボランティアを実践!! 2005年8月19日・20日

ここ愛知で今世紀もう行われることがないであろう愛知万博で、万博を見る側はもちろん、ボランティアとして、その一部のイベントのスタッフとして参加できたことをうれしく思いました。

会場は、夏休みということもあり、大変多くの方々に賑わっていました。その1つの地球市民村で活動しましたが、私自身、このような大きなイベントで受付や会場整理などのボランティアをするとは初めてで、新鮮さを感じました。イベント会場に多くの人にきていただくために、呼び込みし、見ていかれた子供から大人まで、満足、楽しそうな顔で次のイベント会場へ行かれる姿を見ると、私自身も楽しい気分になりました。途中、快適に気持ちよくイベントを見ていただくために、会場内の混雑状況を見ながら呼び込みをするなど、知らないうちにボランティア同士の間連携が生まれ、大好評のうちに活動を終えることができました。これらの活動を通して、ボランティアというところのよい社会貢献的なイメージをもっていました、それだけではない意義があることを考えさせられました。

第7回 閉塾式 2005年8月19日

産政塾の活動期間は1月から8月。初めは、比較的長いと感じていた活動期間は、閉塾式を迎えるにあつという間に過ぎたという感じがしました。私は業務の都合などで欠席することなくすべての企画に参加することができました。

最後の日となると、非常に惜しい、残念な気持ちがありました。

産政塾を振り返って

今回、産政塾に参加させていただき、「殻の外へ踏み出そう」というテーマに対し、どこまで達成できたかを考えてみると、今回はあくまでもきつかけづくりであり、産政塾をはなれ、これからの行動で達成をめざすものではないかと感じています。

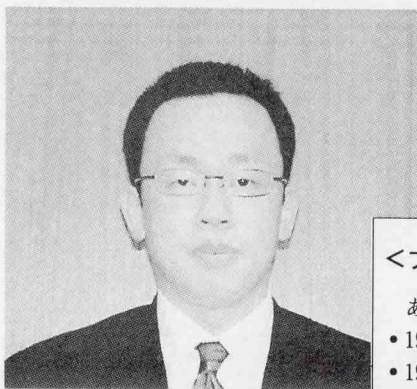
産政塾では、直接会えたり、見たり、聞いたりすることができたからこそ、今まで得られなかった経験や感動をさまざまな企画を通じて得ることができました。様々な情報が簡単に手に入る時代だからこそ、直接見たり、聞いたりすることは重要だと、改めて感じました。

また、産政塾という新しい集団で活動でき、異業種・同世代のメンバーと交流できたことを非常にうれしく思うとともに、自らが企画を計画し、その計画を実行したという経験に対し、いつもと違う達成感を感じることができました。今後、いろいろな場面でお世話になることがあると思いますが宜しくお願いします。

入社してから10年弱が経過した私にとって、塾生みなさんや各企画での出会いを通じて、多くの意見交換をすることができたことは、人生、生活、さまざまな場面で置かれた立場を再認識することができましたと思います。

今回、このような経験ができる機会を作っていただいた、職場に深く感謝し、この経験をもとに、今後自分の仕事などへ役立てていきたいと思っています。

「道」



松坂屋労働組合

安 東 英 二

<プロフィール>

あんど う えいじ (36歳)

- 1969年 8 月 愛知県生まれ
- 1992年 4 月 (株)松坂屋入社
名古屋店 婦人靴売場配属
- 1995年 3 月 外商 1 部 外商第 4 課 法人担
当へ異動
(現外商統括部 外商第 1 課)
- 2003年 9 月 紳士洋品課 旅行用品売場へ異動
- 2004年 9 月 松坂屋労働組合 中央執行委員
現在に至る

<家族> 妻、長男 (8 歳)、次男 (5 歳)、
長女 (2 歳)

<趣味> バレーボール、空手、プロレス観戦、
釣り

△はじめに▽

「うーん、まずい！非常にまずいー！」

今、私は頭を抱えている。そう、この卒論の締切に追われているのである。いつも、追いつめられないと行動できない私の悪いところである。（解っていないながら、36年間治っていない）おそらく今回の塾生の多くが、私と同様に締切直前で慌てているのではないだろうか？・・・って思うと気が楽になってくるのだが。私の頭の中は、この文章を作成しているすぐに固まってしまうこのパソコンと同様にフリーズ状態である。30分ほど、過去の産政塾誌を眺めながら、「皆さん文才があるな」といまだに他人事の様に感心している。

（いかんいかん、よしつやるか！）

前フリが長くなつたが、今回、産政塾第16期生として参加できたことは自分に取って、かえがたい財産となった。塾生との出会い、Aグループでの企画、様々な体験、松井氏との格闘？今思い起こしてももう一度参加したいと思う。産政塾に参加できたこと自体が既に「殻を破る」ことになったのではないだろうか。しかし、良く考えてみると自分の過去にも殻を破る機会があったような・・・記憶力はいい方ではないが振り返ってみたい。

△バレーボールとの出会い▽

「何やろうかな。」

中学に入学してすぐの頃、私はどの部活に入部しようかなり迷っていた。親からは「運動部に入れ！」と言われそのつもりで探してはいたが、本当にやりたいモノが見つからなかった。小学校ではバスケットボールをやっていたがポジションは「声出し」と「ベンチウォーマー」であった。背はそこそこ高い方であったが、今と同じで横にも大きく（笑）まったくの運動音痴であった。それでも何となく入部してもいいかなーと思っていたのは、当時兄がやっていた「野球」と体をそのまま活かせると単純に考えていた「柔道」であった。そんな感じで、まずは野球部から見学に行ったであった。バックネット裏から野球部の練習を見ていると、後ろから、

「おい！英二！」

と聞きなれた声、振り向くと近所に住む先輩2名がバレーボール片手に、ニヤつきながら近寄ってきた。

「バレー部に仮入部しない？」

バレー部は週末練習の時以外は外のコートで練習をしており、先輩達はたまたま近くにいた顔見知りの私に声をかけてきたのであった。バレーボールなんて勿論想定外の範囲外の見学であった。テレビで見たことはあるので大まかなルールは知ってはいたが、正直なところ女性がやるスポーツと思って、先輩2人に連れて行かれ体験入部、その後、本入部までの1週間はヨイショのオンパレード。

「すぐにうまくなれる」という悪徳商法のような勧誘に、素直な（調子にのりやすい）私は、

「なんていい部なんだろう」

とそのまま入部してしまったのである。後から聞いた話では、「とりあえず人数を集めろ！」と鬼よりは優しい？（と思う）顧問からの一声で、集められた内の1人にすぎなかった。当時のバレー部は、優しい？顧問の下、軍隊に近い統率力と団体大仕込みの基本に忠実な？まさに体育会系の練習で有名であった。その指導方法は、今の時代であれば新聞記者が喜んで記事を書きに来るのではないだろうか。入部してからは想像通り、運動音痴の私が簡単について行けるわけもなく、いつも半泣きの毎日であった。当時、22名入った同期は瞬く間に、12名まで絞り込まれた。横幅のあった私も2ヶ月で身長5 cm増、体重12 kg減と、通信販売もびっくりの成果を上げたのであった。そのような中で、今でも思い出して感心するのは、練習だけは休まなかったことである。（ただ単に熱中するモノがなかっただけであるが）その後、たまたま出してもらえた練習試合で決めた1本のスパイクと折からの男子バレーブームにのせられて、結局、大学までバレーボール漬けの毎日を送ることになったのである。まさに殻を破った最初の機会である。ちなみにバレーボールを続けた結果、体育の成績も良くなり、気が付けば同級生のスポーツマン達の仲間入りを果たすこととなった。（プチ自慢！）

△法人外商での7年半▽

「もし入社できたら、法人外商で働いてみたいです。」

法人外商が具体的に何をやっているのかをよく理解していなかったにもかかわらず、なんとなくカッコイイというイメージだけで入社時言った覚えがある。しかし、入社してから婦人靴売場に配属

してもらい、毎週行われる催事の企画・準備に追われていた私は、そんなことはすっかり忘れていた。そして4年目の春、辞令をもらった。

「外商第4課 法人担当を命ず」

・ ・ ・ なんと、すっかり忘れて、想像すらしていない辞令をいただいたため、激しく戸惑っていた。
「絶対に出来ない。」

この時の正直な気持ちであった。入社してしばらく立てば、法人外商の仕事内容についてもある程度は理解する様になる。たまに法人外商の事務所の前を通っても、いつも遅くまで猛烈に仕事に取り組んでいる諸先輩方を見て、

「私には縁のないところだ・ ・ ・」

と勝手に納得していたので余計に驚いていた。しかし、逃げだす勇気なんてあるはずもなく、唯一プロレス中継を見ていた時に、インタビュでアナウンサーが「この相手に勝てますか？」といった即座にアントニオ猪木がアナウンサーに張り手をしながら叫んだ言葉

「バカヤロー！やる前から負けることを考えているやつがあるか！出て行け！」

この言葉を胸に秘めて

「とりあえず、3年は一生懸命頑張ろう。」

と自分で小さな目標立てて取り組んできた。結果、7年半担当としてやらせてもらうことが出来た。成果は人が決めることではあるが、自分の中では夢中で取り組んだ7年半であった。外商での期間は、松坂屋という店の中だけしか知らなかった私にとって、全てにおいて勉強させていただくことが出来

た貴重な期間であつた。社会人としての常識、仕事への取り組み姿勢、働いている店の評判、商売の厳しさなど先輩からは勿論だが、その多くはお客様から教えていただいた。「誠心誠意」という言葉もこの時に教えていただいた言葉である。また、改めて会社（店）の看板の大きさ、重さを再確認することが出来た。中にはなかなか気がつかないかないことでも、外に出ることにより大きな発見がある。まさしく殻を破らせていただいた期間であつた。

△組合役員として▽

「安東、ちよつと時間とれないか。」

と先輩から電話をもらった。このころ私は、今まで全く興味のなかつた組合活動を改めて考え直し、分会書記長として取り組みだしたばかりであつた。分会書記長を受けるときにもよく理解せず引き受け、その責務の大きさに戸惑いながら取り組んでいた。

「専従としてやってみないか・・・」

会社でのキャリアはあつても組合役員としてはまったくの新人であるため、私はここでも躊躇していた。しかし以前と考えが変わっていたのは、

（自分を必要と思つてもらえるなら、役に立ちたい。）

という思いであつた。現在、まわりにいつも迷惑をかけながらなんとか日々こなしている。時々、その責務の大きさに負けそうになるが、毎日の新しい発見と多くの人との出会いが私を助けてくれてい

る。今回の産政塾の参加も、組合役員になっていなければ、参加することは出来なかったと思う。色々経験させていただいてる以上、1日でも早く信頼される役員になれるように努力していきたい。

△最後に▽

殻をテーマに書いてきたつもりではあるが、恥ずかしながら私の場合は、積極的に殻に向かつてというよりも、与えてもらった環境で殻を破る（自分の枠から出る）努力をしたというのが正直なところかも知れない。しかし与えられたことに対しては常に背伸びをしながら取り組んできたつもりである。（甘いかな？）もう一つは、「迷っても仕方がない、とりあえずやってみよう」という開き直れる性格も良かったように思う。

私が殻を破るにあたり大切な「キーワード」はやはり、「人」ではないかと思う。今回の産政塾でもそうであるが、やはり全てのテーマのベースは「人」であったように思う。今私が組合役員として働けるのも、36年間ここまでこれたのも、やはり一人では何も出来なかったと思う。どんなに厳しい環境に置いても、くじけそうなときに支えてくれる家族・友人がいたからこそ乗り越えてこられたのではないか。さらには多くの人との出会いがあつて、成長させてもらえたではないか。そのことに感謝をし、自分も人に役立つ人間になれるよう努力し続けたいと思う。

今回、産政塾で大変お世話になった塾長をはじめ、塾生の皆さんには本当に多くのことを学ばせていただきました。ありがとうございます。このつながりは私の大切な財産です。今後も、どうぞよ

ろしくお願いいたします。

「道」

この道を行けばどうなるものか
危ぶむなかれ、危ぶめば道はなし
踏み出せばその一足が道となり、その一足が道となる
迷わず行けよ、行けばわかるさ ありがとー！

「いくぞー！ 1・2・3 ダーッ!!」

アントニオ 猪木

「三十而立」



中部電力株式会社
大橋 弘章

<プロフィール>

- おおはし ひろあき (31歳)
- 1974年 岐阜県羽島市生まれ
 - 1997年 中部電力(株) 入社
経理部 配属
 - 1999年 四日市営業所営業一課
 - 2000年 人事部
現在に至る

<家族> 妻、長男

生物学的時間

今朝から、ずっと雨がしとしと降っている。こんな日は、時間が経つのを長く感じる。特に原稿を書くためにパソコンに向かっているとなおさらである。

10年くらい前、「ゾウの時間、ネズミの時間」というベストセラーがあった。

その本によると、動物の大きさが違うと機敏さが違い、寿命が違い、総じて時間の流れる速さが違ってくるという内容である。例えば、心臓が1回ドキンと打つ時間を心周期と呼ぶが、ゾウはおよそ3秒もかかるのに、ハツカネズミは0.1秒しかからない。生物の心周期は体重の4分の1に比例して長くなっているようで、体重が10倍になると計算上、時間が2倍くらいゆっくりと流れるようになる。また、心周期だけではなく、呼吸や筋肉の動きについても、体のサイズの大きい動物ほど、ゆっくりになっているようである。30グラムのハツカネズミと3トンのゾウを比較すると、体重が10万倍違うことから、時間は18倍違い、ゾウはネズミに比べ時間が18倍ゆっくりだということになる。これだけ時間の速さが違えば、時間の持つ意味が動物によって大きく違っており、物理的な時間以外に、生物種毎に「生物学的時間」があるということになる。

逆に消費エネルギーについて言えば、身体の高い動物ほどたくさんエネルギーを使うが、体重が増えるほどエネルギーを消費するわけではないそうだ。つまり、体細胞一個あたりの消費エネルギー量は、身体が大きいほど少ないということになる。実際、体重の4分の1乗に反比例するそうだ。つまり、ネズミのように小型でエネルギーをたくさん使う動物は、時間がはやく流れ、全速力で一生

を駆け抜けているようなものらしい。

考えてみれば、ゾウやガラパゴスに似そうな大亀などは、のっしり動き、寿命も長そうである。一方でハツカネズミなどは実に短命なイメージがある。これは、細胞一個あたりの消費エネルギー量、心周期に関係があるのかもしれない。

人間にあてはめてみれば、身体の小さな子供と老人とでは時間の過ぎる速さが違うという考え方も理解できる。体重あたりの消費エネルギー量は子供では高く、大人になるほど減っていく。だから子供のころの一日はとても長く感じ、たくさん食べ、元気に走り回っていたのかもしれない。

時間の捉え方

こういった生物学的なアプローチもある意味、正しいと思う反面、時間の長さに対する感覚は、人の置かれている環境や精神状態等によって変わることを経験上感じている。忙しくて時間がいくらあっても足りないような場合は時間がたつのを早く感じるし、逆に暇を持て余している時はゆつくりと感じる。楽しい時や物事に集中している時は時間を短く感じるし、イヤなことをしている時（特に今日！）などは時間を長く感じる。

同じ動物でも、やはり人間は、脳が圧倒的に発達し大きくなっているため、人間が主観的に感じる時間は、客観的に時計で計った時間とは異なるような気がする。常日頃は、時間というものを1秒とか1分、1時間、1日、1週間、1か月、1年……といったように、物理的、絶対的な単位を基準

に考えるが、その基準と比較して人間は主観的な時間の長短を意識しているとも言えるのではないだろうか。

客観的な時間という尺度ではなく、主観的に感じる時間を自らの尺度とするように意識することが、人生をより充実させることができるのではないかと、私は考える。つまり、主観的な時間が短いと感じることができれば、そのことは、充実した時間を過ごしたことの証であり、結果として多くの「思い出」を残すことができる。また、主観的な時間は、充実した人生を表す尺度であるが、過去を振り返ったときの「思い出」の量が充実した人生の尺度とも言えるのではないかと考えている。

充実しているときは時間がとても短く感じられるが、後から振り返ってみると大変長く感じられるということがある。だからだらした時を送っているときは、全くその逆である。これは、充実しているときは、「思い出」がたくさんあるので、そのときは短く感じて、後で「思い出」を辿ると、長く感じるのである。「思い出」の量は、自分が全力を尽くしたことについての達成感、あるいは失敗に關しての積分値ではないだろうか。これが自分の人生をより豊かに、より充実したものにするのではないだろうか。海外旅行を例にとっても、振り返ると学生時代にバックパッカーをしていた時期があったが、その頃の記憶は、ツアー等に比べて、「思い出」の量に格段の開きがある。

限りある時間

一方、時間をどのように捉え方としても、当然のことながら、客観的な時間は時を刻んでおり、

人が持つ時間は限りあるということも、まだ事実である。

日本人の2003年の平均寿命は女性が85・33歳、男性が78・36歳といずれも4年連続で延び、過去最高を更新している。今後、医療技術の進歩があるかもしれないが、現在を生きる人たちについては、残された時間が大幅に増加することはないと思う。

今、私は31歳である。仮に平均寿命を全うするとして、人生という視点でみれば、あと50年が残された時間である。日本人の平均寿命に対し、4割の状況であり、あと10年で残りの人生が寿命の半分以下となってしまうのである。

しかし、自分を含め、多くの人は己の歳については無頓着で、危機感を全く感じていないと思われる。人はなぜ今日終わるかもしれない人生を、まるで空気のように無限に感じてしまうのだろうか。

思うに、ひとつの理由としては、死というものが遠い存在となっているとも考えられる。日本でも戦時中においては、戦死または空襲等で寿命を全うできないことが身近に存在しており、今この時期を大切にしなければ明日はないかもしれない社会であった。

しかし、今の日本は、平和な社会でそれ自体は素晴らしいことであるが、明日は今日の延長に過ぎず、緊張感の少ない社会となったことも事実である。

限りある時間を有意義に過ごすためには、時間は無尽蔵ではないことを念頭に置き、いかに「思い出」の量を増やすかということだと思う。そのためには、何事に対しても失敗を恐れずに挑戦し、自らが行動することが必要となってくると思う。果敢な行動でたとえ失敗したとしても、その時は一時辛いかもしれないが、「思い出」は大きくなる。当然のことながら、行動にはそれなりの熟慮が必要

ではあるが、行動しなければ何も生まれない。行動せずに机上の空論を唱えることは容易であるが、何も行動を起こさないほど無責任なことはないと思う。今、行動した結果を悔やむ方が、「あの時、なぜ行動しなかったのか。もう本当に時間はなくなつた」と悔やむより幸福であると思う。精一杯やったことについては、たとえ失敗しても大きな「思い出」として残り、また、それを糧として成長していけるのではないか。挑戦することからすべては始まり、その行動が、「思い出」の量を増やしていくのではないか。

やういふ

今の自分を見つめ直してみると、どこまで時間を意識し行動できているかというところ、正直なところ、できているとは言えそうにない。ここまで「塾誌」で思うがまま書いたことも、詰まるところ、そういう自分への反省および将来の自分への戒めから出てきたのだと思う。ただ、過去の自分と違ふと思えるのは、これに気づいた自分がいることである。

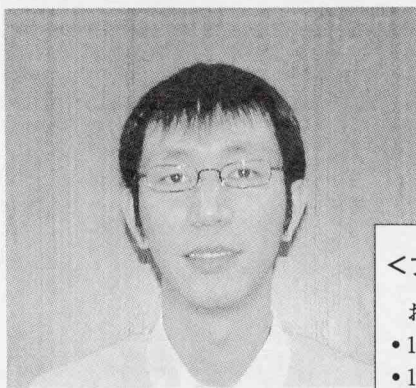
今後の人生をより充実したものにしていくなには、何事にも挑戦していくことが必要であるが、今までに経験したことのない困難や逆境に出逢うこともきつとあるであろう。

中国の後漢書に「疾風に勁草を知る」という自分の好きな言葉がある。勁草とは大地にしっかりと根を下ろした強い草のことである。普段は同じに見える草でも、疾風（強風）が吹くとその強弱がはっきりわかる、つまり、逆境になったとき、困難に直面したときこそ初めてその人間の真価が分か

るということである。この言葉のような、力強い「勁草」となれるように過ごしていきたいと思う。振り返れば、第16期産政塾の第1回は平成17年1月19日であった。折しも、前夜に第1子が誕生し、ほとんど眠らずに、開塾式に出席したことが思い出されるが、その子供も10ヶ月になろうとしている。当然のことながら、人生は自分ひとりのものではなく、共に時間を共有する家族・友人・同僚等と一緒に築きあげていくものでもあると思う。

今回の産政塾では、業種の垣根を越えた様々なメンバーが集い、その交流を通じて多くの事を吸収し、自分自身を見つめ直すチャンスを得ることができたと思う。産政塾事務局の皆さん、第16期塾生の皆さんとは充実した時間が過ごし、「思い出」も残させていただき、ありがとうございました。そして、今後ともよろしく願います。

『殻』と向き合うことが大切



トヨタ紡織株式会社

小川 恵 孝

<プロフィール>

おがわ しげのり (32歳)

- 1973年 2月 愛知県江南市で次男として誕生
- 1991年 4月 豊田紡織(株)入社 (現トヨタ紡織(株) 人事部配属
以来、人事部にて労務・福利厚生を担当
- 2005年 1月 産政塾に入塾
…人生で初めての塾通い!?

【家族構成】 妻 さおり

子 夢叶 (ユウト) 3歳

【趣味 ?】 行くあてのない“無意味なドライブ”、パチンコ (よく禁止命令が…)

1、なんだろう？

04年10月に会社が合併し、その混乱も落ち着くどころか年末を迎えるにつれ、ますます多忙となってきた12月に上司に呼び出された。“なんだろう？”と思ひながら話を聞くと、「産政塾に参加しないか？」とのことだった。“塾？産政塾？なんだろう？”分けもわからないまま、あまりにも業務の忙しさの故、その場で「分かりました」の返事をし、申込書を受け取った。何とも立派な申込書。“これはただ事ではなさそうだ！”上司から、申込書を記入しFAXをするよう指示されたが、そこには申込みの動機を記入する欄が…。どのようなものか分からない産政塾についての申込みの動機…？

“なんだろう？”動機…。動機…。なかなかすぐに浮かんでこない。“上司に勧められて”と書くわけにもいかないし。もう一度申込書を読み返し、とりあえずこう綴った。

『自分を見つめ直す絶好の機会。異業種の人たちとの交流の中で、新しい発想や広い視野での判断力を身につけたい』と…。

この言葉が、私が殻の外へ踏み出す第一歩となったのだが、正直なところ、このときは綴った動機に、自分自身の気持ちが負けていたのは確かであった。

2、参加するからには…

1月。開塾式。ようやく第16期産政塾のはじまりだ。「よし、頑張るゾ！」と言いたいところで

あったが、このときの気持ちはこの産政塾全体を通じて、一番不安であったときだった。私の性格上、知らないものに対して飛び込んでいくことは、かなりの勇気が必要とする。全く面識のない方々と集い、共同で何かをする。ましてや、その何かさえわからないのだから…。

そんな思いの中、開塾式に参加をしたのが、夜の懇親会の時には、全く気持ちが変わっていた。産政塾がなんなのか？どのような人が参加しているのか？これから何をやっていくのか？開塾式に参加し、その不安がとれたからだ。“何があっても、すべての企画に参加するゾ！”参加するからには、前向きに取り組んでいこう”と思ったのも開塾式のときだった。

3、カラ・カラ・カラ（空から殻）

産政塾の話がある前、『殻』から連想されるものといえば『卵の殻』や『貝殻』というくらいしかなかった。『自分の殻』という言葉は、よく耳にするが、それを自分にあてはめて考えることはなかった。『自分の殻』は形が見えるわけでもなく、また他の人と比較しても、これが『殻』だという絶対的なものがあるわけではないが、人それぞれ違った『自分の殻』は必ずあるものと承知のうえで…。『自分の殻』を意識していなかったというより、意識したくなかったのだと思う。その一番の理由は、前に一歩踏み出すための勇気がなかったのだ。今の状況に決して満足しているわけではないが、このまま平穩に過ぎていくことと、自分を見つめ返し、さらに違った自分を見つけ出すためにあらゆることに挑戦し続けていくことを天秤にかけたとき、今までずっと、前者を選択してきた。

過去の自分を振り返り、『挑戦』という言葉に前向きに取り組んできただろうか？少なくとも、社会人となつてからは「はい！」と自信を持つて言えないと思う。仕事をしていく過程で、必要な知識や経験や技量を身につけていくことは当然であるが、今思えば、それは全て仕事に必要な最低限のレベルであり、それ以上の何かを追い求めていた訳ではなかった。

産政塾で体験した4回の企画（女将塾体験は、残念ながら欠席）は何か挑戦していくという自身『空』であつた気持ちをいま一度見つめ返し、常に『殻』を意識できるきっかけになつた。この塾誌を書いている今、『自分の殻』について考えている。ここに書き留められるような、上手い表現ができない……。でもそれが、『殻』なのではないだろうか。やはり、前述したように、『殻』は形が見えるものではない。が、常に自分の心の中に住み着いていて、確かに存在している。産政塾に参加する前は、その存在をも気づこうとしなかつた自分であつたが、今はしっかりと向きあつていられる。

この先、『自分の殻』がなくなることはないと思う。それは、以前のように殻を意識せず、ただ平穩に過ごすということではなく、常に何かを意識するからこそ、心の中に住み着いているからである。これからの人生において、様々なことに対し『殻』と向きあい、それを破ることで、成長しつづけていきたいと思う。

4、かつこいいパパに

我が家には3歳になつたばかりの子供がいる。夢を抱き、それを叶えられる人になつてほしいと願

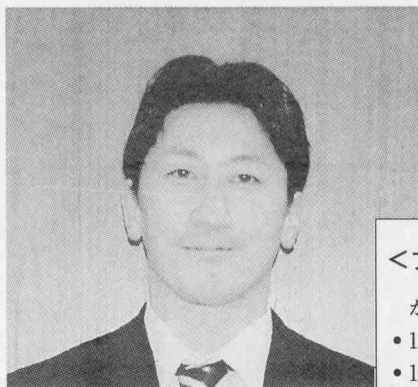
い、夢叶（ゆうと）と名付けた。毎日、保育園に通い、いろいろなことを学んでくる。というより、ただひたすらに自分の知らないことに興味をもち、見よう見まねで行動している。ただ、それだけのことである。〃何か目標を定め、それに向かって『挑戦』をしている〃という意識は、本人にはないと思うが、いつ見ても、自分の全力で何かをやっている。（調子に乗りすぎるのが、たまにきずだが…）悪いことをすれば叱られる。叱られて初めて悪いことと知る。日々、その繰り返しである。でもそれは、失敗（＝叱られること）を恐れずに何事にも『挑戦』しているという表れである。そういう姿を見てみると、親として恥ずかしながら、勇気・元気をもらうこともしばしば…。いつまでも、『挑戦』する気持ちを忘れずに成長してくれればいいのだが、『挑戦』することから逃避するときがくるかもしれない。そのときに、親としてどうするのか？答えは簡単である。子供に態度で示すことだ。言葉で伝えるのはとても容易である。ただ理想を伝えればいいのであるから。でも、それでは何も伝わらない。よく思うのだが、子供には大人ではかり知れない能力がある。子供は親の姿をしっかりと見て日々成長している。態度で示すには、当然、私自身が『挑戦』を忘れてはいけない。私の『挑戦』する姿を子供にも感じとってもらい、子供にとって〃ずっとかっこいいパパ〃であり続けたと思う。子供と一緒に、いつでも大きな夢を抱き、それを叶えるため『挑戦』していこうと思う。

5、最後に

小田桐塾長をはじめ、事務局の松井さん、塾生の皆さん、それと今回の企画にご理解・ご協力をい

ただいた全ての方々にあらためてお礼を申し上げたいと思います。第6回企画…愛・地球博のとき、担当したボランティアで他のメンバーにつくってもらった家族3人のポストカード（ケニア民族衣装を着ての写真撮影）は今でも大切にしまっております。

「Do My Best !!」



(株)豊田自動織機

加藤 基成

＜プロフィール＞

かとう もとなり (36歳)

- 1969年 5月 愛知県瀬戸市生まれ
- 1992年 4月 (株)豊田自動織機入社
1年間の工場実習（フォークリフトの製造）
- 1993年 4月 人事部福利厚生室へ配属
- 1997年 7月 人事部人事室へ配転
- 2000年 9月 人事部人材開発第一室へ配転
- 2002年 1月 人事部人事室へ配転
現在に至る

＜家構成族＞ 妻 伸子(のぶこ)

長女 夕貴(ゆうき)小学校3年生

長男 翔大(しょうた)保育園年長

＜趣味＞ スポーツ全般、映画・ビデオ鑑賞、パチンコ、麻雀など

はじめに

産政塾16期生として取り組めたことに非常に感謝しています。

小田桐塾長、事務局の方々、16期生の皆さん、誠にありがとうございました。

産政塾へのチャレンジは上司からの薦めからというより、上司から「塾生として登録しておいた。非常に勉強になるから、しっかりと取り組むように!!」そのうち案内がくるから・・・」と言われたことから始まりました。

産政塾? 「産政研フォーラム」の存在は知っていましたが、産政塾の内容までは全くといっていいほど知らなかったのです。そのため、今までに経験された諸先輩方へ話をいろいろと伺い、心の準備をすすめてきました。取り組む方には「Do My Best!!」と・・・。

全てのテーマに対して私の思いや感想を記すと長くなってしまうので、以下は、特に印象に残っていることを抜粋して記したいと思います。

第1回産政塾「開塾式」

・自己紹介と各々の「登録テーマ」を発表と記載された開催案内が届きました。送られてきた「自己紹介シート」および「登録テーマ用紙」を持参し、第1回産政塾に緊張して参加しました。

● 16期生の塾生は皆、口下手と言いながら、自己紹介の長いこと、長いこと。事務局から自己紹介は一人あたり2〜3分でお話がありました。私が筆頭といっても過言ではありませんが、一人あたり平均6〜7分は自己PR。長い人では10分程度も……。結果、事務局の方々の自己紹介、一番重要な小田桐塾長の挨拶が簡単なものとなってしまいました。今後のテーマ登録と、取り組みがうまくまとまるのか？スムーズに進めることができるのかと一抹の不安が……。

● A〜Eの各グループに分かれ、グループの取り組みテーマ登録の時間となり、私はBグループ。私が考えたテーマは3つ。「サスケに挑戦」、「東京デイズニールランド見学」、「中京女子大学レスリング部への挑戦」でした。特に、「TV放映のあるサスケ」に挑戦したいとグループデイスカッションに臨みました。見事、テーマに登録と言いたいところですが、残念ながら却下。我々の年齢および生活状態ではそのテーマは無理だろうということになりました。

● 同じグループとなった塾生の提案テーマも踏まえ、我々Bグループで企画することになったテーマは、「接客マナーの体得とサービス精神とは」を追求すべく、「東京デイズニールランド見学」に決まりました。

その結果、Bグループのリーダーはテーマを考えた私となってしまいましたが、リーダーを務めさせていだいたことで、リーダーの難しさ、大変さ、楽しさを肌で感じ取ることができ、非常に良い経験ができたと思っています。

第2回産政塾「官民の社会福祉への取り組みを学ぶ」

・下肢に障害を持った祖父、視力に障害を持った祖母と同居し、子供時代を過ごしていたので、このテーマは非常に興味深かったこともあり行政の取り組みや考え方を深く知りたい気持ちで満ちていました。実際に、社会福祉事業に積極的に取り組んでいる高浜市役所を訪問し、行政と民間企業、市民が一体となった社会福祉の必要性について学び、その後、介護教育の現場を知るために日本福祉大学高浜専門学校を訪問、介護福祉の役割と介護のポイント（思いやりの心）について実体験を通じ、改めて、介護の難しさで大変さを実感することができました。民間の取り組みについては、障害を持っている人に働く場を提供して事業を展開している中電ウイング株式会社を訪問し、人を大切にする経営姿勢と従業員が自らの可能性を求め挑戦している姿に、大きな感銘を受けました。社会福祉に対して「今、自分のできることは何か、何をすべきか」を今一度考えることができた大変良い機会となりました。

第3回産政塾「世界を目指す選手から夢に向かって挑戦する姿勢を学ぶ」

・Bグループが企画担当することになった第3回産政塾ではとんだハプニングが起きてしまいました。リーダーとして、テーマ実現に向け、オリエンタルランド様へ問い合わせ、ネゴシエーションを試みましたが、今年については他からの見学や体験学習などすべてお断りしているとバッサリ、「東

京デイズニールランド見学」の夢が絶たれてしまったのです。

●産政塾事務局の松井様にその旨の連絡と今後の対応について相談。再度、取り組みテーマについてBグループで検討することとなりました。とは言うものの、Bグループのテーマ実施までの期間が短く、皆が集まり論議する時間も残されていない状況でした。そこでリーダーの特権という私がままで、Bグループの取り組みテーマを「中京女子大学レスリング部に挑戦」へ変更。産政塾事務局の松井様が中京女子大学レスリング部でコーチとして活躍している方を知っていると伺い、その方を通じて中京女子大学レスリング部へ訪問、栄和人監督へ産政塾メンバーで体験入部させていただく依頼に行くことにしました。

殻を破る瞬間とはこういった時なのでしょう。か？女子大学の門をくぐり、レスリング部が練習している体育館へ足を踏み入れました。

感想を一言で表すとするならば、そこは「アマゾネス軍団」。アテネオリンピックで金・銀メダルを獲得した吉田選手、伊調選手（姉妹）を筆頭に鋭い目、やる気に満ちた表情、そして鍛えぬかれた体の女性たちの中を通り抜け、栄監督のもとへ。

私が目に入らないのか……。機嫌が悪いのか……。相手にされない。栄監督から「後にして、そこで待っていて」。内心「このテーマも実現が難しい。きつと断られることだろう」と思い始めていた。栄監督の熱血漢ある大きな声、選手の「ハイ」という返事。そして体と体が、激しくぶつかり合う。とんでもないところに来てしまった……。激しい練習を見学しながら待つこと数十分、「な

んの用件でしたか？」

監督に中部産政研「産政塾」の存在、訪問の理由を説明し、産政塾メンバーで体験入部させていたのだきといとお願ひすると「分かりました。本来なら学校側に許可を得なければならぬところですが、臨機応変に受け入れましょう」と引き受けていただきました。

体験入部当日は、監督が言う「臨機応変」に翻弄されましたが、それがまた非常に楽しかった。予定していた時間に練習場に伺っても誰もいない。着替える場所もここは女子大だから、トイレも困ったな。今後のスケジュールもないので、適当に考えましようといった具合。

最初に、レスリング部の坂本コーチからレスリングのルールや基本動作を簡単に学び、その後、栄監督の体験談と教育理念を伺い、アテネオリンピック金メダリストの吉田選手と懇談を経て、実際に練習に参加。学生時代ラグビーをしていたので、女性に負ける訳にはいかないと気合を入れました。塾生が一人、二人と練習を脱落、私も昔のように体がついていかず監督に「ありがとうございました。これが限界です」と頭を下げた。

最後に栄監督が「うちの選手と産政塾生とで勝負しましょう、産政塾生20人のうち、6人勝てば良し、勝てなければ罰ゲーム」と言われ勝負をすることに……。ルールは相撲と同じ。レスリングのコートから押し出されたら負け、足の裏以外が床についたら負けということで試合が始まり、私は吉田選手と対戦させていただくことになった。

対戦結果はというと……。信じてもらえないかもしれませんが1回目は同時に倒れたとの判断で取り直し（私は勝ったと思いますが・）、2回目は押し出しで私の完全勝利。産政塾生皆で大

はしゃぎ。悔しさあまり、吉田選手が采監督にもう一度、勝負させて欲しいと。3回目は「うつちゃり」で私が勝ったと今でも確信していますが、監督は「今のは、肘が最初に落ちた」と・・・。吉田選手の勝利を宣言。4回目は私の体力の限界で対戦できず・・・。

吉田選手との対戦で感じたことは相手が誰であろうと全力で戦うところ、恥ずかしい戦い方をせず、相手には失礼な態度を取らない、すばらしい選手でした。

チームとしての結果は20人中5勝しかできず、罰ゲームを受けることに。この罰ゲームがまた、焼肉を選手におごるということに・・・。

この貴重な体験を通じて学び、感じたことは久々に闘争本能を呼び起こすことができ、チャレンジすることの大切さ、目標と目的を明確に示すことの重要性、夢に向かって、情熱を持ち、無我夢中に取り組むことのすばらしさ、かつこよさ。

産政塾のテーマ「殻の外へ踏み出そう」は、こういった情熱を持ち続けることではないのでしょうか。

会社においても、家庭においても、男として、人間として、彼女らに恥じない生活・人生を送るために、いろいろな場面、状況において

「D o M y B e s t !!」を心がけたい！

第6回産政塾 愛知万博でボランティアを实践!!「ボランティア」について考える

16期生として最後のテーマ取り組みとなった「愛知万博でボランティア」、客としてさまざまなテーマパークを訪れたことは豊富にあります。お客様を受け入れ側の立場で経験したことがなかったこともあり、愛知万博でのボランティアは非常に良い経験でした。

お客様との接し方、トラブル時の対応方法、愛知万博の運営方針など、お客様の視点だけではなく、運営側からの視点や考え方を知ることができたことは今後の業務に大いに役立つことだと思います。

最後に

産政塾のテーマに取り組む中で、自分自身を振り返ったり、見つめ直したり、いろいろな方々の考え方・意見・思い・取り組み姿勢を知ることができ、自分を磨く、また成長させることができました。そういったことから、産政塾は貴重な機会であるので、一人でも多くの方に、経験していただきたいと思っています。

産政塾を経て感じた、私にとっての「殻を破る」とは、現状に満足することなく、また甘んじることなく、常にいろいろな事に興味・好奇心・関心を持ち続け、その世界に足を踏み入れ、チャレンジすることで、自分の感性を磨き高めていくこと。その気持ちを忘れないこと。できない理由を並べるのは簡単ですが、できる方法を常に考え行動に移し、全力を尽くすこと。その努力を積み重ねることだと思っています。（結果、人・地域・社会に貢献できれば更に良い。）

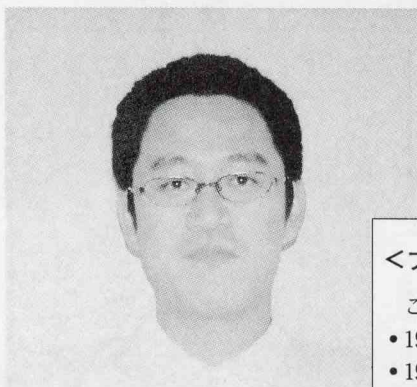
産政塾では、他業種にわたりいろいろな方と知り合うことができました。リーダーシップのある方、人前で話すことが上手い方、仕事に使命感と情熱を持っている方、いつも真剣に取り組む方、鍋奉行の方、夜の世界に詳しい方、積極的行動派の方など、皆さんと接することで、良い意味でさまざまな刺激を受けました。

せっかく築いた人間関係を産政塾の活動期間だけで終わるのではなく、継続的に仕事やプライベートを通じて、大切に深めていければと思っています。

塾長はじめ、事務局の皆さん、16期生の皆さん、大変お世話になりました。さまざまな場面でご指導、ご協力賜り誠にありがとうございました。今後とも末永くご指導をよろしくお願いいたします。



「基本の徹底」



トヨタ自動車労働組合

小西圭造

<プロフィール>

こにし けいぞう (34歳)

- 1970年 北海道生まれ
- 1993年 トヨタ自動車(株)入社
財務部へ配属
- 2000年 法務部へ異動
- 2004年 トヨタ自動車労働組合 執行委員
現在に至る

<家族> 一人暮らし

<趣味> スポーツ観戦、映画・音楽鑑賞

#1 「開塾式」

当初、自分が第16期産政塾へ参加する旨を聞いた際の第一印象は、恥ずかしながら「産政塾って一体何？」や「業務と両立できるのかな？」といったものであった。疑問や不安が先立った出会いではあったが、開塾式には、普段の会社生活では経験できないものに出会えるとの、期待や楽しみも持ちながら臨んだ。

振り返れば、開塾式では、まだメンバー全体が硬い雰囲気だった（今では全く想像できないが……）。しかし、自己紹介の場面では、各自が持ち時間を大きくオーバーし熱弁を振るい、事務局が取り回しに苦労していたことや、初回ながらメンバーのやる気や前向きさがヒシヒシと伝わり、自らも気合を入れ直していたことを思い出す。

以下では、全ての課程が終了した現在、自分なりに感じたところを、各活動に沿って簡潔に記していきたい。なお、#6「万博ボランティア」は、業務の都合で不参加であった。世界的にも注目された愛知万博での活動でもあり、とても楽しみにしていたので、非常に残念である。

#2 「官民の社会福祉への取り組みを学ぶ」

高浜市役所を訪問し、持続可能な社会福祉の取り組みに関してヒアリング。今後のキーワードは「予防福祉」であると同った。確かに、全員が健康状態を維持して福祉を必要としない期間が長くな

れば、各自も幸せであり、福祉費用もかからない。ある意味で基本的な発想である。しかし、「予防福祉」の取り組みの推進を考えると、個人レベルでは、各自の意識がしっかりすれば取り組みようが、市民や事業体を巻き込んだ街全体レベルでは、一体どこまで浸透し、広がっていくのか？より大都市の場合はどうか？等に不安も覚えた。いずれにせよ、一朝一夕で成しえる課題ではなく、地道な取り組みの積み重ねにより、徐々に各自の意識も変わっていくのであろう。高浜市の他に先駆けた街全体での取り組みは、今後の試金石としても非常に重要であり、今後注目していきたい。併せて、自身将来に向けた健康にも意識しなければ…と現在の無謀な生活スタイルに反省しきり。

また、中電ウイングを訪問し、障害者ながらあふれる意欲で明るく前向きに仕事をこなし、努力している姿や、人を大切にする姿勢・福祉とビジネスとの両立に向けて懸命に努力するスタッフの姿を見て、自らも大いに感化。本やテレビなどから得た知識や想像の中ではわかっていたつもりの世界だが、まさに「百聞は一見にしかず」を実感。「現地現物」ではないが、何でもこの目で見てみたいと…との基本の重要さも再認識した一日であった。

#3 「世界を目指す選手から夢に向かって挑戦する姿勢を学ぶ」

世界屈指の選手を多く抱える中京女子大学を訪問。さぞ近代的なトレーニング施設等を想像していたが、剣道部等と共用しているごく普通の武道場で、殺風景な第一印象であった。強い選手の育成に必要なのは、育成の内容そのものであり、立派な施設ではないようだ。

監督さんは、一見、気さくで優しいおじさんであるが、選手の指導は厳しく、レスリングにかける情熱が見て取れる。しかし女性への指導・接し方に気を使う繊細な一面も見ることができ、非常に興味深かった。また、レスリング部の練習を実際に体験させていただいたが、基礎的なサーキットトレーニングの段階で早々にダウン。酸欠状態で薄れる意識の中、黙々とトレーニングを続ける選手達を見つつ、「世界を目指す」自体は派手な言葉だが、その根底にあるのは「基本の徹底、絶対的な積み重ね」であることを、大量の汗と全身筋肉痛と共に実感。また、練習の中で選手と実際に組み合ってみたが、「小さな体のどこにこんなパワーがあるのか？」と思う間もなく投げ飛ばされ、彼らの力強さ・奥深さを、スリ傷と共に身をもって確認。「ここのメンバーで選抜チームを作れば、世界選抜にも勝てるな」というスタッフの言葉も聞かれたが、選手の面々を見渡すと（世界トップレベルの選手がゴロゴロしている…）、その言葉の確からしさ、彼らの確信に満ちた自信を感じ取り、やっぱり世界は違うなあ、と感服。

#4 「女将塾を訪ねて、『CSと経営学を学ぶ』」

訪問先の旅館の入るやいなや、高級さを出しながらも、手作り風な暖かさ・優しさもある雰囲気包まれながら、「ああ、いい旅館というのはこういう所をいうのか」と一つ学んだ。しかし、その後すぐに、女将塾の皆さんのパワーに圧倒されることになった。

女将塾々長や大女将より、高い理想や色々な苦労話など興味深いお話を傾聴しながらも、何より一

番印象深かったのは、塾生達の目の輝きである。自分のやりたいことや目標に向けて迷いなく全力で取り組む姿には、ある種の爽やかさや美しさが伴っている。また、食事の配膳・掃除・布団の上げ下ろしといった旅館運営の実務を体験し、一見華々しい世界も、見えない舞台裏にある非常にたくさん業務の積み重ねに支えられている、ということを改めて確認。前回のレスリングでも体験したが、「何事においても、基本の積み重ねがなければ成り立たない」ということを叩き込まれた。一見単純に見える作業でも、彼らのおもてなしへのこだわりや、愚直な取り組み・改善の積み重ねによって、お客様に優しくかつ効率的になっている。ムダのない動きはどことなく気持ちよく見えるものである。女将塾生達の容姿も勿論だが、その立ち振る舞いも美しいものであった。翌朝、旅館を離れる際「できればもう一度泊まってみたい」と素直に感じた、産政塾生ではなく一人の宿泊客になっている自分がそこにあった。

＃5 「楽天球団と仙台市役所を訪ねて『殻を破る』夢と挑戦の姿を仙台に学ぶ」

早朝6時集合で、金山駅から名鉄にてセントレアへ移動した。名鉄労組の富田さんのご好意により、運転席横で見学するチャンスを得た。JR西日本 福知山線での脱線事故の記憶が生々しかった時期だけに、興味深く電車の運転業務を拝見した。実に細かい一つひとつの動作に指差し声出し確認が行われ、秒単位でチェックポイントの通過確認を行う運転手からは、ピンとした緊張感が伝わってきた。旅客業の大前提である「安全な運行」には、地味ではあるがやはり「基本の徹底」が重要であると再

確認した。途中、自動車事故の影響で線路が約3時間通行不能となり、フライトに間に合わないというアクシデントに見舞われた。乗客は駅に降ろされ、バスの代替運行を行うが時間はわからない状況。当然タクシーやバスを待つ乗客で大行列ができ、運行再開はいつかと駅員に詰め寄るビジネス客、タクシーに乗る順番を巡って争う女性客等、時間と共に乗客は不安と混乱の度を高めていった。そんな中、駅員を手伝う形で名鉄労組の富田さんを中心に、乗客やタクシーの整理、荷物の積み下ろし補助等、現場対応のお手伝いを自発的に行なっていた。突発的事情の中、今更ながら、産政塾生の行動力・団結力を再認識させられた。現場の沈静後、運行は再開したものの、新幹線での移動となり、結局15時過ぎに無事仙台に到着し、先発隊と合流。残念ながら楽天野球団のお話は伺えなかった。

楽天では、Jリーグを参考とした、地元を中心とした盛り上げに注力しているとのこと。地元密着型のJリーグが定着するのに10年近くかかったことを考えると、楽天の場合も同様のスパンが必要なのかもしれない。この取り組みも、根底は「地元に着し、地元に着く」という基本を、どれだけ本気で継続できるかではないか。ボランティア達の輝く目を見てみると、つい大丈夫ではないかと思ってしまう。三木谷オーナーの一層のテコ入れにも期待したい。

#6 最後 に

普段の会社生活（自分の意識とは別に徐々に何らかの型にはまり、狭い世界・狭い発想に慣れてしまっているのではないだろうか）では経験できない様々な内容に触れ、視界が広がった、ハッと気付

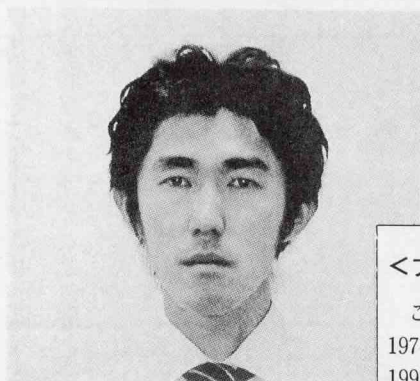
くことが多かった。これだけでも、従来の殻から踏み出し、何らかの前進があったと思う。特に、活動を通じて様々な場所を訪れ、「基本の徹底」の大切さを何度となく目にしてきた。「基本の徹底」、言葉にすれば簡単で、時には安っぽく聞こえそうだが、愚直なまでに実践を貫くことは非常に難しいものである。地道にしかし確実に自らの業務・道に打ち込むプロフェッショナルな人々の姿を見て、改めてこの言葉の重み・深さを学んだ。目新しい意味での踏み出しではないが、確実に自分の殻を破ることができたと感じている。また、産政塾を通じて、様々な会社・組合のメンバーと活動を共にし、彼らの色々な考え方・個性に触れることができた。普段の会社生活では、仕事で関わる相手が段々と固定化していく気がする。これ自体は、ある程度仕方ない事とはいえ、産政塾という異業種交流の形で、新たな発想・視点に触れることの大切さを改めてかみ締めた。この点でも殻が少し破れたのではないかと思う。

グループ毎の企画段階では、できるだけ楽しい内容とするべく、より深い議論を行った。結果的に、兵庫県は城崎温泉での企画となったが、(実際には「なるべく遠くに行きたいなあ」といった思いもあった・・・)ここにもある種の殻があるように思う。仕事の種類や異動などにもよるが、仕事・生活の場所も、気が付くと固定化していくというのがサラリーマンの特性。単純ではあるが、目先をかえることも殻を破る一つの要素ではないだろうか。16期では愛知県外へ二回(仙台・城崎温泉)訪ねることとなったが、これも重要なことではないか。予算等の関係もあるが、今後色々な場所へ行つて様々な刺激を受けられるような活動であつて欲しい。約半年の間、月に1回程度でしか顔を合わせていないのに、様々な会合を共に進めてきたことで、ずっと前からの知り合いであるような感覚

が生まれている。このような機会には、今後めったに出会うことはないだろうと感じる。人と人との関係は、関わる時間や関わりの深さで決まっていくというが、短いながらも非常に深みのある関わりが持てた。その意味でもいい経験をし、殻を破ったのではないかと感じる。

グループメンバー、事務局の松井さんには特にお世話になった。改めてお礼を申し上げたい。

9 日間の塾生活を振り返る



デンソー労働組合

小林 竜太郎

<プロフィール>

こばやし りゅうたろう (31歳)
1974年12月 名古屋市に生まれる
1998年4月 (株)デンソー入社
2004年9月 デンソー労働組合執行委員
現在に至る

<家族> 妻1人、娘2人

<趣味> サーフィンと音楽だったが、今はお酒中心

「殻の外へ踏み出そう」をテーマに24名の塾生が集った第16期産政塾。

たった半年の期間、実際の活動日からすると9日間という短い間であったが、私にとって非常に印象に残る塾生活だった。

まずは、それぞれの企画への感じたところを綴ってみる。

【第0回（塾生活0日目）産政塾入塾】

産政「塾」

そもそも勉強嫌いの私にとって「塾」と聞いて良い印象が湧くはずもない。

しかしながら、今年の塾生は僕で決定した。先輩達はみんな忙しいから、新人執行委員の俺に回ってきたのか：などと思いつつながら去年塾生だった先輩に聞いて見ると「あれはいい経験になるよ」との声。ちよつと安心して入塾申込書を書く。

しばらくして「ようこそ産政塾へ！」とキャッチーな案内が届いた。早速開いて読み進んでいくと、「各自、企画を立案し開塾式に持参すること」早速、宿題!?

【第1回（塾生活1日目）開塾式】

1月19日（水）24名の塾生が集い、開塾式を行った。この開塾式での一番印象に残っているのは、塾生の自己紹介だ。この自己紹介を通じて殻を破ったかどうかは別として、大半の塾生が各自の持ち

時間を破っていた。時間大幅延長で事務局の松井さんは冷や汗ダラダラ、時計と「にらめっこ」状態。その後、グループ分けをして、今後の企画案についてグループディスカッションを行い、近くのお店で懇親会。今から思えば、まだ皆さんぎこちなく、産政塾風に言えば「殻を守っていた」。

【第2回（塾生活2日目）官民の社会福祉への取り組みを学ぶ】

第2回では中電ウィングを訪問した。中電ウィングはチャレンジジド（中電ウィングでは障害者をチャレンジジドと呼んでいる）の雇用とビジネスの両立を目指している会社である。正直、「障害者の雇用とビジネスの両立は無理。結局、CSRの一環としてやっているだけじゃないのか」と思っていた。しかし、中電ウィングを知るにつれ、私が感じていたことは、自分の既成概念が作り出した殻であつたとは…

訪問して一番初めに驚いたことはチャレンジジドの就業意欲の高さである。企業は従業員を人財と表現することが多いが、中電ウィングのチャレンジジドたちは、自分たちの持てる能力を絞り出すことに必死に努力し、いきいきと働く、まさに人財であつた。

確かに、チャレンジジドの求人はいくつか、そもそもの就業意欲が高いのかもしれない、しかし、就職人気ランキング上位の企業も競争率だけでは負けてないはずだ。それなのに、このチャレンジジドと同じくらい意欲を維持できているのは、一握りではないだろうか。

私もチャレンジジドたちの働く姿を思い出すと、意欲がグンと沸いてくる。（残念なことに、仕事中は余り思い出せずにいるが…）

なぜチャレンジドたちは高い意欲を維持できているのだろうか。その要因として、中電ウィングで働く健康者たちのマネジメント、そして、熱い情熱が背景にあると感じられた。

（ちなみに、健康者の人たちは中部電力からの出向者であるが、全員、社内公募で自ら異動してきたとのことである。）

健康者たちはチャレンジドたちの能力を最大限に引き出し、自己実現の場とすることに全力を注いでおり、チャレンジドたちと同じ目線で話し合い、議論し、時には愛情を持って厳しく指導していた。できない理由なんて無数に見つけられそうな状況の中、従業員全員が何事にも諦めずに取り組んでいる姿には感動した。

チャレンジドたちと健康者たちの高い意欲を持つてすれば、「チャレンジドの雇用とビジネスの両立」という非常に高い目標を達成できると、今は感じている。

【第3回（塾生活3日目）夢へ向かって!! いざ中京女子レスリング部へ】

第3回は中京女子レスリング部への体験入部である。

中京女子大レスリング部と言えば、シドニーオリンピックで伊調千春・聲、吉田沙保里の3人のメダリストを輩出した名門クラブである。ミーハーではあるが「メダリストに会える」、「女子大潜入（高校の学園祭以来だ!）」でかなり浮かれて参加した企画である。

まず始めに、中京女子大の授業に参加し、レスリングのルール、基本を学んだり、色々な運動を行った。レスリング部の栄監督としては、準備運動のつもりだったのかもしれないが、入社以来、

ビールジョッキがダンベル代わりになっている塾生の大半としては、もうバテバテであつた。

そんな中、いよいよ本題のレスリングの練習スタート。サラリーマンの意地を見せたる！と意気込んで望んだが、やはりメダリストを輩出する練習メニューは半端じゃない。殆どの練習メニューは競争形式となっており、その競争に負けた人には罰ゲームとしてダッシュや腕立て伏せなどがプレゼントされる。もちろん私も多くのプレゼントを頂いた。

こうした練習もあり、塾生は次々にリタイア。塾生がこの企画のリーダーである加藤さん一人になった時点で一旦、休憩となった。その休憩中に栄監督から「レスリング部の部員たちと焼肉を賭けて勝負しないか？レスリングは無理だろうから相撲はどうだ？」の一言。交渉の末、部員と塾生の総当り戦で「塾生が5勝したら栄監督からプレゼント、4勝以下だったら焼肉おごり」で勝負することに：結果は塾生の負け。（ちなみに、4勝までは漕ぎ着け、終盤は監督もマジになっていた）

その焼肉おごりはレスリング部の新入生歓迎会として行われ、私は少しでも元を取りたいとの貧乏根性で伊調姉妹と同じテーブルに座つた。

やはり、体が資本の彼女たちの食いつぶりは圧巻である。通常（少なくとも私が知っている人たちは）、6人いてもカルビ3人前、ロース4人前、タン塩3人前：と6人前は注文しない。しかし、彼女たちは違い、すべてが人数分の注文なのだ！しかも、焼肉のみならず、キムチ、ユッケなどのサイドオーダーも全て人数分の注文であつた。焼肉の請求額が幾らになるのかビビりながらの懇親ではあつたが、いい思い出となっている。

【第4回（塾生活4―5日目）女将塾の体験を通し、CSと経営学を学ぶ】

志賀直哉の小説でも有名な城崎

とある高級旅館で女将を英才教育する虎の穴「女将塾」なるものが開塾されてるらしい。今回は女将塾への入塾である。

この企画では、経営が悪化する老舗の温泉旅館が増加する中、女将塾をなぜ開塾したか、なぜ女将塾生が必要とされるのかなど学んだが、一番印象に残っているのはバック・トゥ・ザ・フューチャーのドク博士そっくりの山本さん（男性）で、住み込みの管理人の方かと思いきや、代表取締役社長であった。山本社長は非常に豪快で、また、60歳を過ぎているにもかかわらずタフで新しいビジネスにも積極的にチャレンジする熱い情熱を持ち続けており、20歳以上も歳の離れた塾生とのコミュニケーションも昼夜問わずしっかりと取っていた。「山本社長のように年齢に関係なく新しいことにチャレンジすることを心がけて仕事に取り組みたいなあ」と感じた企画であった。

【第5回（塾生活6―7日目）企業人として社会貢献の重要性、地域と接する心構えを学ぶ】

今回は朝が早い。「金山駅6時集合！」との第1関門は寝坊せずクリアできた。しかし、その後にトラブルが待ち受けているようとは：

今回は楽天ゴルフデンイーグルスと新球団を支援する行政の訪問であるが、余興として、セントレアまでの運転席乗車体験というオプションがついていた。「いよいよ次は僕の番」という時に電車が

ストップ。まあ、しばらくしたら動くだろう……なんて考えは甘く、そのまま新舞子駅で止まってしまった。乗客の大半はセントレア中部国際空港を目的としており、これから旅行へいくと思われる人も多い。時間を追うごとに変化のない状況に怒り出す人が出始め、パニック状態になってきた。早朝の新舞子、タクシーの台数なんて限られている。駅の外を見るとやはりタクシーを待つ長蛇の列。

こうした状況の下、名鉄労組の塾生・富田さんは名鉄社員の立場で現場の対応にあたり始めた。その表情からは必死さが伝わってくる。塾生たちも、じっとしてられず、タクシー待ちの列の整理をしたり、タクシーの誘導を行い始めた。すると、パニック状態の大勢の人で混乱していた駅前が、次第に落ち着きを取り戻し始めたのである。これは乗客が代替の交通手段を確保できたためではない。なぜなら、依然として多くの乗客が駅前に溢れていた。どう見ても名鉄の社員に見えない塾生たちが必死になって対応したことで、パニック状態となっていた人たちの心に変化が生じたのではないだろうか。今から思えば、このときの塾生の行動は「殻を破った」と言えるではないだろうか。

【第6回（塾生活8・9日目）】

愛知万博でボランティアを実践！『ボランティア』について考える【】

産政塾最後の企画は、私の所属するDグループの企画で、愛知万博でボランティアを体験するというものである。そもそもの企画は私や同じグループの酒井さんが連合愛知の「れあろファミリースクール」にスタッフとして参加したことから始まる。

私自身、ボランティアなるものを一度も経験したことがない。自分のことで精一杯、とても世の中の人のために奉仕する余裕などなく、また、そんな柄でもないと思っていた。

ところが、業務の一環のためボランティアではないが、ボランティア色の強い「れあるファミリースクール」のスタッフをすることにすると、これが結構面白く、満足感も得られた。「今は仕事や育児で忙しく時間的な余裕はないけど、将来、余裕ができたときはボランティアをしてみるの也不错」と感じ、この思いを塾生にも感じて欲しいと考え、企画がスタートした。

次に、どこで何のボランティアをするか、やはり塾生にも「れあるファミリースクール」のスタッフを体験して欲しかった。そして、連合愛知の塩谷副事務局長、大橋局長に無理を承知でお願いしたところ、多大なる配慮を頂き、この企画が実現したのである。

ここで、今回、産政塾が企画した「れあるファミリースクール」を簡単に説明すると、万博会場の地球市民村で毎月約1週間、特設会場を設けて「宇宙」「水」など様々なテーマで子供・ファミリア向けに開いている体験型のイベントである。（地球市民村での開催、しかも期間限定のイベントであったが、驚くほど多くの人が来場し、入場制限を設ける時間帯もあったほどである。ちなみに産政塾が参加した8月のテーマは「世界の遊び」であった）塾生は運営スタッフとして、整理券配布係、受付係、体験コーナーの講師、記念写真撮影係などを担当。どうすれば来場者の満足を高められるか、どうすればより多くの来場者に楽しんでもらえるかを真剣に考え、工夫したり連携を取って改善したりしていた。そのかいあって、来場者から「楽しかった」「良かったわ」と声をかけられたり、「笑顔いっぱい楽しんでもらえる」光景も多く見られ、また、塾生自身も満足してもらえたのではないだろうか。

ボランティアと聞くと、「大変」といったイメージから、身構えてしまったり、ついつい遠慮してしまう人が多いのではないだろうか、私もその一人であった。しかし、今回の企画を通じて、決して

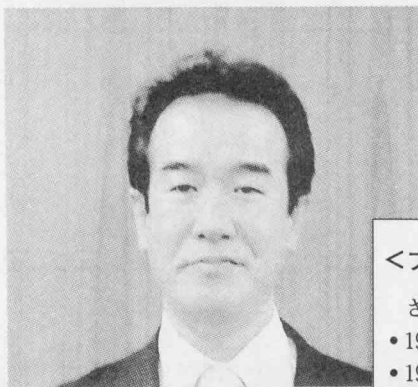
「大変」なことばかりでなく、「楽しさ」や「満足感」が得られることを塾生に知ってもらえたと感じてゐる。

【最後に】

本当に充実した塾生活であつた。楽しいことばかりでなく、企画立案などは結構大変なこともあつた。しかしながら、私の所属するDグループはみんなで役割を分担し、それぞれの持ち味を出しながら、協力して進めることができ、グループとしては殻を破れたのではないかと思う。私自身については、殻を破るまでには至れていない。しかしながら、殻の外の世界が見える穴を開けることはできた。今後、この穴を広げる努力をしていきたいと思う。

第16期の産政塾はこれで終わってしまったが、16期生としてのつながりは今後も続けて行きたい。皆さんまた飲みにいきましょう。

産政塾に参加して



豊田工機労働組合

酒 井 推 幾

<プロフィール>

さかい たいき (39歳)

- 1966. 1. 28 愛知県岡崎市生まれ
- 1984. 4 豊田工機株式会社 入社
- 2003. 8 豊田工機労働組合 専従執行委員

<家族> 両親、妻、
子供（長男12歳、長女10歳）

<趣味> 魚釣り

開塾式

私が開塾式の中で感じたことは、「みんな若いのにしつかりしているなあ……」でした。そしてこの思いは閉塾式まで変わることはありませんでした。

また、初めて顔を合わせる人達が、今の自分を一生懸命出そうと、自己紹介をしている一人ひとりの目をじつと見つめ、その一生懸命さに答えてくださる小田桐塾長の眼差しに大変感動致しました。

福祉を学ぶ

初めに伺った日本福祉大学では、鈴木先生のお話を聴く中で、鈴木先生は何を私達に伝えたいのだろうか……正直よく分かりませんでした。しかし、話を聴いていくうちに、『自分の気持ちの持ち方一つでいろんな事ができるんだよ』という事を若い私達に伝えようとしてくれているのかなと思う様になり、そういう気持ちで聞いていると「時はみんなに同じように与えられ、その時間を生かすも殺すも自分なんだ。そして年齢に関係なく、思い立ったが吉日で今から始めればいい。好奇心とそれに伴う行動力でチャレンジしていく事が自分を成長させていくカギなんだ……」という産政塾のテーマ『殻の外へ踏みだそう』をいきなり教えられた様な気持ちがしました。開塾式のときに感じた年齢の差とか忘れ一人の塾生として、この産政塾では「気付く」を大切にしていきたいと思った瞬間でもありました。「殻を破る」をテーマにと言われた時は、卵の中からくちばしでつついてヒナが出てくる

ような：新しい自分に生まれかわるようなイメージを持っていましたが、ザリガニや蛇が脱皮する様
に、「氣付く」によって薄皮がめくれればそれでいいのかなと気持ちに楽になった様にも思います。
ただそこには『ああそうか：』、テン・テン・テンで終わってしまうか、実行に移すかで大きな違い
があることは言うまでもありませんが。

そしてそれを裏付けるかのように、午後からお邪魔した中電ウイングさんで、障害を乗り越え自分
達のできる精一杯を実行している人たちに遭遇しました。確かに自己紹介や職場紹介などは色々指導
されながら覚えたんだろうなと感じる所もありましたが、言葉・態度を通じて伝えたいことがスト
レートにドンと私の心に届きました。また、その環境を作っている中電ウイングさんにも頭が下がる
思いでした。職場見学を終えた最後のお話の中で、『全ての人を受け入れるわけにもいかず、入社を
お断りしなければいけないのが一番辛い』と言われた言葉が強く印象に残り忘れることが出来ません。

レスリング体験

中京女子大学ではアテネ五輪の金メダリストの練習風景を見学させてもらいましたが、私は5月
の連休中に右足脹脛を肉離れしてしまい、練習には参加することが出来ませんでした。しかし部員や
塾生が練習している光景を見ながら中学の部活の頃を思い出していました。努力と才能という言葉、
努力を積みかさねることによって、才能を持っただけの人を超えることは可能だと思えます。しかし、
才能のある人が努力を重ねたときそれは真似することの出来ない大きなパワーを発揮する事…。そこ

へさらに自信がつきカリスマ的な存在に成長できる人がいる事を……。どうして同じ様に練習をしているのに差が縮まらないのかと、悩んでいた頃もありました。その中にいると回りの人と自分の違いをなかなか見つけられませんが、見学しながら見ていると、同じ練習をしているようでも先頭に立つてメニューをこなしていくメダリストと消化することに懸命な部員とでは見えているものが違う様に感じました。誰も見ていないところで努力を重ねることも必要なかもしれませんが、心・技・体・肉体に比例して心も強くなければ頂点には立てないんだなと感じました。以前読んだ本の中に、自分の不安を振り払うことができるのは不安をかき消すだけの練習を積むしかない、柔道のやわらちゃんも書いていましたが、スポーツの世界もそして今自分の置かれた立場でも同じ事が言えるなと感じた1日でした。

仙台にて…

産政塾16期生に課せられた最大の出来事というか、ピンチであつたと思いますが、名鉄の列車事故がありました。私自身は何の問題も無く予定時間よりかなり早く中部国際空港に到着し、全員の集合を待っていたのですが、時間になっても現れない塾生達が列車事故の影響で到着できないとの連絡に、真っ先に考えたことは、実は中止の二文字でした。色々と金銭的にマイナス部分も多いのでしようが、全員で行動できなければ致し方無いかと考えていたのです。『とりあえず行きます』といわれたときは「えっ行くの？」と、内心思いました。

それでも先発隊の私達は予定通りに企画を進め、ロッセ×楽天の試合もおり返しにかかった頃、新幹線で駆けつけたメンバーと半日遅れで合流しました。その日の夕食会では事故に直面した時の塾生の活躍などを聞き、嬉しさや、企画を続けてきて良かったと思ったのですが、相変わらずすぐにあきらめてしまう自分があるなど、一人、自己嫌悪に陥っておりました。行くか戻るかの判断は難しいと思うのですが、どうも自分はすぐにあきらめてしまうところがあり、まずは思いきつてやってみる事大切さ：自分の弱いところが出てしまいました。

仙台フルキャストスタジアムではスタッフがよく現場を歩いていることに感心させられました。球場を綺麗に管理し、どうしたら見に来てくれた人達に気持ちよく楽しんでもらえるかをいつも考えている。またゴミステーションで働くボランティアの方達一人ひとりに声を掛ける姿を見てすばらしいと思いました。これは労働組合の活動も同じで、現場で起きていることをいち早くキャッチするなど、アンテナを高くして組合員のフォローができるようにしっかりと現場を見ておくことが必要だと思いました。

D 班企画と閉塾式

最後の愛知万博では、自分達の企画ということもあり、一人ひとりの心に何か残ればと思いい活動していました。ただ万博を利用しただけのボランティアでは無く、ボランティアを通して万博が見られればいいなあという思いでした。『れ・あ・ろ』の企画で世界中の色々な遊び体験というテーマの

中で、私は来場者にコマやお手玉を教える担当となりました。

さつそくボランティア事前研修会から戻ると子供のお手玉を借りて練習に励みました。『ちよつとすごい技を3つは出来るようにしよう』と、少しずつ毎日練習しました。常にお手玉を持ち歩き、ゴルフに行った時などはティーグラウンドでゴルフボールを使って練習していました。その甲斐あって当日までには『技3種』は何とかできる様になりましたが、やはり私も練習に時間が掛った分、子供達に教えてもなかなかその場で…というわけにもいきませんでした。でも良かったなと思ったことは、子供を連れてきたおばちゃんにお手玉を手渡すと、持っていたカバンを置いて、『もう年だから出来ないわ』とか言いながら夢中になってやり始めるんです。で、それを見た子供達が☆おばちゃんすごい☆という目で見ている…なんともいい光景でした。

また、2日目にコマを教えていた時などは子供さん連れにいるお母さんに、持ち方や糸の巻き方、そして投げ方など教えてあげると、子供と競い合って練習を始めたりと、とても面白い場面もありました。

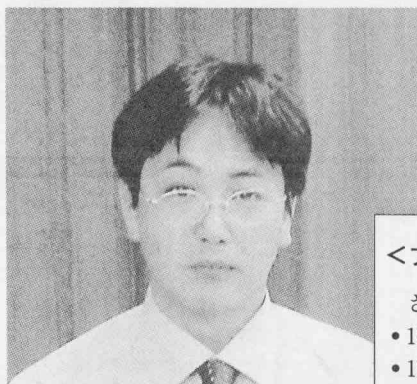
窓から見えるグローバルループにはものすごい人が行き交っているのに、そして何よりも同じ万博会場内にいるのに、ここだけはゆつたりとした時間が流れている…と感じました。歩き疲れ、人込みを避けて迷い込んできたような人が多かったのかもしれない。たまたまたどり着いた遊び体験コーナーでちよつと癒しの時間を提供する事が出来たのではないかと思います。ありがとうと言って会場をあとにする人達に、こちらこそありがとうと言いたい気持ちに沸いてきて、改めて参加できて良かったと思いました。

全体を通して

個人的には反省するところも多くあった産政塾でしたが、皆が全ての企画で怪我も無く無事に進められた事がとても良かったと思います。私自身、企画を通して色々なキーワードがありました。時間の大切さや使い方、心・技・体を実感したこと、あきらめない姿、現場をよく見る姿勢、そして、ありがとうの嬉しさ。決して初めて気付いたことでは無いのですが、今の年齢、家庭や職場での自分の立場などその時その時で感じ方や思いは違うと思います。これらを気付かせてもらったことが今回の産政塾に参加して得られた財産だと思いますし、一つ一つがこれからの自分を成長させていく上でのエッセンスになると思います。そして何より16期生の人達と知り合えた事は私にとって今年最高の出来事でした。やはり色々な見方や考え方、表情や話し方、行動やしぐさなど、勉強になりました。ありがとうございました。

小田桐塾長の暖かい眼差し、走り回って塾生のフォローをしてくれた松井さん、また、今回産政塾に参加できる機会を与えていただいた川村委員長はじめ職場の皆様に感謝申し上げます。

冒険者たちよ！



アイシン精機株式会社

佐 宗 晋 治

<プロフィール>

さそう しんじ (36歳)

- 1969年 5月 愛知県岡崎市生まれ
- 1993年 4月 富士機械製造(株)入社
- 1996年 5月 美智子と社内恋愛そして結婚
- 2003年 3月 アイシン精機(株)入社
人材・安全衛生部 配属
- 2005年 1月 産政塾 入塾
- 2005年 8月 産政塾 卒業
- 2006年 3月 海外勤務予定 (タイ)

<家族> 妻(美智子)・長男(依吹)・長女(美奈穂)
カブトムシ幼虫20匹 (里親募集中)

<趣味> 泥酔、MTB レース (ダウンヒル)

【自我の形成と冒険者たち①】

読書を趣味に持たない私でも、いくつか心に残る作品がある。ステイブンキングの「宝島」、マーク・トウェインの「トムソーヤの冒険」、斎藤惇夫の「冒険者たち」など、冒険を題材とした作品である。これらの作品は、小学生当時の「幼いなりのオトコゴコロ」を刺激し、主人公に憧れ、プチ家出や空き地での基地（隠れ家）造りなど、ある意味放課後の教科書となり幼少時期の自我形成に大きく貢献したと思われる。

第16期生（2005年度）として産政塾に入塾し、第3回会合あたりから、「産政塾」って斎藤惇夫の「冒険者たち」（テレビアニメ版は「ガンバの冒険」に似ているなあ？と思うようになった。この作品は、ガンバとその仲間たちが、不思議な魔力を持つという白イタチ・ノロイとの死闘を描く中で、「正義ってどんな事」、「仲間ってなに」、「冒険ってどんな事をするの」といった事をテーマにした冒険絵巻である。この冒険絵巻と各会合で繰り広げられる、「学び」、「気づき」、「助け合い」、「未知との遭遇」が、私にとって産政塾版「冒険者たち」を連想させ、各会合への参加意欲を掻き立てていたに違いない。全7回の会合で何が行われ、何を学んだかについては、他の塾生の卒論を参照。

【産政塾テーマについて考える①】

「殻の外に踏み出そう」という産政塾のテーマに対し、正直違和感を持っている。「殻」と言えば、

たまごの殻を想像し、「外に踏み出す」という行為は、誕生、躍進、転生、打破、自己変革、など新しい世界へ羽ばたいて行く事を連想させる。多くの塾生も卒論中で「自分の殻」を定義し、「自己改革」について論じているに違いない。その事については、事務局側のテーマ設定の狙いに合致し、まったく否定するつもりはない。自分自身7回の会合を通じ、目から鱗も落ちたし、未知との遭遇もあり、新たな世界を知る事で考えの幅も広がったと思う。しかし、自分自身が「殻」の外へ踏み出せたか（自己改革）という回答に困ってしまう。つまり、私の持つ違和感とは、「殻」に相当するものが具体的にイメージできない事にある。

「殻の外に踏み出す」をイメージできないのなら、イメージできるまで解釈を変化させてみよう。しばらく「殻」と「踏み出す」を念仏のように何度も唱えながら考えてみた。浮かんだイメージは

「殻」について

- | | | |
|---------------|------------|--------------------|
| ① 自意識と他意識?の境界 | ② 会社と自宅の境界 | ③ 子供と大人の境界 |
| ④ 我慢と開放の境界 | ⑤ 自己と他人の境界 | ⑥ 「あちら」と「こちら」の境界 他 |

「踏み出す」について

- | | | |
|----------|---------|----------|
| ① 移動する | ② 占領する | ③ 躊躇する |
| ④ 踏み込まれる | ⑤ 受け入れる | ⑥ 説得する 他 |

といったものが頭に浮かんだ。「殻」というものは、相反する考え方や現象を分け隔てる境界線であり、「踏み出す」という事は、「踏み出す」と「踏み込まれる」が同時に存在（力学の作用反作用の法則）する事だと整理できた。

なるほど、殻の外に踏み出す事ばかりに目を奪われていたが、「殻の中に踏み入れよう」もありじゃない？という事である。

【特別企画と冒険者たち②】

第16期では5回の各「グループ企画」と神様が与えてくれた「特別企画」があった。こんな言い方をしては、グループ企画を考えてくれた塾生皆さんに失礼だが、この「特別企画」が私にとって一番印象深く、学ぶべき事が多かった企画となった。前段「神様が与えてくれた」と書いたが、まさに「God Knows」な企画である。（高校生当時、寝てばかりの倫理・政治経済の授業で耳にした「運命予定説」を思い出した）！「特別企画」とは、第5回会合となったAグループ企画「企業人として社会貢献の重要性、地域と接する心構えを学ぶ」（仙台牛タン企画）に参加する道中、思わず遭遇した列車架線事故をきっかけに始まった愛と勇気の冒険絵巻である。

第5回会合は、午前6時30分セントレア集合から始まるが、その前にプレ企画となる「電車でGO！名古屋鉄道編」と題し、セントレアに向かう列車の運転台の体験搭乗が企画され、塾生の多くは6時5分金山駅の列車に乗った。そして、その列車は予定通り金山駅を発車した。

塾生を乗せた列車は、空港を目指し順調に走行し、運転台体験搭乗も問題なく進行した。体験搭乗を終え客室の座席に戻ってきた塾生からは、

「感動したよ。運転手っているいろいろやる事が多くて大変だな。列車の無線もひっきりなしだ」

と言っていた。他の塾生も同じような事を言っている。

いよいよ私の順番がきて運転台に入った。鉄道シミュレーションゲームで遊んだ事もあり、運転台からの眺めはある程度イメージしていたが、実際に運転台に入り、次から次に飛び込んでくる電柱・信号、列車とのすれ違い、カーブでの傾きなど、現実として五感に響く音や振動には、圧倒された。今度は飛行機のコックピットに入ってみたい“そう思った。

運転台での感動も、運転手の慌ただしい動きによって一瞬でかき消されてしまった。運転台から戻ってきた際に塾生の言っていた運転手の大変さを理解する事になった。また、“特別企画”の始まりでもあった。

運転台で飛び交う無線に耳を傾けてみる。

「〇〇番車、現在位置と信号の状況を伝えよ」

「信号はすべて点滅……」

何やら運行上のトラブルが発生している事を告げているようだ。確かに信号は点滅し、閉塞区間への進行を許可する信号すら点滅し青信号ではなかった。だんだんスピードが落ち、無線機からは、

「信号機のトラブル発生、目視による運行とし徐行せよ……」

私は、運転台の中から異常事態に対応する運転手を目の当たりにし、“これからとんでもない事が起こるかもしれない”といった悪い予感を抱いた。そして、次の塾生と交代するため客室に戻った。

しばらくして列車は停止と発車を繰り返すようになった。もう、この列車は定刻にセントレアに着く事ができない。悪い予感は確信に変わっていった。

客室に戻った私は、塾生と、「この列車に乗っていたのでは仙台行きの便に間に合わないねー」などと冗談を交わしつつも、今直面している危機に対しどんな手を打つべきかを考えている自分がいた。仕事柄、海外安全（テロ・暴動・地震や津波などの対応）を担当した経験からだろう。そうした中、自分自身の責務として「確実に塾生を仙台発の飛行機に乗せる事だ」とし、列車が間に合わないのであれば、①途中で列車をあきらめタクシーに変更する、②タクシーの予約が殺到するので、誰よりも先に必要台数を確保する、③それでも間に合わないのであれば、次に飛ぶ仙台行の便に塾生分の座席数を、航空会社の営業経由で無理やり確保（予約変更）する、ことを考えた。実際、航空会社の営業と事態解決策を話し合い、牛タン企画のツアーエージェントから飛行機会社へヘルプの要請が入った場合は、すぐに対応できるよう準備しておいた。

列車運行の異常に気づいたのか、客室内が騒々しくなってきた。しばらくして、車内放送による車掌のアナウンスがあり、架線事故が原因で目的地であるセントレアまで行けない事を告げた。それを聞いた途端、乗客は一斉に騒ぎ始め、大声を出す者もいれば、泣き出す者もいた。塾生の乗っている午前7時前にセントレアに到着する列車は、成田国際空港に接続する日本航空と全日空を利用し、成田から世界各都市へ出発する海外旅行者（出張者）が大半を占める。海外へ出発する乗客にとっては、長期休暇の取得、高額の旅行代金、待ちに待った海外旅行出発の日など、空港にたどり着けず旅行がキャンセルとなれば平常心でいられないのも当然であろう。

やがて、塾生を乗せた列車は、新舞子駅で停車しそれ以上先へは進めなくなった。乗客は列車から降り、駅の改札付近で駅員を取り囲み、「列車は動くのか」「代替輸送バスはいつくるのだ」「タク

シーは・・・」「補償は・・・」既にパニック状態となっている。駅員が手配したタクシーが数台到着すると、我先にとタクシーへ乗り込もうとする。俺が先だの、並んでないだの、・・・

しばらくそんな状況が続いたが、ある塾生がタクシーを待つ人の列を整理し始めた。

「こちらに整列してください」「あと一人乗れます。一人の方いますか。」

続いて荷物の積み込みを手伝う塾生や、駅構内へのタクシー誘導と一般自動車の交通整理をする塾生も現れた。それぞれの塾生が、自分の判断で自発的に事態の收拾を図り始めた。溢れ出した行き場のない感情は、出口を見つけたかのように一つの方向に流れ始めていった。

塾生は、タクシーを待つ全ての乗客をセントレアに送り出した後、ほぼ同時刻に一部運転を再開した金山駅行きの列車に乗り、陸路で仙台を目指す事にした。(もちろん一仕事終えた後のビール付で)

思わず遭遇した「特別企画」は、私を含め全ての塾生の、心の動き、物事を見る視点、など、時間と周囲の状況の変化に応じ大きく動いたと思う。パニックの「傍観者」から「事態解決者」へと行動を変化させた原動力は、単に正義感だけではなく、塾生が仙台市へ移動する重要度・緊急度、産政塾の塾生に期待された役割との葛藤や、福知山線脱線事故の教訓があったからだと思う。文句を言われながら、罵声を浴びながら、冷静さを失わず黙々と頑張る塾生の姿は、なんだか冒険者(ガンバとその仲間たち)のように思えた。

※「God Knows」の理由、第5回会合で列車事故が起きる事を予見していたかのように、第4回会合「女将塾」道中に福地山駅を通過し、脱線事故時のJR側の対応の悪さについて議論していた為。

【産政塾テーマについて考える② まとめ】

字数の関係でいきなり結論になってしまったが、第16回産政塾の各レギュラー企画、特別企画、夜部（懇親会）、塾生とのコミュニケーションを通じ学んだ「3つ」の事をまとめたい。

◆テーマから学んだ事 「殻」（境界）を見極め、の両極の世界を偏りなく理解せよ」

バランス感覚の取れた思考を身につけるべし。その為には、相反する考え方の双方を理解し、中立的・大局的視点が得られるよう、殻（境界）を自由に往来（踏み出す、踏み入れる）できるようにしたい。

◆特別企画から学んだ事 「危機管理意識を高いレベルで持つ5カ条」

①強い信念を持つて何事にも取り組む事（塾生の役割認識）

自分がなぜ参政塾に参加しているのか、なぜ参加する事が大切であるのか、自分の使命・役割を認識した上で、強い意欲と信念を持つ事。

②最悪の事態に備えて準備する事（先手・先手の対応）

日ごろから想像力を駆使し、起こり得る最悪の事態を想定しておく事により、さまざまな対応が可能になる。

③危機に遭遇して楽観視できる事（空路ばかりが移動手段ではない、新幹線だってある）

緊急時にはみんながパニックに陥る。冷静さを失ってしまった人はふさがった出口しか見つけられない。緊急事態の中で開いている出口がきつとあるはずだ、と考えるだけの余裕が大切。

④ 物事の全体像を把握するように努める事。(塾生以外も大切)

「木を見て、森を見ず」ではなく、大局的立場からの分析と情報判断をする。

⑤ コミュニケーション能力を発揮する事(旅行代理店ではなく航空会社とも交渉)

幅広いチャネルを持つ。その事が緊急時におけるリーダーシップの発揮に役立つし、チームワークで乗り切る為にも不可欠。

◆ 塾生から学んだ事「無所属代表の心地よさ」

塾生は名だたる優良企業からの代表選手。しかし、企業名・肩書きを“意識しない”“させない”からこそ、こんなにも良い仲間が作れた。この関係は10年後仕事に苦しんでいる時にこそ役立つ。

参考) 私のイメージした「ガンバの冒険」キャラクター

ガンバ：織機有加藤さん ボーボ：松坂屋の吉原さん ヨイショ：名鉄労組の富田さん

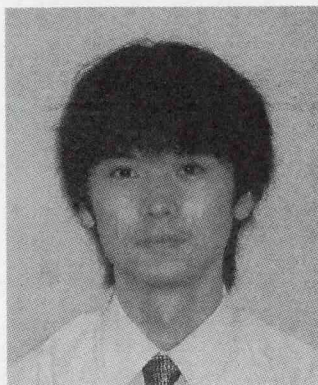
ガクシャ：織機労組の服部さん イカサマ：中電の大橋さん

シジン：東邦ガス労組の中根さん チュウタ：フタバ産業の宮川さん

ノロイ：産政塾事務局の小田桐塾長と松井さん

最後に、短い期間でしたが小田桐塾長、事務局の松井様、16期生の皆様に出会い、貴重な体験をさせて頂きありがとうございました。また、このような機会を与えてくれました上司の方、快く送り出してくれた職場の皆様に感謝いたします。

かけがえのない体験



トヨタ車体株式会社

佐々慎治

<プロフィール>

さっさ しんじ (33歳)

- 1972年3月 愛知県名古屋市に生まれる
- 1994年4月 トヨタ車体(株)入社
富士松工務部日程課へ配属
- 1998年11月 刈谷工務部 日程課へ異動(応援)
- 1999年8月 富士松工務部 仕掛管理室へ異動(復帰)
- 2003年1月 人材開発部人材開発室へ異動
- 2004年2月 同 厚生室へ異動
現在に至る

<家族> 妻、長男

<趣味> 旅行、キャンプ

1、はじめに

「今年の産政塾の参加者はおまえにしようと思う」と言われた時、2つの思いが頭をよぎった。「この忙しい時に？せめて来年が良かったな」という戸惑いの気持ちと「俺を行かせてくれるの？」という喜びの気持ちでした。

なぜなら、私は産政塾というものが異業種交流研修であること、1回／月の会合があること、会合の内容は塾生が企画・実施することなど、おおよその内容を知っていたため、以前よりいつかは参加したいなあ、と思っていたからでした。今回の産政塾開催時期と自分の業務の忙しい時期がラップすることに瞬時に気づいたため、1つめの思いがよぎったのだと思います。しかし、2つめの思いが強かったのか「えっ 俺ですか？」と言った後すぐに「わかりました」という言葉がでていました。

2、参加にあたって

参加前の私の目的はけっこうはっきりしていました。先ほど「いつかは参加したい」と書いた理由でもあるのですが、入社して10年が過ぎ、自分の視野・見識が狭いという実感をもっていたので、異業種の方達と交流を深めることにより、様々な考え方・知識に触れたいと思っていました。もちろん書籍やインターネット等で知識は得られる時代だと思えます。しかし、実際に自分が体験してみてわかること、生の現場を見て感じることを、直接講話していただいて伝わってくるもの、などはこういう機会に参加しないと得られないものだと思っていました。だから、自分が今後成長していくために

足りないと感じている「幅広い視野・情報に基づく発想・判断」につなげる「気づき」と「ゆらぎ」を自分の中に起こすために「全出席し、食欲に自分にならないものに触れ、吸収する」ということが目的だと考えていました。

そういった目的意識は持っていたものの、産政塾側のねらいである「殻をやぶろう」というものについては、正直「自分の殻ってなんだろう」「どうすれば破れるのだろう」「そもそも殻があるのだろうか」など疑問符がつくばかりで「殻をやぶろう」というねらいが達成できるかは不安がありました。しかし、「参加するうちに徐々に明確になっていけばいいや」という軽い気持ちで参加に臨むことにしました。

3、参加を通して何を得たか

他の企画への参加を通してもちろん、様々な非日常的で貴重な体験をさせていただいたが、やはり自分のグループでの企画と実施を通して学んだことが多かったと思います。開塾式後の初めてのグループ打ち合わせで、まずは役割分担を決めた際、私はリーダーを任されることとなった。私は皆をまとめることが得意ではないと思っていたので、「自分がリーダーで大丈夫だろうか」と思いましたが、「これも経験」と自分に言い聞かせ「できる限りのことをしよう」という気になっていました。この日の打ち合わせでの到達点は「企画実施月と実施テーマの提案」でしたが、我がグループは実施月こそ決めたものの、テーマについては詰めきれなかったのが正直な結果でした。早くもリーダーの力量不足を露呈してしまったわけですが、他のグループからの遅れを取り戻すべく、すぐにグループ

メンバーで集まりました。まずは実施テーマをかためなければ始まらないということでメンバーが持ち寄った案に優先順位をつけ、順番に交渉していこうということにしました。ここではリーダーの特権を利用し、私が実施したかったテーマを第1優先にしてもらうことでメンバーの同意を得ました。

私が実施したいと提案したのは「女将塾での一日体験」。女将塾とは温泉旅館の女将を育成し経営難の旅館へ派遣、みごとに再建させた実績を持つ株式会社。世襲制が常識であった温泉旅館の女将というものに対し、新しいビジネスモデルを立ち上げたという点で非常に興味がありました。しかし、女将塾は女性中心の世界でもあり、私個人では女将塾の現場で体験したり、裏話を聞いたりすることはできないと思うので、まさに、今回の産政塾企画にピッタリだと思い提案しました。

実は、この女将塾の存在については、何かいい企画テーマはないかと考えていた時、妻に相談したら、「だいたい前に女将を育成して旅館を再建したというテレビ放映を見た覚えがあるよ。その時興味を持ったから覚えているけど、たしか女将塾という名前だったよ。」と教えてくれました。私も「そういうえば、NHKの連続ドラマ『私 女将になります』のモデルになったのも女将塾という名前だったぞ」と思い、すぐにインターネットで検索しました。すぐにヒットし、女将塾の経営理念、実績等を読んだ後、「これだ!」と思いました。「接客のプロとしてだけでなく、女性経営者としての視点等、我々サラリーマンかつ男性では触れることのできない非日常的な世界を体験し、幅広い分野で学ぶことができるぞ」と確信しました。そんな妻の助言のおかげという経緯もあり、是非とも実現させたいと思っていました。

話を戻して、「女将塾での一日体験」が我々のグループの第1優先になったということは、同時に提案をした私が交渉をするということでした。しかし、「じゃあ交渉してみるわ」といっても、今回

のような交渉の経験も当然なく、何のツテもない中でどう交渉したらよいのか全くわかりませんでした。考えていてもしょうがないと思い、まずはダメもとで電話をかけてみることにしたのですが、さすがに緊張しました。「あなた誰ですか？一見さんはおことわり。」なんて冷たい対応されたらどうしようなどと思いながら、必死に事情を説明したところ「企画案を送っていただければ回答させていただきます」ということでした。私はこの時、門前払いはいされなかったが、おそらく受け入れてはもらえないだろうという感触をもちました。しかし、もともとダメもとだったわけですから、せめて熱意だけは伝えたいという思いで、依頼文と企画案を作成し送りました。それから1週間もたたない内に先方の社長から直々に電話をいただき、「OK」と言われた時の驚きと喜びは今でも忘れません。後の打ち合わせでわかったことですが、ここ数年はこういった受け入れ依頼はすべて断っていたとのこと。それを知った時、更に喜びを感じました。もちろん、決して私の力量だけではなく、中部産政研というネームバリューが後押ししてくれたということは容易に想像できましたが、なにはともあれ、企画が現実味を帯び、絶対いい企画にしてやろうという意欲が一段と湧いてきました。

あとはCグループのメンバー全員で協力し、企画の詳細について練り上げていきましたが、途中、1つトラブルが発生しました。それは、我々のグループの企画は日帰りという条件があったのですが、実施場所が遠いことともあり、日帰りでは十分な時間がとれず、宿泊にして欲しいという先方の要望があったことでした。正直言つてこのことは実施場所までの移動時間を正確に把握していなかった私のミスでした。しかし、我々としてもせっかく先方が受け入れてくれると言っていたので、宿泊できないから断念することだけはしたくないと思ったので、ここでネガティブになるのではなく、宿泊企画として実現できないかと事務局に相談した結果、産政塾のメンバーに聞いてみよう

ということになりました。産政塾メンバーも快く承諾してくれ、事なきを得たわけですが、宿泊企画は1回のみという固定概念を崩せたことが私としては喜びの1つでしたし、同意していただいた事務局やメンバーの方々にも感謝しています。企画実施当日は、責任感と期待感の入り混じった気持ちの中で、大きなトラブルもなく無事実施できたことにより、帰りの電車の中は安心感と満足感と達成感で包まれたとてもすがすがしい気持ちでした。ただ他の産政塾メンバーが何を感じてくれたかはそれぞれ違うと思いますが、「我々の企画に参加してよかった」と思ってくれたかどうかは今でも気になる場所ではあります。

長々と自分のグループの企画について書きましたが、私自身が企画→実施で学んだことは、「最初から、どうせダメだとあきらめないこと」「何か障害が発生してもどうしたらクリアできるかを考えること」「ねばり強くやり遂げるには熱意が必要」「自分で考え、悩み、そして形にしたものは必ず達成感が得られる」ということだと今、身にしみて感じています。

4、目的・ねらいは達成できたか？

当初の自分の目的であった「全出席し、食欲に自分がないものに触れ、吸収する」ということについては達成できたと思っています。

もうひとつの産政塾のねらいである「殻をやぶろう」ということについては、結局、自分に殻があったのか、あったとしたら殻をやぶれたのかということに対して現時点で明確な答えが浮かんでいません。しかし、確実に言えることは、自分から殻を作ってはいけません。ということだと思います。

ここである殻を言い換えれば限界という言葉が適切かもしれませんが、最初からあきらめたりせず、「やってみなくちゃわからない。ミスしても次に活かせばいいじゃないか」ぐらいの気持ちで何事にも取り組みたいと思います。この気持ちが途切れそうになった時やくじけそうになった時、そこから一歩踏み出すために今回の実体験が必ず私の背中を押してくれると思います。

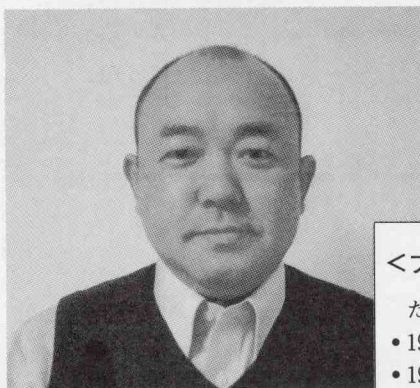
5、最後に

今、産政塾を振り返って思うことは、「今年の産政塾に参加できて本当に良かった。参加させてくれた会社、職場の仲間に感謝」これに尽きます。

ただし、「よかった」だけで終わるのではなく、今後成長し続けるという気持ちを忘れず持ちつづけたと思います。また、私自身という個の成長だけではなく、産政塾という集団としても同様に進化そして深化していった欲しいと願います。

最後になりましたが、小田桐塾長、松井さん、第16期産政塾メンバーの方々、そして我がCグループのみなさん、本当にありがとうございました。今後もしようしくお願いします。

自分の「殻」とは？



トヨタ自動車株式会社

高橋 鉦 二

<プロフィール>

たかはし こうじ (36歳)

- 1969年 愛知県岡崎市 生まれ
- 1987年 トヨタ自動車株式会社 入社
教育部 技能教育課 (現人事部人事室) 配属
現在に至る

<家族> 妻、長女

<趣味> ミニスキー、車

【はじめに】

私にとって「殻」とは何なのか？

今回の産政塾への参加することがきまってから、考えるようになりました。この「殻」というものが、カブトムシのように形あるものなら非常に分かりやすく、外に出る方法がすぐに見つかりそうですが、現実には、いままでの自分自身が感じていないものであり、人により違うものだと思います。「自分の殻」というものが、どんなものなのか、この卒論のなかで自分なりに見つけてみたいと思います。

【本当の自分】

私が、「産政塾」へ参加することになったのは、「いろいろな会社の人が集まって、いろんな体験ができるから結構面白くていい経験になるぞ。参加してみろ。」という産政塾参加経験のある職場の人の一言からでした。

私は高校を卒業しトヨタ自動車へ入社しました。私の配属は当時「教育部」という部署で、社員教育や学園生の実習担当指導員として人前に立つことが仕事となりました。そのころの自分を振り返ってみると、それまでの高校生活とはまったく違った環境に、突然放り込まれた（自分が望んで入社したのだが…）印象がありました。職場には、怖い上司がいて、先輩がいて、自分はまったくの素人。

同じ職場に配属された同期がいなかったこともあり、毎日毎日がとても不安な日々でした。さらに、入社して3ヶ月もたつと、少し前まで高校生として先生に教わっていた自分が、逆の立場である「指導員」をやらなくてはいけなくなりました。今思えば、それが仕事なので当たり前なのですが…。先輩指導員の授業を数回受け、事前準備を万全にしても実際に指導する前は、とっても不安だったことを覚えています。今までの生活の中で、非常に多くの不安を感じてきました。新しいことへの取り組みるときや違う職場への応援や実習…。

私にとってこれらの「不安」というものが、今の自分を形成する上で関連深いものだと感じています。「不安」とは、①ネガティブな感情で物事を捉えたとき、②自分をごまかしているとき、③「うまくやろう」「良く見せよう」という思いのとき、などに起こる心の動揺だと私は思います。これらの心の動揺を感じると、それを悟られまいとする自己防衛や不安を少しでも和らげる為に、自分の気持ちの中に見えない壁を作って本当の自分を見せないように行動してきた気がします。動揺しているところを見せないように、うわべだけの行動をとってきた場面も多々ありました。この「本当の自分を見せる」ということは、自分にとって非常に難しく、恥ずかしく感じることです。人によつては、即座に打ち溶け合つて自分を出せる人がいますが、とてもうらやましく思います。「入社した時の新しい環境」、「初めて行う人前での指導」など、はじめて会った人やあまり行つたことの無い場所では、やはり自分を見せることはできていませんでした。

では、どういった場面で自分を見せることができているのだろうか？

自分を見せられていると思える場面を思い返してみると、「何度も会つたことのある人との交流」や

「自分が慣れている場所にいるとき」など、似通った場面であるような気がします。

今現在、入社当時の職場環境へ不安を感じることもありませんし、人前での指導に戸惑いを感じることもありません。ということは、その後の長年の経験や多くの体験が、不安を取り除き本当の自分を見せることができるようにしているのだと思います。多くのことを経験すること、何回も繰り返し体験することというのは、本当の自分を見せるための特效薬のようなものだという気がします。

「…参加してみる」という言葉から決まった産政塾への参加の裏には、私にとって非常に多くの「不安」がありました。「まったくわからない環境への不安」、「他の参加される方々と自分の能力差への不安」、「企画立案への不安」。今考えてみると、それらの不安を全7回の企画の間では完全に取去ることができず、見えない壁を自分の中に作ってしまい、本当の自分を出し切れなかったところがあるように感じています。しかし、今回産政塾の全企画に参加し、同じ班のメンバーや他の塾生の方々との交流、日常生活では絶対に接することができないような方々からの話など、多くの特效薬を得ることができました。これからは、今回手に入れた特效薬をしっかりと活用し、新しい場面や環境でも本当の自分を見せることができる人間を目指そうと改めて思っています。

【熱意】

今回の産政塾企画の中で、私が感じた共通するキーワードは「熱意」でした。

熱意：「いちずにそれに打ち込んでいる気持ち。熱心な気持ち。」

中電ウイングの石田取締役、中京女子大学レスリング部監督、株式会社女将塾の山本代表など、それぞれの立場で目標にしていることや環境などはまったく違っても、それぞれに「熱意」をもって取り組みをされていることがひしひしと伝わってきました。この「熱意」というものが、大きな岩おも動かし、全ての目標の実現に向けた原動力になっている気がします。中電ウイングでのチャレンジの方々の「あいさつ」や「笑顔」は、働くことへの熱意と自信、プロとしての責任や誇りのあらわれだと感じました。中京女子大学の栄監督の話の中では、「熱意」という直接的な言葉ではなかったのですが、「選手一人一人をしつかり見て、適切な指導をする」という言葉が印象にあります。やはり真剣になって、気持ちを持って接することが、人と人との始まりだと教えられました。

私の業務は、直接自動車製造に携わる内容ではありませんが、「職場に必要とされる人材を育てる」という目標のもと、職場の先輩や上司の方々と協力して、あらたな教材づくりや資料の作成、自分自身の能力向上のための勉強会など、分らないながらも精一杯いろいろなことをしてきたように思います。二十代前半のころは、学園生に電気の基礎である「有接点」を指導する場面などでは、初めて触る生徒たちへの確かな指示や、説明、なぜそうなるのかなど自分なりに工夫しながら、少しでもわかりやすく、伝わるように指導をしてきました。安全作業を無視し、友達同士ふざけあっている生徒がいれば、こっぴどく叱ったこともあります。今考えると、毎日毎日大変でしたが、熱意をもって生徒に接していたような気がします。

しかし、入社から17年が経ち多くの業務をこなせるようになってきた今、熱意を持って指導できているだろうか？指導することへの慣れや自分で決めてしまっている限界の範囲で、生徒に指導をしていないだろうか？考えれば考えるほど、自分に自信がなくなってきました。

産政塾企画で心に残った「選手一人一人をしつかり見て、適切な指導をする」という言葉は、自分の置かれている立場である「職場に必要とされる人材を育てる」ことに通じるところがあり、地域社会の中でも自分の家族においても、とても重要なことだと思います。

最近の私は、指導のポイントやテクニクのようなものが身につき、無難に生徒に接していることもあったと思います。また、どちらかというと自分の中で関係ないと思ってしまう事柄は、あまり積極的に首を突っ込もうとしないタイプでした。それにより、結構「冷めている」と言われるような事もありました。産政塾の企画の中で講演していただいた方々を思い返してみると、仕事だけではなく、自分の夢だったり趣味だったり、何かにつけて非常に真剣に熱く取り組んでいる姿勢が伝わってきました。また、とても輝いていました。私は、忙しいことを理由に何かに熱中したり、熱くなるのが無なかつた、足りなかつたように思います。これからの生活では、自分が輝けると信じてもう少し熱くなり、うるさいオヤジと言われても何事にも「熱意」を持って取り組もうと思います。

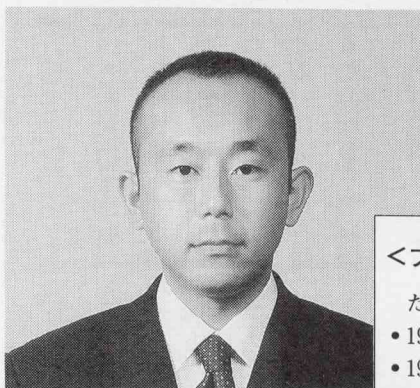
この原稿を書いたことで、自分の現時点での「殻」というものの一部が確認できたように思います。今後の生活の中で、どんな形が変わっていくのか、外に踏み出せるのかわかりませんが、時々自分を見つめてみようと思います。

【最後に】

自分たちの企画を成功させる為に、小林リーダーを始めD班のメンバーで協力し何度も打ち合わせを行い、無事に実現できたということに喜びを感じました。愛知万博も無事閉幕しました。私達の万博ボランティア企画は、塾生皆さんの積極性に助けられた部分が非常に多くあると思います。「自分ひとりでは何もできないが、集まれば何でもできる」どこかにあるようなセリフですが、この「産政塾」にはこの言葉が当てはまり、また生活環境や年齢が違っていても同じ目的の為に協力して達成していくという、今の時代には薄れ掛けている部分があるような気がします。

毎年、進歩し続けているこの「産政塾」に自分が参加でき、多くのことを経験できたことをうれしく思います。小田桐塾長、事務局の松井さん、16期の皆さん本当にありがとうございました。また、多忙の中、快く送り出していただいた上司の方、ならびに職場の皆様に感謝いたします。

「殻の外へ飛び出すとは？」 (これまでの自分を振りかえって)」



全トヨタ労働組合連合会

竹 下 太一郎

<プロフィール>

たけした たいちろう (32歳)

- 1973年10月 茨城県水戸市生まれ
- 1998年4月 シロキ工業株式会社入社
- 1999年1月 人材開発室配属
- 2004年9月 全トヨタ労働組合連合会出向
現在に至る

<家族> 独身

<趣味> 硬式テニス、水泳、読書

—はじめに—

今回、産政塾に参加させていただき約半年間、とても貴重な体験ができたと感じています。私にとっては昨年の9月から出向になり仕事をする環境ががらりと変わったと同時の参加であったので、さらに新しい世界を知ることができると前向きに考えて、先入観を消して「産政塾16期」の仲間と語り合うことを心がけてきました。私にとって、この半年間はあつという間に過ぎていきましたが、今回産政塾を振り返るということで、自分自身を見つめる機会でもあると思います、自分なりにこれまでの歩みの中で感じてきたこと、またこれからの自分について正直に書いてみようと思います。

—学生時代—

自分を振り返る上で、やはり欠かすことができないのは中学―大学までのいわゆる「学生」時代のことです。今考えると、いろいろなことを悩んだり、ときには悩みなんか忘れて一つのことに熱中したりと、なかなか紆余曲折があつて面白い学生生活であつたと思います。しかし、当時は何かに追われるように毎日を過ごしていて「面白さ」などは感じる余裕もなかったように覚えていてます。学生時代、私は生活に苦勞することもなく、「勉強や部活ができることは当たり前だ!」と感じていました。いわゆる挫折という言葉は聞いたことはあつても実感としては全くもっていなかったのです。そんな、のほほんとした学生時代にも少しの波はやってきました。高校受験のときには、同じ中学から一緒に

受験した友達の中で自分だけが失敗して別の高校に通うことになり、悔しい思いをしました。しかし、このことは「挫折」と呼ぶには小さすぎる話であるように思います。この経験を通して、中学校時代よりは少しだけ精神的に強くなつたとは思いますが、それは前が弱すぎたからだだと今となつては思ふのです。（おかしな話ですが、当時は、とんでもない大失敗をしてしまったなどと悩んでいたのです。）高校時代には、好きだつた理科系の科目は勉強するというよりは、「少ない道具を論理的に正しければ、自分の好きなように使つて色んな問題に立ち向かうことが出来る！」ことにおおきな魅力を感じて時間を忘れて取り組んでいました。しかし、3年間というのはとても短く、この間に将来のことを考えなければならず（誰にとつても同じことですが）、私は漠然と大学の「医学部」を目指すことにしたのです。「医者」になることが目的ではなくて、理科系の学部の中で、入るのが難しい「医学部」を選んだだけのことだつたと、今は思います。数学が好きで、「考えて答えを導き出す！」ことが楽しかつただけなのに、偏差値という言葉に自分が踊つてしまった。確かに私が、大学受験をした時期は「第二次ベビーブーム」で世間では「受験戦争」なんて言葉もあり、踊つてしまう情報は大量に溢れていました。しかし、こんな短絡的な考え方は、しっかりとした信念をもつて取り組んでいた同世代のライバルと勝負になるはずもなく、私は2年間浪人生活をしましたが、最終的には自分で「医学部」を目指すことから逃げてしまったのです。この「逃げた！」という自分を自分の中で整理するには時間が必要でした。やはり認めたくはなかつたのです。自分を納得させるために、「僕は別に医者になりたかつたわけではない！」などと自分勝手な理屈を組み立てていました。しかし、そんなことをしていても時間は待つてくれません。いろいろ考えながらも、入学した大学での生

活は始まってしまいます。大学入学当初は、「この4年間でとにかくどんなことにも迷いなく自信をもてる強い自分になろう!」ということだけを考え、気持を整理して0からスタートするために、中学時代に熱中し、高校時代にお休みしていた「テニス」で自分を鍛え直すことにしました。硬式テニス部での生活は大変充実していました。大学の団体戦レギュラーになるために、とにかく必死で練習したことを覚えています。1年生、2年生まではとにかく自分が強くなることだけを考えて、「先輩の試合の玉拾いは足を強くするため!」などと前向き思考で取り組み、3年生になってからは、「どうすれば勝つことができるのか?」「強い部にするにはどうすればいいのか?」など自分たちで考えて試しながら毎日を過ごしていました。私が通った大学はスポーツに力を入れている学校ではなかったので、授業との両立をしながら練習時間を確保し、出来る限りボールを打つという部活中心の生活を4年間に過ごしましたが、そんな大学生活の中では素晴らしい恩師に出会うことも出来ました。その先生から、常々「本を読んでの知識ではなく、自分の頭で考えて自分なりの結論を導き出すように!」ということをいわれて、その先生の研究室に入り実験や演習に取り組みました。どれもじっくりと考えないと答えがでない問題ばかりで、とても面白い時間を過ごしたことが懐かしいです。大学生活4年間で私にとって一番大きかったのは、「テニス部」からも「研究室」からも逃げなかったということです。ただそれだけのことですが、この経験が今の自分を支えている原点なのです。

— 社会人として —

大学を卒業し、社会人としてのスタートをきってから早8年の歳月が流れました。入社して配属されたのは人事部門。初めは正直いつてかなりとまどいました。大学時代はテニスと数学しかやってこなかった人間が、「人事?」。法律なんか興味ないし、ましてや人の処遇なんて自分が関わること自体全くイメージができなかったのです。初めの仕事は、労働時間のデータから統計を作るというものから入社希望の学生さんへの「会社説明」などさまざまでしたが、いわれるがまま、とにかく毎日こなすことに一生懸命で、仕事の進め方や問題点などに目が行くようになったのは1年近く経ってからでした。この体験からどんなことでも、何はともあれ目の前にある課題をやってみること、やる前に「あーでもない。こーでもない。」と理屈を考えるのではなく、とにかく取り組んでみると時間はかかってでもそれは大きな力になると今は感じています。また、これまでの人事部門で過ごした時間の中で、仕事がなかなか思うように進まない私を、粘り強く指導してくださった先輩からは、「お前にとっては多くの従業員の一人と想っているかもしれないが、相手の方にとっては1対1なんだ!」ということを教えていただきました。このことは、私が仕事に取り組み上で絶対に忘れてはいけない、「基本姿勢」になっています。特に、「労働組合」としての仕事に携わるようになってからは特にこのことを意識しながら、様々な企画を組み立てたり、とにかくできるかぎりFACE TO FACEで取り組みたいと思っています。そして、自分が納得できる時間の過ごし方をしていくことが、今の私の目標です。

―最後に―

今回、産政塾を卒業するにあたり、これまでの自分を振り返る機会をもつことができたのは大変貴重なことでした。学生時代から社会人としてのこれまでの生活の中から自分が感じてきたことを書いてみました。ここまで自分のことを語ったことはなく少し恥ずかしい気がします。産政塾の基本理念である、「殻の外に飛び出そう!」という言葉からはさまざまな意味を読み取ることが出来ると思います。殻とは自分を取り囲んでいる環境とも考えられるし、自分の内面の考え方や捉えることもできます。今回、私は自分を振り返る中で、「自分にとっての殻」とはいったい何なのだろう?ということを考えながら振り返ってみました。結果、私にとって殻とは「自分が物事に取り組む上での意識」であつて外に飛び出すとは、この意識をプラスの方向へ変革してやることと、捉えることができる。今後は感じています。私にとつての意識変革は、自分が一度「逃げた」ということを自分の中で認めた上で、0からスタートする力(自分自身に対する反骨の気持)にしようと「感じた」ことであります。これは、全て自分自身の内面の問題であるのですが、では何故このように「感じる」ことができたのか?これには、私が過ごした環境がすぐにおおきな影響を与えてくれたと思っています。大学時代、社会人と私は、周りの方々(先輩や恩師、同僚、上司)に大変恵まれていたと感じています。です。はつきりいって器用ではない私に皆さんは粘り強く、色々なことを教えてくださいました。そういう方々と接する中で、少しずつですが自分の内面の幅を広げてきたつもりです。

これからの長い社会人生活の中でも、自分の気持には大きな波から小さな波まで常に変化がおきて

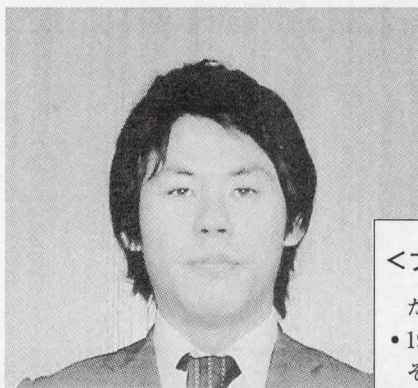
くるのだらうと思います。しかし、波が起きたときこそ自分が成長するチャンスなんだと考え、前向きに捉えていきたいです。

半年間の産政塾16期活動の中で、企画を通してメンバーの皆さんとさまざまな体験ができ、多くを語り合うことができたことは、私にとって大きな財産となりました。業種も立場も違う皆さんからの話しは驚くことがあったり、自分たちと一緒にだと感じたりと充実した時間でした。一つの結論を導くことが目的なのではなくて、多くの意見があることを認識すること、自分が気づかない視点があることを理解することの大切さはこれからも忘れずにいたいと思っております。

小田桐塾長をはじめ、中部産政研の皆様、特に事務局の松井さんには大変お世話になりました。毎回の企画で、私たち塾生の意見や要望に（中には大変難しかったものもあると思います。）耳を傾けていただき、さまざまな調整に骨を折っていただいたことに大変感謝しております。ありがとうございます。

また、産政塾16期生の皆様には多くの刺激をいただきました。これから、この縁を大事に皆様とお付き合いしていければと思っております。短い期間でしたが本当にありがとうございました。

「産政塾」を終えて!!



(株)デンソー人事部採用室

田中丸 庸

<プロフィール>

たなかまる よう (31歳)

- 1974年11月30日 東京都生まれ
その後神奈川県にて学生生活を過ごす。
- 1998年4月 (株)デンソー入社
現在にいたる。

<家族> 妻

<趣味> サッカー
(観るのも、プレーするのも)

1、はじめに

入社して7年間、仕事の方はそれなりにこなしてきたつもりだ。正直言つて、当時特にその状況について改めて見つめ直すこともなく、また見つめ直す気持ちになることもなかった。鑑みるに、満足していたというよりも、ソコソコ（・・・）の現状を変えることへの抵抗感が自らを支配していたように思う。つまり、現状を把握し、理想とのギャップから壁を意識し、かつその壁を突き破るためにもがき苦しみ努力するという段階にすら達していなかったのが、今回の産政塾16期の活動に参加させていただく前の自分であつた。

したがって、当初この産政塾に入塾するという話をいただいた時は、いささかの抵抗があつことは事実である。何よりも「面倒だ」という意識が真つ先に浮かんできた。

こうして「殻の外へ飛び出そう」をテーマに若者が自己研鑽に励むという活動主旨を、今ひとつ理解できぬまま、私の産政塾での活動はスタートした。

しかしながら、計5回の各グループの自主企画に参加するにつれ、かつて体験したことのない気付きや、意識を自らが持ち始めることに気付いた。

最終的に自分の「殻」なるものを明確に定義づけるところまでは正直言つて行きつかなかつたが、少なくとも一歩前に出ることへの発想の転換、またそのヒントを得るために、実に様々なことを学ばせていただいた。

以下に、全5回の活動を通じて私が学んだこと、また、そこから得た気付きを記したいと思う。

2、テーマ：官民の社会福祉への取り組みを学ぶ

(1) 高浜市役所（日本福祉大学専門学校）を訪ねて

05年4月8日、まず、午前中に日本福祉大学専門学校を訪れ、高浜市森市長および市福祉部岸上部長から社会福祉への取り組みと考え方のお話を伺った。

高浜市役所の福祉事業の取り組みは、行政だけでなく、市民を巻き込みながら進めているとのことである。自助・共助・公助の精神と各事業体との協働で、市と市民と事業者が一体となって、すべての市民が安全・安心・快適な居住空間の下で生活を営み、共に支えあい、いきいきとした生活が送れるようなまちづくりへの取り組みを実施している。福祉という観点を超えて、誰もが幸せになれる町づくりを目指しているのである。

また、財政面で持続維持ができるよう、福祉だけではなく、介護予防にも重点を置いており、更には施設等のハード面はもとより、一人ひとりの気持ち等のソフト面を特に大切にしている。

この考え方は、我々民間企業内でも同じなのではないだろうか。一つの部署・一人の社員にできることは限られている。だが、それぞれが自らの知恵を集め助け合いながら業務やプロジェクトに取り組む。その輪が広がれば広がるほど、可能性も広がり、ひいては持続可能な企業の発展に寄与することができるのではないだろうかと感じた。

(2) 中電ウイングを訪ねて

午後からは中電ウイングを訪問した。福祉をビジネスとして取り組んでいる企業である。実は私

が新入社員だったころ、新入社員教育の一環としてデンソー太陽株式会社の見学があった。当時の経験から、ある程度の理解はできているつもりだった。

しかし、実際に訪問をさせていただくとやはり様々なことに驚きと気付きを得る。まず、私が驚いたのは、その従業員の方々（障害者の方※中電ウイングではチャレンジドと言われていた）が、実に自然に生き生きと仕事をされている姿である。

挨拶ひとつをとっても、やらされ感のないすがすがしいもので、相手に対しての気持ちが見え、ストリートに伝わってくる。また仕事に取り組む姿勢も、障害があるということに対して悲観するのではなく、自らができること、また逆に優れている能力を最大限に活かそうと一生懸命に取り組んでいる。その姿を見て、私は自らを恥じた。健常者と障害者云々ではなくて、一人の企業人としての彼等の仕事に対する取り組み方と、私の取り組み方では明らかに差があった。自らはできることすらもやっていないのではないか？

人事という立場に身をおく以上、従業員がいきいきと働くことにより生産性は飛躍的に向上するであろうことは言葉では理解していたが、改めてそのことを身をもって体験し、また、実現できていない過去を反省した。自らの可能性を伸ばすために、できることを最大限に頑張り、また次の目標に向けてひたむきにチャレンジする姿勢を学び、今後仕事をする上での重要な気付きを得た時間であった。

3、テーマ：世界を目指す選手から夢に向かって挑戦する姿勢を学ぶ

(1) 中京女子大学（レスリング部）を訪ねて

05年5月11日、午後から中京女子大学レスリング部を訪れ、栄監督と吉田選手（アテネ五輪金メダリスト）からお話を伺い、また実際に練習等にも参加できる体験型の様相で行われた。

ただし、私は業務の都合上、途中で退席しなければならず非常に残念ではあったが、栄監督のお話だけは伺うことができた。

私自身、小学校低学年からサッカーを始め、20数年間選手として経験があるため（現在は選手とは言えないが・・・）、使われる側としての思いや考え方を理解していたが、使う側（指導者）としての、ましてや世界一の選手を指導する監督の哲学を伺えることは非常に貴重な体験であった。様々なお話を伺う中で、勉強になったことは2つあった。

1つは、選手に練習はもちろん一つ一つの行動をする際に（私生活を含む）、必ずその意味を考えた上で実行に移せということである。何故自分はその行為をするのか、またその行為を自分がすることによって、相手はどう考えるか等を自分なりに考え、納得した上で行動するということがある。一見誰もが無意識のうちにやっていることのように思えるが、それを敢えて意識させていたのである。これにより、選手一人ひとりが明確な目的意識を持って主体的に練習をすることになり、またチームとしての意思統一（ベクトル合わせ）にも非常に寄与している。

2つ目は、選手との接し方である。監督の接し方を拝見し、またお話を伺い、メリハリを持って

選手と接することが重要であり、またそのことがより強い信頼関係を生むということを学んだ。

今回学んだ2点は、今後自らが後輩等に指導育成をする上で、非常に有効な考え方（手法）であり、是非とも活かしていきたいと思う。

4、テーマ：CSと経営学を学ぶ

(1) 女将塾を訪ねて

05年6月24日～25日、兵庫県の城之崎温泉にある「銀花」を訪れた。銀花とは女将塾が経営する旅館であり、その女将塾とは、経営者としての女将を育成する塾であるとともに、新しい考えの中で若者のエネルギーと新鮮な発想を旅館に吹き込もうと女将の派遣を行っている企業である。そこで女将体験を通して、真のサービス・もてなしの心を学んだ。我々がサービスを考えた場合、とかくもてなし側のエゴにとも言えるような「名ばかりのサービス」に陥りがちだが、女将塾のサービスは心からもてなされる側の立場に立っている。また、それを可能にしているのは、一人ひとりが本心にその仕事が好きだという気持ちと、自らを向上させるという強い意志であった。当たり前のことであるように感じるが、改めてCSにおけるそのことの重要性に気付かされた体験であった。

また女将塾の塾生達は一人前の女将になりたいという夢を持ち、また経営者側（社長・大女将）もそれを求めている。すなわち、会社の期待と本人の気持ちがしっかりとリンクしている。まさに、理想の企業であると感じた。

会社と従業員が目標を共有し、全社一丸となってそれに突き進むということの大切さと意義を再認識できた時間であった。

5、テーマ：「殻を破る」夢と挑戦の姿を仙台に学ぶ

(1) 楽天球団と仙台市商工会議所を訪ねて

05年7月10日～11日、宮城県仙台市を訪れ、東北初のプロ野球球団として発足した楽天球団と行政の支援体制について学んだ。いや、学ぶ予定であった。

ちなみに、当企画は私が所属したAグループの企画であり、数ヶ月前からリーダーを中心にメンバーの方と企画検討を重ねてきた。よってそれだけの思い入れがあった。

ところが・・・である。当初中部国際空港から飛行機にて仙台に入る予定であったところ、中部国際空港までの名鉄線（塾生の約半数が乗車）にて思わぬ事故に巻き込まれることになる。暴走した車が線路脇の電柱に激突し、倒れた電柱が電車の電線に絡まるという事故であった。復旧の目処はたたず、周辺では大混乱となっていた。

しかし、そこで産政塾のメンバーは事態を冷静に受け止め、各々の役割を見つけ混乱回避に主体的に取り組んだ。名鉄職員として駅員に的確な指示を出す者、代替の交通手段（タクシー等）を手配する者、また順次タクシーへ乗客を誘導する者、乗客の荷物を手分けしてタクシーに積み込む者、周辺道路に出て交通整理を行う者等々、またAグループとしては、リーダー・サブリーダーが中心

となり、約半数の先発隊（予定通り仙台に到着）と連絡を取り合い、今後の対応を検討した。このような産政塾生の適切な対応により、数時間後復旧するまで、ほとんど混乱をすることなく事態を乗り切ることができた。想定外の出来事により、大幅な計画変更での実施となったが、何よりも個々の判断力と団結力が大きな成果をもたらすことを身をもって体得できる実に有意義な時間であった。また、翌日には仙台市の行政の方から、球団を応援することで地域の一体感が生まれ、環境活動や地域活性化にも寄与しているというお話を伺うことが出来た。

6、テーマ：「ボランティア」について考える

(1) 愛知万博を訪ねて

05年8月19日～20日（塾生を2チームに分け各1日ずつ参加）、愛知万博で連合愛知が運営する「れあろファミリースクール」にボランティアとして参画した。

今まで何回かボランティアに参加する機会があったが、終わった後はいつも同じ感覚（すがすがしい達成感）を持つ。そもそもボランティアとは、「対価や見返りを求めない活動であるが、自らの満足感や人と関わることによる人間関係を報酬として得ることができる」、また「営利性にとらわれることなく、肩書きのない平等な人間関係の中で、自由な発想を持って物事を考えることができる」、それが社会の変革を先導する」という素晴らしい効果があるのである。反面、対価をもらっている仕事では、とかく発想まで小さくなりかねない。何かをやってみることで、困難に直面するこ

ともあるかもしれないが、その分やり遂げた時の達成感や学ぶことをたくさん得られる。一歩前に出てチャレンジしてみるこの大切さを改めて学ばされる経験となった。

7、やごうに

このように全5回の企画の全てを体験させていただき、自分にとっても通常の業務では得ることのできない様々なことを学ばせていただいた。

16期の活動を通して学んだことを、今後実践に移すことにより、自らの“殻”を認識し、更にはそれを破るために自己研鑽に励みたいと考えている。

最後になりましたが、小田桐塾長はじめ事務局の松井さん、スタッフの方々、また、塾生の方々、そして山口リーダーはじめAグループの皆さん、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

以上

「殻」からの卒業



名古屋鉄道労働組合

富田晃弘

<プロフィール>

とみた あきひろ (36歳)

- 1969年3月 岡崎市で生まれる
- 1987年4月 名古屋鉄道㈱入社・東岡崎駅勤務
- 1988年5月 名古屋車掌区勤務
- 1991年8月 名古屋運転区勤務
- 2000年9月 名古屋鉄道労働組合専従
現在に至る

<家族> 妻、長女(15歳)、長男(11歳)

<趣味> アウトドア

はじめに

入社して早や17年が過ぎ、それなりに経験も積み重ね重要な役割を任される事も多くなってきた。その一方で入社当初の様な、がむしゃらで一生懸命な自分が段々と影をひそめ、馴れ合い、居心地の良い職場に満足している自分がいた。

そんな時、産政塾の「殻を破る」という企画に出会い、職場にも自分を通して「新しい風」を起こせればと、期待と不安の入り混じる中、半年間に渡る「殻とは何か？」を探す貴重な体験をさせていただいた。

さてこのような機会を得て、最後に形として何を残せばよいかと考えあぐねた結果、ちょうど中3になる娘の学校の宿題で「自分史を書く」という課題を目にし、今までの半生を振り返るいい機会にもなると思いペンを執ることとした。

自分史

私の幼少の頃はというと、今となつては笑い話として語られるが、何度も死んでいたと思われた程それはそれはやんちゃだった。

その一例を紹介すると、

(2歳)家の前を走る名鉄電車の踏み切り越しに母を見つけ、追いかけようとしたところを線路脇で

農作業をしていた近所の方に抱きとめられた。抱きとめてくれなかったら間違いなく電車にひかれていた。

(4歳) 台風で家の前の川が増水し、覗き込んでいたら川に落ち流された。皆が心配する中、草にかまって川から這い上がってきた。

(小4) 国道1号線につながる急な坂道で、ローラースケートの勢いが止まらず、国道へ飛び出しそのうになり車にひかれ損なつた。

と、話は尽きない。ただ確かに言えることは、勉強を一生懸命にした記憶より、外が真っ暗になるまで、さらには服が真っ黒になるまで遊んでいた記憶しか残っていないことである。

遠距離恋愛

現在では携帯電話の普及により、手紙すら書かない時代になってしまったが、自分の中学時代には人生の転機とも言える出来事が起こっている。それは、現在の妻と出会ったことだ。同じ中学に通っていた妻は、付き合い始めた直後に埼玉県へ転校し、その後長い遠距離恋愛が始まった。今思えば、当時流行した「シンデレラエクスプレス」のCMそのものを実際に体験していたのだ。

転校後の連絡は電話が中心となっていたが、何しろ通話料がべらぼうに高い。仕方なく連絡は手紙でのやり取りとなる。今目にすれば恥ずかしい内容の手紙ではあるが、昔の記念品として大事に保管している。「想い出は心の中にしまっておく」とよく耳にするが、やはり形として残すこともよいも

のだ。

初めての挫折

人生初めてともなる挫折は、高校入学と同時に味わった。それは、ラグビー部が高校に存在しなかったことである。中学時代に、ほのかに思い描いていたラグビー部で青春を謳歌するという儚い夢は結局叶わずに終わってしまった。

何故ラグビー部なのかということだが、ボールを持ってタックルを華麗に交わし、独走態勢でトライする魅力に虜にされてしまったからだ。

そこで自分なりに考えた結果、まず足を速く鍛えることと基礎体力を作ろうと思い、中学入学時点で陸上部に入部する決断をした。陸上部で3年間鍛え上げたおかげで足を速くする目標はクリアすることができ、200M走やリレーの選手として試合に出場する機会を得ることができた。

仕方なく高校ではサッカー部へ入部することになるが、そのサッカー部も1日として練習に参加することなく山岳部からの入部要請により、転部を余儀なくされた。しかし、この山岳部へ入部したことにより、その後山の魅力に取り憑かれることとなる。

アウトドアのすすめ

山の魅力はというと、当然山頂からの景色は言うまでもない。山岳部での夏合宿の際、上高地から入山し、唐沢岳、北穂高岳を経て槍ヶ岳へと縦走する体験ができた。山に入ると様々な危険と隣り合わせになるが、その際自分自身で判断を下す事が最も重要になってくる。天候を考えての登山計画も直近の判断で下していかなければならない。その判断が生死を分けることにもつながるのだ。

このような経験を基に今の子供達に教えたことがある。現在は便利な社会となりボタン一つ押すだけで何でもできてしまう時代になった。しかし、何事に対してもよく考え、自分の意志を持ち、正しい判断ができる事の重大さは言うまでもない。

その上で、自分の子供達にはあえて不便な生活を体験させようと、休みともなると趣味と併せてアウトドアに出かけている。不便な生活の中で、自然の偉大さや自然との共有の仕方を少しでも教えてやりたいと思うからである。例えば御飯ひとつをとってみても飯盒炊飯で炊く難しさや、自然の中で食べる食事の美味しさなどを教えてやりたいと思い、今では子供と一緒になつてはまっている。

阪神タイガース

もう一つ子供とはまっていることがある。それは、阪神タイガースのファンであることだ。小五になる息子がいつから阪神ファンになったかは定かではない。だが、生まれた時から阪神戦しかテレビ中継は映さないし、家には阪神グッズばかりが並べられているのも影響しているのだろう。しかし、決して押しつけはしていないと自分では自負している。

ところで、我が愛する阪神タイガース、セ・リーグ優勝おめでとう。今年の阪神タイガースは強かった。シーズン終了間際、中日とのデッドヒートを繰り返し、ここぞという時に必ず勝利してきた。その積み重ねが優勝という結果につながったのだと確信している。

そして仙台・楽天へ

今回、産政塾の企画で東北楽天へお邪魔することができた。楽天は「地域密着」という方針を掲げ、東北初となるプロ野球球団として新時代に適合した運営に取り組んでいる。今人氣が低迷するプロ野球界にとって、地域が全面的にバックアップして盛り上げており、まさに理想の形で地域と球団がタッグを組んでいる。しかし、今年の成績は、38勝97敗1分と不本意な結果で1年目の幕を閉じた。

思い起こしてみれば、阪神タイガースも低迷が続けた時代が長かった。私が高校2年の時に21年ぶりのセ・リーグ優勝を決め、さらには初めて日本一に輝いた。それ以降強い阪神タイガースの時代が来るかと思われたが、その後も長い間低迷を続けることになる。

しかし、1999年に野村監督を迎えて少しずつ変化が現れるようになってきた。当時負け癖がついていたと言われる選手それぞれに勝つ喜びを備え付けることからスタートし、さらには若手選手起用と着々と基盤作りを行った。そして、星野阪神となり一昨年優勝！ようやくここにきて芯から強い阪神タイガースが作りあがってきたように実感している。

実際の球団事情はというと、過去素晴らしい記録を築き上げてきたベテラン選手や高額年俸の選手

を使わざるを得ない。きつと、球団経営者から起用法についての圧力が加わっているからであろう。しかし、改革は必要である。選手はグラウンドへ出れば年俸など関係なく皆が一生懸命闘っている。置き換えてみれば、会社の中では私もまだまだ若手である。与えられたチャンスを活かし、常時最先端で働けるよう自分自身で力をつけ、さらにはそれがいかになく発揮できるよう見習うべき所がある。そして、いつになるかは分からないが、有終の美酒を味わいたいものだ。

楽天も来期から野村監督を迎えることが決まった。産政塾を通して親近感も沸いた楽天から来期以降も目が離せないと言うより、是非応援を続けたいと思っている。

殻とは何ぞや

今回の産政塾に参加してまず思ったことは、自分たちで企画を立てる事の難しさや、逆に仲間との意見の食い違いの中から新たな企画を作り出し、さらにそこからまたグループの仲間との輪が生まれて来ると言うことである。

また、グループを超えた仲間とも同じ境遇の中で企画作業をしていることから、他のグループの企画も自分たちの企画のように感じられ成功のうちに終了しようと言う気持ちが生えてきた。これも一種の殻を破ると言うことではないか。普通ならば自分たちの企画以外については参加するだけで、どうでもいいやと思いがちである。しかし、どの企画にも興味を持ち、少しでも自分のものにする気持ちが大事であるという考え方が私の中にも、そして皆の中にも生まれてきたのだと思う。

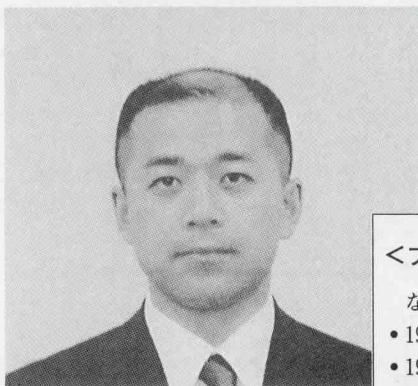
「殻とは何か？」それは、自分自身で作ってしまう一種の「固定観念」であるのだと今回の様々な体験から改めて実感した。そもそも殻とは存在しないものである。そして、いつしか知らず知らずのうちに自分の中に作ってしまうものである。幼少時代は、「これがしたい、あれがしたい」と先の事など何も考えずに行動できたが、年齢を重ねる毎にいろいろな考えが錯誤し、失敗を恐れることから自ら殻を作ってしまう。過去にとらわれず、さらには自分で失敗を恐れず行動すべきことを、身をもつて学ばせていただいた。殻は破るものではなく作らないようにしなければならない。これが私の辿り着いた結論である。

最後に

今回16期生の皆に出会えて本当によかった。約半年間という短い期間にもかかわらず、皆と目標に向かつて一つになれた気がしている。

忘れもしない出来事がある。それは仙台企画の際、中部国際空港へ向かう時発生した、名鉄常滑線での事故である。新舞子駅では皆が率先して旅客誘導を手伝ってくれた。本当に嬉しかった。その際言い忘れたことがある。皆ありがとう。今後も良き仲間としての付き合いを是非続けていきたいものだ。

「嵐のように去って」



東邦ガス労働組合

中 根 陽 造

＜プロフィール＞

なかね ようぞう（34歳）

- 1971年 愛知県岡崎市生まれ
- 1994年 岡崎ガス(株)入社
- 2003年 東邦ガス(株)と合併
- 2004年 東邦ガス労働組合 執行委員
現在に至る

＜家族＞

＜趣味＞

【はじめに】

185日間に亘って開催された「愛・地球博」が9月25日に閉幕した。私は計8回、愛知万博の会場に訪れた。来場者としてよりもボランティアとして訪れることが多く、会場は限られた場所しか見ていないが、それなりに満喫したつもりだ（ビールをたらふく飲んだので売り上げには協力できたと思う）。閉幕式のセレモニーをテレビで見えていたら、最後にモリゾーとキッコロが森に帰るために消えていくのを見て、思わず寂しさがこみ上げてきた。年とともに涙腺が緩くなるとは聞いていたが、このタイミングは想定外だ。また、この産政塾の活動時期がほぼ「愛・地球博」と重なり、私の中でこの2大イベントは何となく一対のものであり、「カトリーナ」じゃないが平凡な生活に、嵐を巻き起こしていったそれぞれ思いで深い出来事であり、今は一抹の寂しさを感じられずにはいられない。そんな感傷に浸るのもいいが、修了のレポートを作成しなければならない、期日は近づいている。重い腰を上げ、家のパソコンで作業を始めると「おとうさん、ミッキーみる！」ずるいと言わんばかりにもうすぐ3歳になる長女の乱入、このパソコンでディズニー映画のDVDが見たいらしい。父親と同じB型の頑固者、制止しようものならブチギれる。缶ビール片手にミッキーマウスの映画鑑賞をすることになってしまった。こんなことをしている場合じゃない！早く寝てくれ……

【開塾式】

「産政塾」に参加することとなった。周りに「産政塾」を経験した人がいないので、どんなところか聞く術がない。「塾」とあるので、勝手に明治維新の源「松下村塾」のようなものをイメージした。やたら熱い人たちの集いに赴くのはどうも苦手だ。反面、新鮮な気持ちを持てることで自分を見つめ直す良い機会になるかもしれない。悪くないかも。しかし、テーマは「殻の外へ踏み出そう」である。毎回喧喧諤諤と、このテーマについて語るのだろうか？ 私なんぞにそんな難しいテーマでの議論や企画ができるのだろうか？ 期待と不安の中臨んだ。自己紹介が始まるとみんな毅然とし、かつユーモアも取り入れ話す。強者の集いじゃないか、上手くやっていけるのだろうか。不安がよぎったが、それは杞憂であることがすぐにわかった。親睦会では昔からの知り合いの集まりかのように皆が打ち解け合っている。応用力の高い、人間味の溢れた方々の集まりであった。

【第3回企画 中京女子大学を訪ねて】

アテネオリンピック女子レスリングのメダリストと会える！ スポーツ全般が好きな私にとってメダリストとの対話は楽しみであった。練習体験とあるが、超一流と言っても女子の練習、私自身現役で草野球をやっており、体力にはそこそこ自信はある。失礼ながら十分ついていけると甘く考えていた練習が始まると、そのレベルの高さに圧倒された。「塾」のメンバーの中では粘って練習（と言うよりウォーミングアップらしい）についていった方だが、恥ずかしながら途中リタイヤとなってしまう。練習でペアを組んだ女子選手にお姫さま抱っこしていただいた時の妙な感じは、今でもよく憶え

ている。その後は塾生対選手の相撲による対決、小学校時代相撲は得意だったので、相撲なら何とか勝てるさ、と少しにやけ面で男の意地を見せるつもりだった。対戦相手は明らかに私より小柄。ムズッと組んだ、信じられない力、動かない。死闘の末、何とか一人目には勝利したが、二人目にはあっさり投げ飛ばされた。私を含め、運動不足のおじさん塾生たちが次々投げ飛ばされる姿は、もの悲しさを感じた。

対談で感じたことは、確固とした夢を持っている人は、迷いなく自分の道を進んでいる。そして力強く輝いている。今の自分にはここまでの強さは無い、夢も無い、信念も無い。日々の生活に慣れ、馬齢を重ねてしまったか。無いものづくしの自分が小さく見えた。

【第4回 女将塾を訪ねて】

私たちのグループが担当したこともあり、最も印象に残っている企画だ。女将を育てる「女将塾」に、我々産政塾のメンバー（男ばかり）が入塾体験する。高級旅館「銀花」を貸切り、宿泊まですることとなってしまったため、どう安く見積つても予算オーバーは明らかでした。しかし私たちの熱意が女将塾を動かしたのだろうか、採算の合わない条件にもかかわらず、快く我々を迎え入れてくれた。ダメなのではないか、難しいのではないかという状況でも、思い切つて思いを伝えること、とにかく一歩踏み出してみること、思いのほかスムーズに活路は開けることはある。まさに産政塾のテーマでもある殻の外に踏み出す体験ができた瞬間であった。

女将塾塾生は、「接客業を通じて誰かの幸福のタメ生きる、働く」そんな信念を持って、女性ならではの仕事に魅力を感じ、誇り・やりがいを持って働いていた。彼女たちは輝いていた。そして夢に向かって突き進む意志は力強い。目標を持って、それに向かって一步一步邁進することの大切さを改めて認識することができた、大変貴重な体験であつた。

【第5回 楽天球団と仙台市役所を訪ねて】

野球好きの私にとって、新球団「東北楽天イーグルス」を観に行くことのできるこの企画は楽しみにしていた。小さいころから好きな選手といったら中日ドラゴンズの田尾選手。大洋ホエールズの長崎と首位打者の争いをする中、大洋の徹底した敬遠のボール球にフルスイングした姿は私の中では野球殿堂入りだ。その田尾が監督を務めている、勇姿が見たい！しかし、浮かれていることに罰が当たったのか、向かう途中に事件が起こった。なんと空港に向かう途中の電車が事故で止まってしまったのだ。目の前での事故、早く空港に行かなければならない客でパニック状態となった。駅員に詰め寄る人々や緊急で回ってきたタクシーに、我先に乗り込もうとする人でさらにパニックとなった。私は少しでも流れが良くなるようにしようと、率先してタクシーに乗る人の荷物をトランクに詰め込み始めた。でもそれはパニックになつて、自分の事しか考えていないと思えない理不尽な事を言つて、駅員さんに詰め寄る姿を見兼ねて取った行動だった。こんなパニックの時にこそ人間の本質が出るものだ。閉塞感漂う時代のせいかな、そんな人が増えたような気がする。しかし、産政塾のメンバー

は何をすべきか役割を自ら考え、パニック回避のために連携プレーで事態収拾に努め始めたのだ。い
らだった気持ちで行動を始めた私よりも、もっと広い心で作業をしていた。すばらしいメンバーに出
会えた！と思った瞬間だった。

【第6回 愛知万博でボランティアを実践&閉塾式】

不精な性格「人ごみの中なんてまっぴらだ、1、2回行けばいいところだろう」と思っていた愛知
万博だが、当日で7回目、殆どボランティアの関係で訪れていた。それまでは「ボランティア」と
言っても、何をしていたのかわからず関心が少なかった私だったが、「愛・地球博」をきっかけにボ
ランティア体験をすることとなった。様々な活動を通じてそこから感じられたことは、心の充足感、
何とも言えない気持ちの充実感であった。また、環境や人に優しくすることは、それは必ずいつか自
分に返ってくる、自分のためでもあるということを学んだ。この体験から、ボランティアや環境保全
に対する意識が大きく変化化したと思う。参加したことは大きな意義があった。

また、万博全体としても賛否両論あったが、「愛・地球博」を機会に環境へのさらなる意識付け、
助け合う気持ちを育てることに向けた、持続可能な社会作りの種まきが十分できたのではないだろう
か。今後はその種を育てること、大きくすることに少しでも協力しようと思った。

【殻の外へ踏み出せたか？】

産政塾の様々な企画を通じて多くの方と知り合い、体験する中で自分なりに少しではあるが、物の捉え方や考え方が変わったように思う。活動を振り返ると、それぞれ感動し、発見があった。結果「殻」が破れたかどうかなんともいえないが・・・でも自分を見つめ直すいい機会になったと思っている。「殻」の外に踏み出し自分を人間的に高めたい！大きくになりたい！という思いはみんな持っているが、それを行動することは容易なことではない。

そこで「殻」ってなんだろうと考えたとき「殻」とは「自分で決めた能力の限界」ではないかと考えた。自分が人間的に成長したい、つまり「殻」を破りたいと思うなら、その限界以上が求められる環境に思い切って自分を置くことが求められてくる。厳しい状況が待っているかもしれないけれども変化を恐れず一歩踏み出すことで、人は成長するのだと思う。それが自己実現に繋がるのではないだろうか。

また、世の中は常に変化している。つまり「殻」は破っても自然に修復してしまったり、破ってもその先には別の「殻」があったりするのだと思う。しかしその「殻」は踏み出すことを恐れるマイナス思考が作り出したもの、「殻」を破ろうと常に意識すること、気持ちを持ち続けること、つまり情熱を持つて生きること、自分が日進月歩変わっていく。

産政塾を通じて、物事に対する心構えの大切さや、「殻」破り踏み出すきっかけとなるいろいろな

機会に積極的に参加する大切さを改めて感じさせられた。

私自身、昨年より労働組合執行委員としての仕事をしている。就任当初は今までと環境が大きく変わり、ある意味「殻」をやぶらざるを得ない状況にあった。今こうして産政塾に参加したり、万博にボランティアとして参加したり、組合活動を通じて様々な貴重な経験をさせていただくことで、人と人とのつながりの大切さや喜びを再認識させていただいている。この貴重な体験で得たことは多くの方々に少しずつでも伝えて行きたい。

【最後に】

短い期間でしたが産政塾に参加し、第16期のメンバーと様々な企画を通じた交流は、間違い無く財産となりました。楽しくも充実した16期となったのは、小田桐塾長のカリスマ性、事務局松井さんの「いじられ役？」ぶりが大きく寄与したと思います。自己主張が強い塾生が多く、苦勞が多かったと思いますが、熱心に運営に当たっていただけました。感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

16期 産政塾を振り返って



豊田市役所

中 野 将

<プロフィール>

なかの まさる (31歳)

- 1974年 福井県で生まれる
- 1996年 豊田市役所入庁
清掃部ごみ資源対策課に配属
- 2000年 福祉保健部生活福祉課に配属

<家族> 妻・長女 (3歳)

<趣味> 野球

平成16年11月上旬に人事課からのメールで「来たれ、意欲満々の若者たち！」と題した産政塾の募集要項が送られてきた。その頃の自分は何をするにも目標がなく、仕事についても心躍る刺激もなくなっていた時期であった。そんな中、応募にあたり豊田市役所ではレポートの提出があった。いつもであればレポート提出が面倒になり、応募をあきらめていたかも知れないが、なぜか産政塾のテーマである「殻の外に踏み出そう」という言葉に刺激を受けてレポートの提出した。そのレポートの内容が良かったのかどうかは全くの不明であるが、産政塾参加が決定したのあった。

△産政塾に参加して▽

「第1回 開塾式」

平成17年1月19日（水）

どんな企業からどんな参加者が集まるのだろうかとの期待感から、他の参加者と話が噛み合うのだろうかとの不安を抱き参加した。自己紹介では、得意の「大げさ」に話をして、自分自身を表現した。しかし、他の塾生の堂々とした話術、個性豊かな表現力に圧倒されたのは確かである。

「第2回 官民の社会福祉への取組みを学ぶ」

平成17年4月8日（金）

最初に福祉行政の先進都市である高浜市を訪問し、自助、共助、公助の精神と事業体との協働で、市と市民と事業者が一体となって取組んでいることを学びました。今後は、福祉だけの観点ではなく、市民が幸せになれる町づくりを目指し、行政だけでは出来ない、地域力を生かした取組みが必要であると考えさせられました。

次に日本福祉大学高浜専門学校を訪問し鈴木校長からご講演をいただいた。「感覚・価値観でものを考えるな。事実・実証が大切である。」との言葉が非常に印象に残っている。人は何事にも慣れなくては固定概念だけで話をしてしまいがちである。再度、現地・現物の大切さを教えられたように思います。

午後からは中電ウイングを訪問した。従業員のあいさつは自然に出てきているし、生き生きと自身をもつて仕事をしている。自分の可能性を伸ばすために、できることを一生懸命に頑張り、次の目標にチャレンジする姿に感動を覚えました。

「第3回 世界を目指す選手から夢に向かって挑戦する姿勢を学ぶ」

平成17年5月11日（水）

中京女子大学レスリング部を訪問し、坂本コーチの授業参加、レスリング部の栄監督との懇談、選手との合同練習、選手と塾生の相撲での勝負を行った。私事ではあるが小さい頃から野球をしており、また大学時代には野球の指導者を目指していたこともあり、栄監督の指導方法や選手との接し方に興味があった。

栄監督は女性を指導する難しさの中に、甘やかすと図にのる、厳し過ぎると辞めてしまうと話をされた。これは女性に限らず男性にも言えることではないだろうか。大きな夢・目標を明確に持ちそれに向かって邁進する気力があるかないかの差ではないかと考える。

栄監督は選手に試合のシミュレーションをさせ、勝つためにここが足りないと思えば選手に伝えていく指導を行っている。レスリング以外では選手と冗談を言い、社会人としての人間形成の教育も重

点的に行っていた。

練習中に選手同士のライバル心をむき出しにした目、練習風景には世界一のレスリング部であると思うとともに、大きな夢・目標に向かって邁進する選手に感動覚えました。

「第4回 女将塾の体験を通し、CSと経営学を学ぶ」

平成17年6月24日（金）～25日（土）

最初に驚かされたのは、Cグループの行動力にあります。女将塾の企画調整の段階で交渉に東京まで行き、尚且つ一泊約4万円する城崎温泉「銀花」に破格の宿泊料で交渉をしてしまう。すごい「殻」破りであったように思います。さすがです。

女将塾での接客業の体験、懇談を通して一番印象に残っていることは、女将塾生の目の輝きであります。接客業のプロを目指したい、経営者として成功をしたいという大きな夢や目標に向かって努力をしている姿には何かオーラみたいなものが見えたような感じがしました。また、その女将塾生の夢を叶えてあげようと必死に指導をしている社長、大女将の存在というものも大きな塾生の力となっていることを感じました。経営感覚のある女将を育成し派遣する、頑張る旅館を応援したい、旅館を守ることによって日本文化を守りたい、それが女将塾という企業理念となっている。女将塾の従業員と女将塾の経営者が求めていることが同じであり、理想の企業であると感じました。

「第5回 楽天球団と仙台市役所を訪ねて、殻を破る夢と挑戦の姿を仙台に学ぶ」

平成17年7月10日（日）～11日（月）

この企画では予想外のトラブルに巻き込まれてしまったが、産政塾生の団結力、連帯感が大いに発揮できた企画になったことは間違いない。

中部国際空港に向かう電車が空港駅目前にトラブルによりストップしてしまったのである。私はその電車の後方車両に一人で乗っていた。前方車両に十数名の塾生が乗っていたことは承知していたが電車がストップした時に心細くなり、動揺したのは言うまでもない。他の乗客も同じ気持ちであったのか、また飛行機に間に合わないという苛立ちから名鉄職員に罵声を浴びせる乗客も多かった。名鉄職員の対応に奮闘している姿を見ながら、塾生は今何ができるのかを考え、乗客をスムーズにタクシーに乗せるための誘導、すでに空港に到着している塾生への情報提供と研修日程調整、仙台に行くため手段の検討等の自然に塾生が役割分担をして迅速に行動できたように思う。

また予定通りに仙台に到着した塾生は先方に事情を説明し、計画通りのスケジュールをこなした。やはり第16期産政塾生の団結力、連帯感が大いに発揮できた企画であったことは間違いない。

でもなぜ、まだ「正式」には4、5回しか顔を会わしていない塾生にこんな団結力、連帯感が生まれたのであろうか？酒の席が多かったから？

「第6回 愛知万博でボランティアを实践！ボランティアについて考える」

平成17年8月19日（金） 12時（土）

世界的なイベントである愛知万博で運営する「れあろファミリースクール」にボランティアとして参加し、またボランティアを実践している方から講演もいただいた。

私は今まで数回ではあるが、ボランティアを経験している。しかしそのボランティアというのは職

場からの要請で仕事の一環として行っている気持ちであった。しかし今回のボランティアはどこか様子が違っていた。ボランティア活動（主に子どもに日本の遊び文化であるお手玉を教えるという役割である。）を通して、また子どもとふれあう中で自然と笑顔が溢れていたことである。今までのボランティアではなかった姿である。

またお手玉を通して「殻」のある大人、「殻」のない子どもの様子が発見できた。大人にお手玉を勧めると、「失敗したら恥ずかしい」等の理由で拒む。しかし子どもは私たちの手本？を参考に、何回も失敗を繰り返していた。その失敗を怖がらず取組む姿に「殻」破りのヒントを得たような気がした。

「第7回 閉塾式」

平成17年8月19日（金）

「殻の外へ踏み出そう」というテーマで各グループに分れ、企画、運営をしてきた。その中で気付かされた部分、自分として何が変わったか、何を変えなければいけないかの議論があった。これで第16期 産政塾が終わってしまうのかとの寂しさを覚えながらの討議になってしまったような気がした。

△最後に▽

小学校、中学校と親元で野球を中心に生活、高校、大学では親元を離れ「勝ち」にこだわる野球を続け、その組織の中で自分自身を磨いてきた。それが社会人になり、またその組織の中で自分自身を磨くことになった。野球中心の生活から仕事中心の生活となり10年、自分の目標というものを見失い

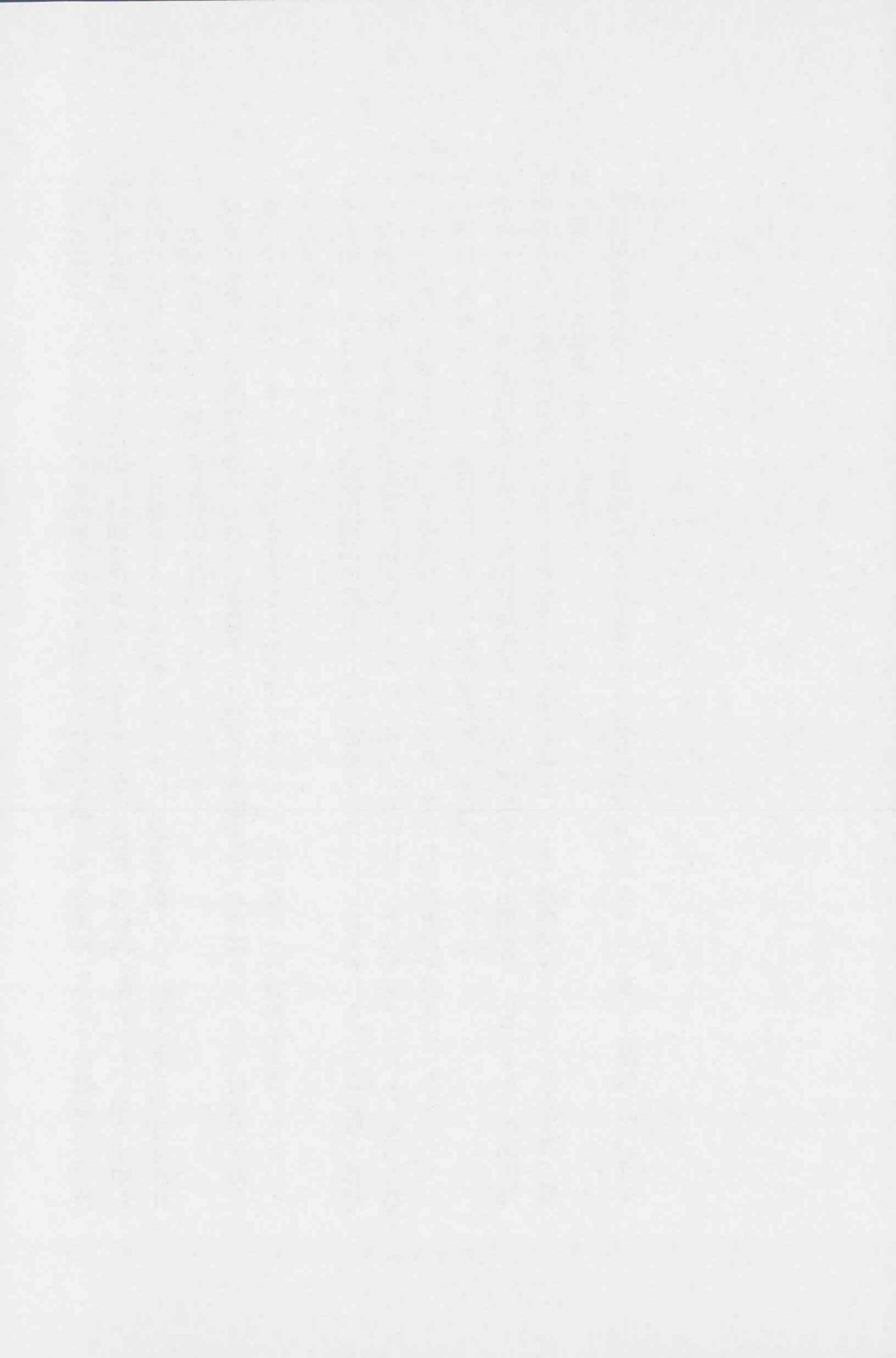
がちとなっていた。その頃に産政塾という未知の世界に飛び込んだ。時間的に今までの野球人生、仕事人生と比べれば、非常に短い時間ではあるが、今までにない経験、価値観を味わった。知らず知らずの内に、自分の考え、夢、目標が小さくまとまってしまい、固定概念だけで物事を考え、自分自身に向上心がなくなっていたことに気が付いたのである。

何事にも成功、失敗はある。それは結果論であり自分が評価することではない。自分自身が後悔をしないように向上心をもって努力をすることが大切であるし、これからはその過程を大事にしたいと思うようになった。

その第一歩ではあるが、大学野球部の監督としての活動を始め、自分自身がいろいろな経験、勉強をしながら「殻」を破り、学生達に伝えていきたい。周りからは仕事、野球の両立は難しいと言われている。実際に行動を起こし、その熱い、熱い気持ちを持っていれば絶対にやり遂げられる。いや、やり遂げてみせる。そんな気持ちにさせてくれた産政塾には感謝したい。

最後にいろいろな感動を与えてくれた訪問先の皆さん、産政塾の小田桐塾長、松井さん、第16期塾生の皆さん、大変お世話になりました。ありがとうございます。またこのような機会を与えてくれ人事課、職場の皆さんには感謝しております。

第16期産政塾塾生、これが最後ではありません。必ずお酒でも飲みながら？楽しく議論していきます。



「生きがい」の追求



豊田自動織機労働組合

服 部 敦 哉

<プロフィール>

はっとり あつや (33歳)

- 1972年 9 月 西加茂郡三好町生まれ
- 1997年 4 月 (株)豊田自動織機入社
- 2004年 9 月 豊田自動織機労働組合 専従執行委員
現在に至る

<家族>妻、長男 (4歳)、長女 (0歳)

【はじめに　　ゝ人生を振り返ってゝ】

『生きがい』をもつてより良く生きること』は誰もが抱く共通の人生目標である。私も今年で33歳。人生60年と言われた時代からすると、すでに人生の折り返し地点を過ぎている。おそらく記憶力、体力もピークを過ぎ、ただがむしゃらに勢いだけで過ごしてきた20代とは少し生き方を変えていく必要があるのではないか。会社に入社して以来、日々仕事事に追われ、何か自分の人生そのものについてじっくり考える時間さえなかった。むしろつくろうとする心のゆとりがなかったのかもしれない。今、この塾誌の原稿を書くにあたり、少し人生を振り返ってみようと思う。

私の10代までの人生は、ただ親の期待に応えるべく、無難な道を歩んできた20年であった。つまり、人生の分岐点では父親の助言が道標となり、まさにその通りの選択をしてきたのである。

高校受験では、「今の人生、大学は出るべきだ」という父の助言。その一言で地元の普通科の進学校に進んだ。次に訪れた第2の選択、2年生になるときの理系と文系。「大学を出て就職するには理系の道に進むべきだ」という父の助言で迷わず理系を選択。そして3年生での大学受験における志望校選択。「やはり就職を考えると地元の工業大学へ行った方がいいぞ」という父の助言で、地元の工業大学（経営工学）へ入学。受験もそれなりの苦勞をして合格し、決して後悔をするようなことはないが、そこには自分の意志がなく何か寂しい感じがした。

決して将来の夢がなかったわけではない。中学生時代には、吹奏楽部に所属しユーフォニウムという管楽器を担当していたが、レッスンにも通いながらプロの演奏家を目指そうとしていた。しかし、

「音楽家では食っていけないぞ」という安定した職を望む親の気持ちに応え、夢の実現を断念した。

【学生時代に学んだこと】

大学に入学し、ひとつ大きな問題に気がついた。工業大学に進みながら、実はあまり理系科目（数学科、理科系）が得意でないこと。つまり、数字が並んでいること、計算することに対して少し苦手意識をもっていた。しかし、唯一の救いは経営工学の分野で産業心理学の道があったことである。迷わず産業心理学を学ぶことを選択した（言うまでもなく、このときの選択には父の助言はない）。振り返ってみると、このときが初めて自分の意志が働いた、つまり「殻の外へ飛び出した」人生最初の出来事であったかもしれない。

教授の専門分野としてそこで学ぶことになったのが、実は今回タイトルに掲げた「生きがい」についてである。学生時代はアルバイトに明け暮れていた毎日で、ほとんど勉強してきたことに対して記憶がないが、「なるほど」と納得したいくつかのことは記憶に残っているので、以下で若干紹介する。その担当教授（定年間の教授であった）が人生経験を通じて、また学者人生をかけて発見したことは、『「生きがい」Ⅱ「死にがい」』だそうである。「死にがい」とは「人に迷惑をかけずに死ぬこと」、つまり自分の欠点を顕在化させていくことである。人は自分の欠点は無意識化しようとする。したがって、自分では気づきにくい。それでは、どのようにして意識できるかというと、他者に指摘されてはじめて欠点に気づくのである。人は自分の短所を指摘されると、どうしても腹が立つ。腹が

立つということは、逆にいうと自分自身が受け入れられないということである。他人の指摘に対してきちんと耳を傾け、自分自身を常に成長させていく（自分がどのような人間であるのかを知り、それを受け入れる）人こそ、「自己実現」ができ「生きがい」をもつて人生が過ごせるのである。

このとき、自分の欠点を指摘してくれる人間関係、つまり腹を割って話し合える人間関係をどれほど構築しているかが重要であるといえる。また、どれほど広い世界・人と関わり合って、いろいろな角度から自分を映し出し、変えていくことができるかということも「自己実現」生きがい」にとつては大切ではないか、そんなことを学生時代に自分自身の中で考えるようになっていた。

【就職、結婚、出産】

就職して社会人となり、3年目に結婚、また翌年に長男が生まれた。自由奔放に過ごしてきた学生時代から一転、企業人・家庭人（夫・父）・地域人という様々な肩書きを背負うこととなった。

学生時代に、「いい結婚をしろ」としきりに教授が語っていたのを思い出す。「いい結婚」とは、「お互いに欠点を指摘し合える仲であること」である。確かに今、妻以上に本音で自分の悪いところを指摘してくれる人はいない。まだまだ妻の指摘を素直に受け入れるほど人間的にできていない（腹を立ててしまう）自分がいる）が、今後も夫婦の会話があり、「言いたいことを言い合える仲」でありつづけたいものである。

【産政塾で学んだこと】

さて、就職して以来、少しずつ感じ始めたことがあった。それは前述したように常に何れかの肩書き（会社・家庭・地域など）の中に身を置き、それぞれの立場・役割・責任をもって考え、行動しているということである。悪く言えば、守りに入り、視野が狭まり、また中立的なものの見方・感じ方・考え方が出来なくなってきたように思える。まさに「殻」に閉じこもっているような感じである。「生きがい」に対しての行き詰まり感とも言えるかもしれない。おそらく、自分だけでなく多くの人が同じ立場にあると思う。

それを脱するきっかけが、今回参加させていただいた「産政塾」であつたのではないか。都合により貴重な第3回（中京女子大学レスリング部）の企画に参加することができなかったが、参加させていただいたすべての回において、普段では絶対に体験することができないことが体験でき、またいろいろなことを考えさせられた。

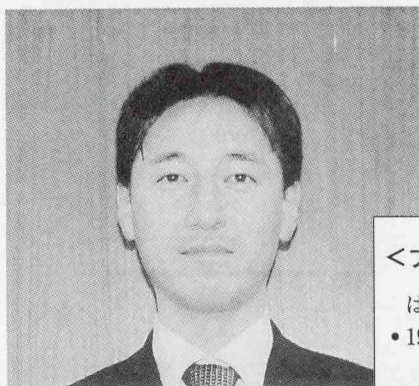
第2回の中電ウイングでは本当にいきいきと前向きに働いている障害者の方々の姿。第4回の「女将塾」で学んだお客様への細やかな心遣いと、将来に夢と希望を抱いて日々前向きに取り組んでいる塾生達。第5回では、これまでの球団運営の発想を根底から覆す楽天・仙台市民の取り組みの数々。また、第6回においては、おそらく一生に一度しか経験できないであろう万博ボランティア。これら全ての企画は、一生忘れることができない貴重な体験となった。そして、自分がこれまで持ち得ることができなかった幅広い考え方を学ぶことができた。

そしてもうひとつ、産政塾を通じて利害関係のない「本音」でいろいろなことが語り合える仲間を知り合えたことも、これからの人生にとって大きな財産である。

【おわりに　　これから的人生について】

産政塾での企画、また仲間との出会いはいずれも自分にとっての「生きがい」につながる貴重な機会であった。まさに、自分の「殻」を破るきっかけづくりとなった。小田桐塾長、事務局の松井さん、産政塾の塾生の方々全員に心から御礼を申し上げたいと思う。

産政塾を振り返って



中部電力労働組合本部

番 条 喜 芳

<プロフィール>

- ばんじょう きよし (40歳)
- 1965年12月 三重県志摩郡阿児町生れ
(現在の志摩市阿児町)
 - 1984年4月 中部電力(株)入社
 - 1999年6月 中部電力労働組合 三重総支部
常任執行委員
 - 2004年5月 中部電力労働組合 本部常任執
行委員

<家 族> 妻、息子2人、娘1人

<趣 味> ゴルフ、他いろいろ？

一 はじめに

第16期産政塾に参加させていただきありがとうございました。

ところで、今回の産政塾への参加要請は突然にやってきました。

「産政塾」が何をするところかわからないこと、募集対象が28歳～35歳としている中で、いきなり39歳の私が選ばれた時は、驚きと同時に「何故」と疑問に思いました。

しかし、選ばれた以上は異業種の方々とお話することができると期待と、年齢の枠を越えて参加することが産政塾のテーマである「殻を破る」ことであると自分勝手に解釈し参加させていただきました。

二 振り返る

各グループの企画に参加して感じたことを振り返ってみたいと思います。

第2回 高浜市役所、中電ウィング（株）を訪ねて『官民の社会福祉への取り組みを学ぶ』

第3回 中京女子大学を訪ねて、夢・希望への挑戦『世界を目指す選手から夢に向かって挑戦する姿勢を学ぶ』

は残念ながら都合により欠席となりました。

（第3回参加者から話を聞くと研修は体力的に大変だったそうですが、交流は大変有意義だったと聞き参加できなかったことが非常に残念でした。）

第4回 女将塾の体験を通して、CSと経済学を学ぶ

今回の企画では、女将への志や働くことに対し強い目標を持った方々にお会いすることができました。

女将塾塾長の話によれば女将塾は女将を育てるだけでなく、旅館再生にも力を入れている。また、「女将塾塾生には将来代表取締役となっていただくことを目標に教育しており、単なる労働力育成の場ではない。」との言葉に旅館業にかける熱い思いのようなものを感じました。

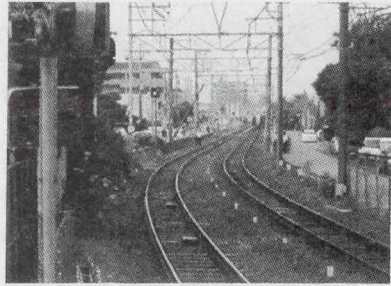
女将塾の塾生にもお話を聞きすると、全ての方が女将を目指しているわけではなく、経営学について学ばれている方もいて熱い志で修行している姿をみた気がします。

私は労働組合に席をおき、「職場で働く組合員が働きやすい職場づくり」を目指し活動を行っていますが、漠然とした目標でまだまだ自分の未熟さを感じるとともに、組合専従者としてもっと多くのことを学ばなければならぬと改めて感じる研修でありました。

第5回 企業人としての社会貢献の重要性、地域と接する心構えを学ぶ
思わぬハプニングでスタートを切った企画でありました。（線路際での交通事故の影響で電車が遅れ、搭乗予定の飛行機に間に合わず、電車で仙台まで行くことに…）



女将塾 山本塾長



写真中央の電柱が傾いている
のがわかりますか？

大人たちをお願いするよりも、粗品をえさ（？）にして子ども達にも野球観戦を楽しんでもらえる工

夫はアイデアだと思いました。

地域と球団が一体となって野球観戦を楽しめる活動がされている一端を垣間見ることができました。

二日目には仙台商工会議所の方の話しを聞くことができました。

楽天イーグルス発足年となる今年は、地域の盛り上がりや期待も大きいと思いましたが、五年、十年先と同じような盛り上がりがあるのか、また地域と密着した活動が継続できるのか一抹の不安を感じる研修でもありました。



ハプニングの影響で、当初予定していた楽天事務所の方のお話

（楽天球団の球団経営、環境活動の取り組み）を聞くことができず少し残念でありましたが、フルキャストスタジアムでのボランティアによる環境活動を直接見ることができました。その中で、ごみの分別は特に徹底されている気がしました。また、球場内でのジェット風船を飛ばした後の収集にも工夫が凝らされていました。何個だったか忘れましたが一定の個数の風船を集めて係りに届けると粗品（シール等）が貰える。観戦していた子ども達は一生懸命になつて集めていました。大勢のスタッフで集めるよりも、観戦している

第6回 愛知万博でボランティアを实践『ボランティアについて考える』

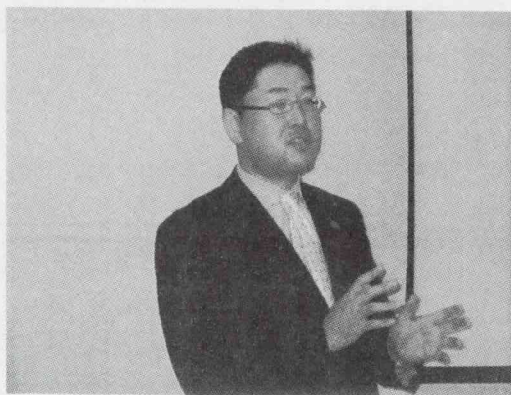
とうとう最後の企画となりました。今まで私が参加した企画はどちらかと言えば受身の内容(講義・講演)が中心であった気がしました。しかし今回は、実際開催されている万博会場でのお手伝い(ボランティア)をするいわば実践でありました。

一度に産政塾の塾生全員が参加することができなかったため二日間に分けて行うこととなったことは少し残念でした。

愛知万博に行く前に河合健太郎氏(愛知県立春日台養護学校教諭、あいち障害者フライングディスク協会事務局長)よりボランティア活動について講演を聴きました。その話の中で、産政塾の第2回訪問先であった中電ウイングもフライングディスク(プラステック)でできた円盤)競技に協賛していることと、従業員の方々が参加していることを初めて知りました。

ボランティア活動の場は多く存在しています。やろうと思えばすぐできると思います。しかし、自ら飛び込もうとはしない。機会が与えられ、強制しないと参加しないのが現状ではないでしょうか。(私自身も同様な気がする。)

そのような気持ちの中、最も貴重な経験ができたのが、愛知万博でのボランティア活動だった気がします。(もともと祭り好きなだけかもしれませんが。)



河合健太郎氏

参加した活動は、連合・労福協（れ・あ・ろ）が企画するイベントへ運営スタッフとして参加することができました。

自ら飛び込んだ活動ではなくテーマの一環で入った活動であったため、どのようなスタンスで活動していこうかとすぐ形から考えてしまいました。

しかし、形にとらわれていたら「殻」を破れないと思い、万博を訪れた方々（特に子ども達）に、「楽しんでいただきたい」という思いだけで対応することとしました。

当日は、自分も楽しみながら来場していただいた方々の笑顔を見ることができたことは、今後の地域行事や各種イベントでのボランティア活動への参加について改めて考えさせられる研修であったと自負しています。

三 これから・・・

研修のテーマであった「殻を破る」ことは自分自身できなかったかもしれませんが、「固定観念」という殻を少しでも破ろうとする気持ちができただことは今回の研修を受けた意義があったと思います。社会人となって20年、人生の折り返し地点として考えた時、私の人生はまだまだこれからです（きつとそうであってほしい）。

子ども達のようなチャレンジ精神を見習い、勇気と労力をかけ自分を磨く為に果敢に挑戦していきたいと思います。また、異業種の方々と久々に交流できたことは、何より貴重な研修でありました。

今回の研修で感じたこと、学んだこと、今回知り合った方々との繋がりを自分自身でより良いものに作り上げていきたいと思えます。

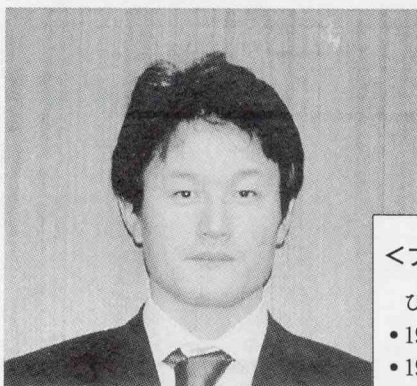
四 最後に

全ての企画に参加できなかったことは非常に残念でしたが、今回知り合った方々とできる限り永いお付き合いをしていきたいものです。

今回の研修に参加させていただきお世話になった塾長、共に学んだ16期塾生の皆さん、事務局の皆さんに改めてお礼申しあげます。

本当にありがとうございました。

卒業、そしてこれから



刈谷市役所

平 野 元 章

<プロフィール>

ひらの もとあき (35歳)

- 1970年 8 月 兵庫県伊丹市生まれ
- 1995年 4 月 刈谷市役所入所
総務部資産税課配属
- 2000年 4 月 都市整備部公園緑地課配属
- 2004年 4 月 福祉健康部障害福祉課配属
現在に至る

<家族> 妻・息子・娘

<趣味> バイクで風になる

さて、とうとう産政塾誌の締切りが迫ってきた。月日が過ぎるのは早いものである。

昨年度の産政塾誌は参加するにあたって読ませていただいたから、もうかれこれ十ヶ月も前のことになる。その時にはギリギリまで書かない人が多いんだなあと、まさしく今となつては他人事のように思ったものだが、とうとうその当事者になつてしまった。なにしろ伝統ある産政塾誌である。一部ではポイコットだ寄せ書きでお終りだと不穏当な発言も飛び交つていたようではあるが、そう簡単に白紙で出せるくらいの肝の据わりようなら今更塾を破る必要もまた無いわけで、観念して産政塾を終えた感想など綴ってみるのである。

「殻」とは何か？

産政塾とは、「殻」について考えさせられるところだ。人にはそれぞれの「殻」があるようで、閉塾式での塾生みんなの話を聞いてみても、十人十色、色んな捉え方があるものだなあと感じたものだ。ちなみに、「殻」を辞書で調べてみると、「外界から自己を守る外壁。その外壁に守られた世界」とある。なるほど、殻の中は気持ちよいところらしい。

で、そんな「殻」から外に一步踏み出してみようと産政塾は誘うのである。「そこ」は気持ちよい所かもしれないけど、外にはもつと色んなものがあつてあなたの知らない世界があるんだよと誘っている。なにしろTシャツにまで「一步踏み出せ！」と書いてあるくらいだ。確かに、産政塾という存在自体が異業種交流の場であり、参加者それぞれが持ち込む「濃いもの」でいっぱいである。元来素

直でノーマルなわたしは、その混沌に最初は目を白黒したものであった。今だから書くこともできるが、開塾式の懇親会が終わったあとはぐったりで、日ごろ身を浸している殻の中はなんと心地よいものかと実感したものだった。

さて、そこでわたしの「殻」である。

わたしが産政塾に参加する中で考え、また産政塾を終えて感じる「殻」とは、「自分の置かれた環境に慣れ親しむうちに、無意識につくりだした自分自身の限界」というものである。蚤を小さな箱に入れておくと、本来跳べる筈の高さまでは跳ばず、その箱から出た後も箱の高さまでしか跳ばなくなるんだそう。これは昔読んだ漫画にあったのだが、そんな記憶が甦ってきたりして、蚤で言うところの存在もしない箱が殻なのかななんて考えている。

そして、自分の中にも色んな要素があつて「殻」をつくりだしているのだろうが、「公務員としての自分」というのもその要素のひとつではないのだろうかと思ったりする。

そもそも、わたしは産政塾を自分から志望して参加させていただいた。どうやら、そんな奇特な人はあまりいないようで、開塾式のときに上司から言われて参加した人の多さに驚いて、ハズレだったのか？と密かに心配したりもした。まあ、そんな心配は杞憂に過ぎなかったのだが・・・それはさておき、何故、志望したのかというと、民間企業、それも一流企業と呼ばれるような会社で揉まれてきた同世代の人はどんな風になっているんだろう？という興味、否、正確に言うとうと不安があつたからだ。公務員をやっていると、世間からの叩かれっぷりはそれはもう気持ちのよいくらいだ。公務員の不祥事、行政改革の必要性を伝えるニュースを耳にすることは珍しくもない。クビにならないから何し

ていてもよい、仕事は暇でしようがない、そんなイメージを持っている人はたくさんいる。国政でも公務員削減が話題になるくらいなので、実態もイメージから遠からずかもしれないが・・・まあ、そんなマイナスイメージ吹き荒れる中、公務員として十年も過ごしていると、世間の常識からずれてしまっているのではないかと不安になってしまふのが正直なところである。いくら「自分は違うんだ！」と胸を張ってはみても、確かに浸かっている湯の温度はぬるいような・・・そう「殻」の中は気持ちいいのだ。

そういう意味では、産政塾に参加することが、既に「殻の外」を覗くことでもあったのだが、実際に企画に参加する中で感じたのが、また別のもっと大きい「殻」の存在だった。

「夢」を追う人

全五回の企画の中で強烈な印象を残した企画は、なんといっても中京女子大レスリング部への体験入部であった。女子大生と一緒にキンボールで楽しく遊んで、体育会系バリバリイメージの中京女子大にもこんなかわいい娘がいるんだ！と感心したり、女子大生と相撲をとったりして、相撲の基本はハズ押しとばかり伊調馨を攻めてみたり（ただ単に転ばされないようにしがみついていただけという説もある）・・・というのが理由ではなく、金メダルを目指すことがどういふことかの一端を肌で感じられたからだ。（真面目にそう思ってます。）その他の企画でも女将塾の塾生もそれぞれが夢に向かって努力していた。中電ウイングでは専務の情熱にも心打たれた。

そういう「真っ直ぐ」な人に会って、その言葉を聞くうちに、自分の中での「殻」の捉え方は少しずつ変わっていったように思う。

アテネオリンピック女子レスリングの金メダリストである吉田沙保里選手は「中学生の頃に柔道の田村亮子選手に憧れて、田村選手と同じようにオリンピックで金メダルを取りたい」と思ったそうだ。うん。田村亮子に憧れるのはまだ分かる。そこから同じようにオリンピックで金メダルを取りたいと思う思考回路が???分からなかった。

確かに、吉田選手は三歳からレスリングを始めており、中学生の頃には世界を目指すだけの実力を既に備えていたのかもしれない。だからこそ出た言葉なのかもしれない。だがしかし、その当時既に女子柔道界でも超一流であった存在を自分の将来に重ねることが出来るものなのだろうか?そして、現実には吉田選手は女子レスリング界において比類なき存在になってしまっているのだ。

こうした点で我が身を振り返ってみると、「どうせ無理だろう」と、やる前から自分自身で限界をつくり、諦めることが多いことに気づかされる。「自分を信じ、夢に向かって努力する」とは、格好良い言葉ではあるが、余りにも自分にとって身近な言葉ではない。吉田選手をはじめ、オリンピックで金メダルを取るような選手は、テレビ、雑誌を通して知るだけの、言わば雲の上のような存在であるが、実際に会って話を聞き、一緒に練習をこなす(といってもなまっただ体では到底無理な話ではあったのだが・・・)ことで、現実的で身近な存在に感じられる。そうすると、地道な努力の積み重ね、厳しい練習によって培われる決して諦めない精神というものが見えてくる。

これは、オリンピック選手も自分も何も変わることはない。平凡な毎日を大事にすることが、例え

ばオリンピックという壮大な目標に繋がっているのだ。こうなるともう、公務員だからどうかという以前の問題である。

新しい「殻」を知る

わたしには明確な「夢」というものが昔からなかった。開塾式での自己紹介の中のひとつに「今年の夢」について話すことになっていたが、なんだか自分でもどうでもいいようなことを語ったことを覚えている。「今年の」夢という限定でさえ曖昧なわたしに人生を賭けた夢は存在しない。

そして、産政塾の全ての企画に一貫して感じられたテーマが、この「夢」であつたように思えて仕方がない。くさい言葉で言えば、輝いている人は例外なく情熱を持ち「夢」や「理想」に向かつて努力していた。

今、自分は輝いているのだろうか？と自問自答してみても「輝いていない」と即答できてしまう。そんなわたしが「よし！今から夢を持とう」なんて意気込んでみても、ちょっと現実的ではない。でも、そんな自分にだって仕事上の理想はある。生活上の理想だってある。では、何故、産政塾の企画を通して出会えた方々のように、その理想に真正面からぶつかってはいないのだろうか？

「面倒くさいから」「自分を押し通すことで他人とぶつかるから」「傍目が気になるから」「今が楽だから」等々・・・言い訳はいくらでも持っている。そして、たぶんこれが「殻」の正体なのだろう。確かに組織に所属する以上、我を通してばかりでは成り立たない部分はある。日本人の性質として横

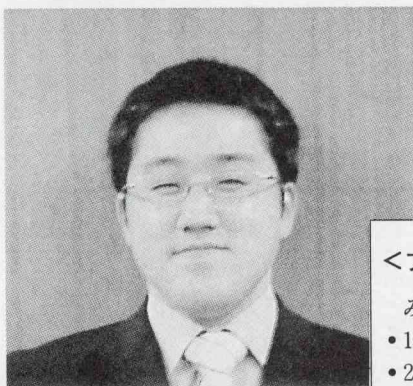
並びの精神が根付いている等の理由も考えられる。でも、たとえどんな理由を持ってきたとしても、結果として自分は理想に背を向け、妥協の中に埋もれてしまっている。

閉塾式では「殻を破れたか？」の問いに「破れていない」と答えた。仕方がない。自分にとつて産政塾とは、「殻」を知る場であり、ようやく入り口に立ったようなものだ。でも、「殻破り」は何も産政塾でなくてはできないことではない。せつかく気づいた「殻」を破るべく努力を続けることが、産政塾に参加したことに意味を持たせることになるのだろう。平凡な毎日が大事なのだと教えてもらったのだから。

ふうり、なんとかページを埋めることができました。締切りにも間に合つてよかったよかった。

産政塾では何より、色とりどりの個性を持ったみなさんに出会えたことが、とても貴重な経験になったと感謝しております。ありがとうございます。また特に、Aグループのみなさんには企画を進めるにあたつてお世話になりました。ありがとうございます。伊達政宗像の前でのリーダーの姿はかわいかったですよ。

「殻」ってどうしたら破れるの？



フタバ産業株式会社

宮 川 修一郎

<プロフィール>

みやがわ しゅういちろう (28歳：最年少)

- 1977年 愛知県岡崎市に生まれる
- 2000年 フタバ産業(株)入社
総務部人事課に配属
現在に至る

<家族> 妻 (? 歳)、長男 (11ヶ月)

<趣味> 野球、サッカー

<最近ハマっていること>

自分の子供を笑わせること

△はじめに▽

「産政塾」この言葉をはじめて聞いたとき、まためんどくさいのが順番に回ってきたか？と正直なところ参加したくない気持ち先立つた。重い気持ちのまま、身近にいた経験者に話を聞きに行くと思外に楽しそうだった。「会社のお金でいろんなところにいける」このことだけが自分の頭の中に残り、どこへ行くかどうかだけを考えるようになっていた。しかも、会社から言われたことはただ一言、

「人脈を作って来い。」

要するに毎回参加してみんなと仲良くしてこればいいってことだと、勝手な解釈をしてこの企画を楽しむことに専念した。表向きには、心身ともに中だるみした状態から脱却するきっかけをつかむために参加したことになっていたが、本心ではただ楽しんで終わるだけだろうなと甘い考えで臨んでいた。

△産政塾に参加して▽

そして迎えた第1回会合、第1印象はまじめそうな人たちだなあと感じたが、自己紹介を始めた時点で皆さんの本性が徐々にあらわになってきた。時間の制限を無視して話し続け、必ず話にはオチがある。何かインパクトのあることを言わなければならないという無言のプレッシャーが終盤たちこめる。用意していた子供のネタはすでにその効力を失い、私に残されたのは最年少というキーワードのみ。

「顔からは想像できないでしょうが……」という自虐ネタで皆さんの失笑を買うのが精一杯だった。

「こんな人たちの中で果たして自分は目立つことが出来るのだろうか?」「自分の意見をはっきり伝えることが出来るだろうか?」「聞いてくれるだろうか?」そんな焦燥感に駆られつつ、さらには班のテーマがまったく決まっていけないという不安感を抱いたまま、第1回会合を終えることになった。

続いて各班の企画・懇親会を通じ、塾生の本性を知り、また様々な人々に出会うことが出来た。各班の企画ともに自治体・企業の活動を探るものだったが、その出発点となっているのは全てその周りを囲む人々の「情熱」だった。

この「情熱」という言葉、書いている今も思うことだが私に最も足りない部分ではないかと思う。仕事・プライベートの両面で一生懸命になることがない。「熱意」ぐらいのレベルではもつこともあるが周りの人を巻き込んで不可能を可能にするような「情熱」は私は持ち合わせていないし、周りからもこしばらく感じることはなかった。そんな私にとって、産政塾で出会った人々は全てが鮮烈だった。

【中電ウイング石田社長様】

私たちをとびつきの笑顔と大きな声の挨拶で迎えてくれた中電ウイングの従業員の方々。その姿だけでも感動を覚えたが、そのとき私の頭を駆け巡ったのは、ここまで従業員の方々を指導・教育された石田社長をはじめとしたスタッフの方々の苦勞だった。

以前、プロップステーションの竹中様の講習をお聞きした際、「challengedを納税者に」という目標を持って活動が続けいらっしやるとのことだった。その活動を進める上で、絶対にしてはならな

いいとは、「challenged に対してあきらめること」だとおっしゃっていた。「これは出来るこれは出来ないというのを周りの人間が勝手に決めるのではなく、その人が出来ることを最大限補助し、明確な目標を与える」、言葉で言えばとても簡単だがそれを実行するには、相当の我慢と「情熱」を必要としただろうと想像し、胸を打たれた。

【中京女子大レスリング部栄監督様】

選手の育成・指導に「情熱」をかける。私もスポーツをやっていたこともあり、その感覚の想像は出来ていた。しかし、金メダリストを育成する指導者のそれは桁違いだった。

最初、話を聞いているときの印象は、ただの好々爺といった感じだったが、練習を始めるとその印象はガラリと変わった。いかにも体力のなさそうな塾生に対して容赦のない要求を次々と繰り返し、塾生たちは脱落していった。体力的にはきつかったが、なんとなくすがすがしく楽しい雰囲気があった。

なぜこんな気持ちになるんだろう。数日後に考えてみると、これは栄監督が塾生に対して少しばかりの期待と、「情熱」をもって接してくれたからではないかと感じた。どの選手に対してもあきらめることなく接する姿勢が、金メダリスト輩出の決め手ではないかと感じた。

【女将塾生の方々】

夢をあきらめない。夢といっても大変な夢。「女将」とは1つの旅館には1人しか存在しない。現状では嫁入りするぐらいしかなる方法はない。でもそれをしなくても経営のプロとして旅館の「女将」になる。そんな夢を持った人たちが、なにをどうやって学んでいるのか大変興味があった。

しかし、銀花に訪れ、彼女たちの活動を見て特別なことは何もないんだと感じた。彼女たちが与えられているのは、銀花という「場所」とお客様へのサービスを考える「自由」だけだった。この自由という言葉、権利のように聞こえるが、そのそれは重く苦しい義務のようにも思えた。自分たちが考え行動しなければ何も変わらない。そんなブレッシャーを常にかけられながら、日々の業務をこなしていく。彼女たちはこの「自由」がある分、仲居ではなく女将塾生なのだと感じた。

「情熱」を持って「女将」という遠い遠い夢に邁進する彼女たちは、そんな複雑な心情を少しも面に出さないプロの顔をしていた。

【楽天のファン】

生まれたときから中日ファン。そういつてはばからない私は、そういう人種が東北の地に増えていくだろうことが単純にうれしかった。地域に愛され、子供から大人まで幅広い年齢層に応援された選手たちがグラウンドでプレーをする。これがプロ野球ではないか。

しかし、そんな土壌を作るために楽天とその周囲は、これまで以上の努力を10年以上は続けなければいけないだろう。綾小路きみまろが言っていた。「80歳のおばあちゃんを1人作るのに80年かかる」当然のことだが改めてその長さを思わせる一言だと思う。今は負け続けても応援するかもしれない。それが10年続くかはわからない。楽天、東北の住民がこれまで以上の「情熱」で10年間突っ走ってくれることを強く望む。

【万博ボランティア】

初体験だった。町内の草取りにも参加しないボランティアに無関心な私が、万博のボランティアに

参加させてもらった。自分もたくさん笑顔を振りまき、お客さんからたくさん笑顔をもらった。この笑顔の交換がボランティアの真髓なのではないかと勝手に考えた。

しかしよく考えてみると会社から派遣され産政塾生として参加した私は、ボランティアなどではなかった。お金をもらっているし、1日限りだった。でも、この体験を通してボランティアとはということに思いをめぐらせ、その一端を理解できたことは私にとっては貴重な経験だった。

まずは、町内の草むしりから真のボランティアの「情熱」を学ぼうと思った。

【産政塾生】

彼らこそ真の「情熱」家だった。昼は様々な企画に真剣に臨み、夜は真剣に遊ぶ。その切替は秀逸だった。そしてそのどちらにも熱い熱い「情熱」をかたむけ、手を抜かなかった。

空港行きの電車が止まったときも、夜の町に放たれたときも彼らの動きは俊敏で迷いがなかった。しかも全員が揃ってそうだった。その中でどうすれば自分を目立たせるかが自分としての命題だったが、不覚にも埋もれてしまった。

彼らに追いつけるよう、全てのことに手を抜かないあの「情熱」を見習いたいと強く思った。

△そして今▽

この活動を通じてたくさんの人々の「情熱」に触れ、自分も全てのことに「情熱」を持って臨むようになったといいたいところだが、これまでの28年間で培ってきたものを半年で変えられるわけも

なく、相変わらずフラフラとしている。

しかし、「殻を破る」ためのツールは決してあきらめない「情熱」だと今は確信している。

「殻」という言葉、人間の可能性を狭める悪い言葉のように聞こえるが、実際のところ、世間体や常識といった人間が、人間らしく生きるために身につけた鎧のようなものともいえるのではないか。

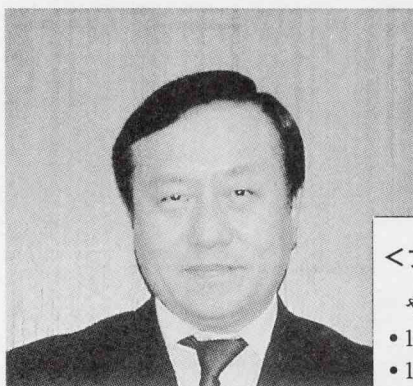
そう、今のところ私には「情熱」をかけてまで突破するための「殻」に出会っていないのだ。それは少しさびしいことのようにも思えるが、いつかは来るのだと思う。それを破るべきときにそれが出来るよう自分を磨き続けること、それが今自分の出来る精一杯ではないかと思う。そしてそのときには、相談できる頼もしい人脈を得たことが今回の最大の収穫だった。

△最後に▽

全員が例外なくわがままで私の強いこのメンバーをまとめることができたのは、松井さんの陰の努力と人柄によるものだと思います。心身ともに疲労されたと思いますが、このメンバーをまとめたことは自信になると思います。

この経験を活かして来年もよりよい活動になるようがんばってください。

産政塾を振り返って



アイシン労働組合
山口 覚

<プロフィール>

やまぐち さとし (46歳)

- 1959年 愛知県名古屋生まれ
- 1982年 アイシン・ワーナー(株) (現：アイシン・エイ・ダブリュ) 入社
- 1984年 生技開発部 (現：電子工場の前身)
- 1997年 安全環境部
- 2004年 アイシン・エイ・ダブリュ労働組合
現在に至る

<家族> 父、母

<趣味> 映画鑑賞、音楽鑑賞、写真

◆はじめに

最初、産政塾に参加する話をもらって特に何も考えることもなく申込用紙に記入したのが産政塾に参加するきっかけでした。アイシン労働組合は支部制をとっており4支部5社で構成されており、アイシン・エイ・ダブリュで産政塾に参加したことのある執行部はすでに退任して、誰も具体的に活動内容を知らない。改めて申込用紙を読んでもみるとテーマが「殻の外へ踏み出そう」で、いったいゼンたい何をするところ？というのが最初の印象でした。

◆第1回 開塾式

まずは参加してみないことにはわからないから顔をだしてみるか。あまりくだらない研修だったら、優先順位を落として暇な時だけ出席するということにするか。というネガティブな感覚で出席しました。

塾長の挨拶・自己紹介の後、グループに分かれてテーマをディスカッション。自分たちでやりたいこと・学びたいことを企画し、犯罪以外なら何でもオーケー。ちよつと面白そうじゃない。少し興味が沸いてきて、メンバーとテーマを話し合う中、「地域振興に向けた地域・行政・新球団楽天の取り組み」を学ぶという内容で仙台での宿泊研修に真っ先に手をあげました。

◆第2回

塾生の最初の企画で高浜市役所と中電ウイング(株)を訪問しました。「官民の社会福祉への取り組みを学ぶ」をテーマに訪問したのですが、私自身が気になったのは「自分たちで企画を運営するにあたりどんな感じでグループを取りまとめ、どのように運営すればいいのか」という点でした。というのは、自分がリーダーとして仙台の宿泊研修を取りまとめることになったものの、産政塾の塾生の出身職場はバラバラだし、お互いの顔もろくに知らない連中がゾロゾロと仙台まで出かけて行ってまともな研修できるのか?という不安が付きまといていたから。今日、懇親会があるようだがそれなりにコミュニケーションがとれ、「みんなで仙台に行くぞ!」という雰囲気になってくれるといいなあという思いでの参加でした。そんな不安の中で、まだ2回目にもかかわらず結構いい雰囲気の懇親会であつたと思います。

◆第3回

中京女子大学レスリング部を訪問して驚いたことは練習が思っていたよりアバウトだったこと。金メダルを取るレベルのレスリング部の練習は個々の選手の身体データを綿密に測定し、それをもとに一人ひとりの選手にあつた科学的トレーニングをしているように思っていたがごく普通の体育会系の練習で、部員全員で練習をしていた。選手を飽きさせないようにテーマを持って練習プログラムを考えているようであつたが、新入部員も金メダリストも同じメニューをこなしていた。しかしながら、

新入部員と金メダリストでは誰の目にも明らかでない体力差があるのにこんな練習で本当にメダルとれるのかな？本当はメダリストクラスの練習は別メニューがあつて通常はそちらのプログラムをやっているのかな？という感じでした。わざわざ氣を使つて産政塾の見学のためにあえて別メニューを考えてくれたのかも知れないが金メダリストの生の練習（我々が見たことないようなハードな練習風景）が見てみたかつたと思ひました。（我々塾生がレスリングの練習を体験したいといへば止むを得ないことです）

しかし、レスリング部と塾生の相撲はいい思ひ出になつたし、こんな体験ができるのも産政塾のいいところだと感じました。

また、別の日にレスリング部部員（新入部員歓迎会を兼ねていました）と塾生の焼肉懇親会。金メダリストとはいつても普通の女子大生と同じだなあといった素顔がみれたことはある意味貴重な体験だつたし、いい思ひ出になりました。

◆ 第4回

「もてなし」。最近忘れていた言葉である。女将塾に参加していまや死語になつていた言葉を思ひ出した。最近のサービス産業はすべてがマニュアル化されて、そのないサービスが提供される。しかし、それは客一人ひとりに合つたサービスを提供することではなく画一的なサービスになつている。それはマニュアルの限界でどうしても万人向けとならざるを得ない。女将塾でこういう話があつた。接客係がお客さんが受付で宿帳に左利きで記入するのを見たとき、食事の箸の向きを左利き用に変え

る。そしてお客さんと自分の体格と比較してお客さんにあつた浴衣のサイズを部屋に揃える。こんな細かい客一人ひとりにあつたサービスが「もてなし」で、そこにやすらぎや感動が生まれるのではないかと感じた。

女将塾で女将の卵と話をする機会が会つた。何年か後、女将の卵にまた会つてみたいと感じた。夢を追いかけて『さなぎ』のままで終わつた女性（ひと）もいるかもしれない。りっぱな『蝶』に成長した女性もいるかもしれない。女将として成功した女性・挫折した女性・女将とは違う道を歩き始めた女性。結果は違っているかもしれないが同じように夢を描いて目的に向かつて、ここ女将塾で頑張つたことは事実。ここでの経験は彼女たちにとつて決してムダにならない貴重な経験だと思ふし、そんな彼女たちとまた会つてみたい・話をしてみたいと感じる研修でした。

◆第5回

いよいよ、我々のグループが企画した仙台での宿泊研修。産政塾初の全員参加の企画となつた。それだけ塾生の期待も大きいのであろうか。一日目は仙台フルキャストスタジアムでロッセ×楽天の野球観戦をスケジュールに入れていたが梅雨明け宣言もです不安定な天気が続いている。朝、天気予報を見たらいつ雨になつてもおかしくないパツとしない天気。「向こうについてドシャ降りだったら・・・」「試合途中でドシャ降りになつたら・・・」と考えつつ金山駅の集合場所に向かいました。中部国際空港（セントレア）へは名鉄電車で向かう組とマイカーで向かう組に別れて行きました。出発時間が早いことと道路の渋滞等で飛行機に乗り遅れる人がでないことを祈っていましたがここで

想定外のトラブル発生。我々の乗った電車が事故の影響で途中の駅でストップ。電車組は飛行機の出発に間に合わない。駅はいつ復旧するかわからない不安と飛行機に乗り遅れるというあせりで乗客のイライラは増し、騒然としてきた。そうした中で、駅からタクシーに乗り換えて空港に向かう乗客を誘導し、スーツケースの積み込みを手伝う塾生。我々のグループは『空港にいるマイカー組はどうする。今日、訪問する楽天は留守電で連絡が取れない。仙台行きの飛行機は夕方までない。代わりの交通手段は？その場合、何時ごろに仙台に就く？午後からの野球観戦チケットは我々が持っているがマイカー組を先に飛行機で向かわせたとしてその後どうする？』等々の対応に追われた。想定外のトラブルに見舞われたが「何とかしよう！」という塾生思いが『自ら考え、自ら行動』することに繋がりが、仙台の夜の懇親会を無事全員で迎えることができたのではないかと思います。私としては、塾生全員が事故もなく無事に帰ってこれたことでホッとしました。これもいい経験になりましたが、こういう想定外のトラブルはないにこしたことはないという思いをしました。

◆第6回・閉塾式

急に衆議院の解散（小泉サプライズ）もあり、全員参加とはいかなかったが各自が産政塾での思いを語り名残惜しかった日でもありました。

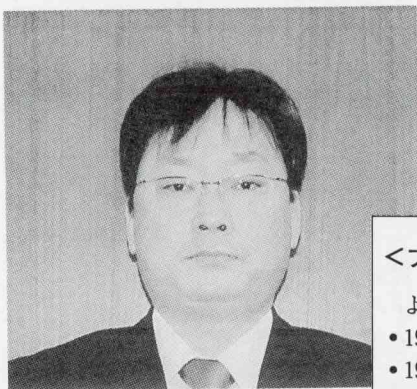
◆おわりに

本を読んだり、テレビを見たり、講演を聴いたりして学ぶこととは違った視点で見ることができ、考えることができたこと。他では経験することができないことを経験できたこと。それが、産政塾に参加して本当によかったと感じるところです。今、日本で一番元気な愛知県にあって、会社側、組合側、行政側の人間が一緒になって企画し、企画実現に向けて汗をかくことは非常に意味深いと思います。愛知万博や中部国際空港の成功例をみるまでもなく、労・使・官がお互いの立場の違い・考え方の違いを乗り越え、協力して一つの目標に向かうのは今後の地域発展のキーワードになると考えます。その先駆けとして産政塾の活動はよいケーススタディとなるし、この活動は是非継続していつて頂きたいと思います。



企画メンバーと伊達正宗像の前にて

産 政 塾



トヨタ車体労働組合

吉 續 武 俊

<プロフィール>

よしつぐ たけとし (37歳)

- 1968年 3 月 福岡県福岡市生まれ
- 1986年 4 月 トヨタ車体(株)入社
Fプレス課へ配属
- 1994年 4 月 Iプレス課への異動
- 2004年 9 月 トヨタ車体労働組合専従執行委員
現在に至る

<家族> 妻、息子1人、娘1人

<趣味> 酒、たばこ

第16回産政塾に、参加するようにと言われた時の事を、今思い出すと「忙しいのにまた仕事を増やして何を考えているんだ」と思った。なぜなら、自分は2004年9月から大きな変化点の中にいたからだ、それまでの自分は18年間も製造現場にどっぷりと染まっていた、時間を気にしないで結果や目標を達成できるまで現場で製品と向き合っていた、時間は「アッ」と言う間にすぎ目標を達成で出来ずに時間だけが過ぎ去っていた時もあったが、仕事に熱くなっていた自分がそこにはいたし、現場で多くの仲間が同じ気持ちで、同じ時間を過ごしていた、そんな環境で充実した日々を過ごしていた自分が、何と労働組合の専従執行委員になってしまったのだ（大きなミスジャッジをしてしまった）。専従執行委員になって、沢山の案件を論議し結果が出ない事へのいらだちから、自分は何をするために専従執行委員になったんだろう？事務処理？苦情処理？誰のために？と考えていると頭が可笑しくなっていた（きつと誰も信用してくれないが）、そんな自分を思い出します。

第一回産政塾開塾式 1月19日

皆さんが産政塾にかける思いを、自分の番がきた何も考えていない、何を喋ったのかは思い出せないが、「トヨタ車体が好きです」と言った事はおぼえている。まゝ「次からは参加しないね」と言う気持ちがありました（すでに、殻の中にとじこもっていた）。

実は3月の初旬まではさぼるつもりでいたが、この気持ちを变える出来事が3月12日（土）に起き

ていた。それはこのメールから始まった、「さて早速ですが・・・、昨日ご相談しました、中京女子大学レスリング部への訪問および挨拶の件ですが、以下のスケジュールで実施してまいりたいと考えております」がいかがでしょうか？Bグループリーダーからのメールである、自分のグループの企画だけはと言う思いから、重い腰をあげ事前打ち合わせで3月12日（土）中京女子大学レスリング部へ行くことにした。そこでは、とんでもない風景を目にしてしまった、レスリングを知らない自分でも、「世界一」吉田・伊調姉妹、栄監督、中京女子大」と言うことはテレビの情報から知っていた、「もの凄い環境で練習しているんだろうな」凄いものを見せてもらえると「ワクワク」しながら練習場へ、しかし見てビックリ何と剣道場と並列でマット（レスリング用）が引いてあるだけの練習場、まさに道場と言った方がいい雰囲気の中で、大学生だけではなく、幼稚園・小・中・高生とさまざまな年齢層の選手が練習している、なぜなんだ何処にこれだけの人を引き付ける魅力があるのかと目を疑いたくなったが、練習を夢中に見ていると約1時間半も時間は過ぎていった。一つ一つの練習を真剣に取り組む選手とそれを見つめる監督は目標に向かって、今何をしなければいけないのか、何をすれば目標を達成できるのか、個人と監督の思いが一緒であり、監督の指導に絶対の信頼を持っている、これは同じ道場で練習する選手が結果を出していることが、自分もやれば結果は出ると思う思いにしているんだと感じ、この事は製造現場でも同じ事の様に感じた、環境は良いにこしたことはないが、上司にどれだけ魅力があるのかで、現場で働く人は変わると、働く人と同じ目線で現場を見て仕事のアドバイスをする、そして結果を見て声を掛けてくれたり、一緒に喜んだりする上司と働いていると、仕事が楽しいだろうな。そんなことを考えていると、今の自分の目標を産政塾の「殻を破る」にして

もいかなと感じ出してきた。その為に全ての開催に参加する事を、自分でやらなければいけないと勝手に決めたのである。

第二回産政塾

4月8日

中電ウイングは話を聞くより現場を見たほうがいい、障がい者のことを「チャレンジド」と呼ぶそうで、意味は「神からチャレンジという使命を与えられた人」という意味だそうです。現場で夢に向かって、全力で挑戦する彼らと、それを支える健常者、心と力を合わせて夢に挑みながら共に成長している姿は、製造現場にとって忘れてはいけない事だとあらためて感じさせられた。

第三回産政塾

5月11日

中京女子大レスリング部の練習体験、栄監督の言葉「臨機応変に行こうぜ」の一言で始まった。まず始めに、中京女子大学の授業に参加し、坂本コーチから、レスリングについて、ルール・基本動作を座学及び体を動かしながら、マット運動（準備運動程度）・ゲーム等を行い、体を動かし、汗をかきながら、学生と交流を深めた。栄監督からも、塾生達に激が飛ぶ。監督が見本を見せ指導してくれた、楽しいゲームなどを行いながら、負けた人には、腕立て・腹筋等20回をプレゼントしてくれた、準備運動と言うものの、運動不足の自分には結構しんどかったが、産政塾のメンバーの中にも昔は、

スポーツマンだった人が多いみたいで、この時点では塾生の笑顔が目立っていた、僕は完璧なやせ我慢をしていた。ようやく、レスリング部の練習に参加することになる。まず、道場の掃除から始めた（練習前に、毎日実施するようだ）。次に、練習が始まった（アップであるが）顔面蒼白になり、酸欠状態で声がでない状況のでも、道場のボルテージは上がり学生・塾生関係なく声を出し、励ましなから、頑張ってきたが、やはり限界がある。途中棄権をした無念！

次に、監督から産政塾生と選手と相撲をやるうぜ！！何を言い出すんだこの人は、すでに息が途切れ、できる状態ではないが、スポーツマンの多い産政塾メンバーは受けてしまい、見るも無惨に散っていった。選手達は、おかれた環境の中で精一杯の自分で努力をしながら、あたえられたトレーニング道具は使いこなすし、何時でも正しく使える様に選手達が自ら維持している、この事は製造現場でも大事であり、忙しい時こそ道具を大切にしている現場が勝つのではないのか。

第4回産政塾 6月24日

女将塾体験入学で、女将塾の塾生は単純に接客する仕事が好きなんだと感じた、夢というものは、なかなか実現が難しい、女将という夢を持って修行をしている女将塾生と、夢を叶えさせてあげようとする社長と大女将も必死である、その姿は親と子供の関係と同じに見えた。同じ夢に向かう仲間（女将塾生）がいることで、つらい塾生活も乗り越えられると言う塾生。あの気配り、思いやりで女将塾生さんにまた会いたいなという気持ちになった。この事は、製造現場でも自分達がつくっている

物を、「良いものだ」又「使いたい」と多くの人に感じてもらう為には、まずは自分がつくっている物を好きになる、仕事を好きになる事ではないのか。

第5回産政塾 7月10日

球団・地域（行政）・地域（民間）各々異なる立場での地域活性化に取り組んでいる仙台市にお邪魔した。行政・企業・市民と一体になって、野球を盛上げること、市民と市民がつながりを深め、野球でつながった市民の心を環境活動など町づくりにいかしていこうという試みをしているようだ。わかりやすい目標を示すことで市民のつながりをつくりだしている。しかし、わかりやすい目標が製造現場では難しいと思う、夢を語り合う仲間が同じ職場にいれば、わかりやすい目標が描けるのかも。

第6回産政塾 8月20日

最後の「愛知万博で連合愛知が運営するれあるファミリースクールにボランティア」でついにピンチ、業務とブックキングしてしまつた、仕事だけのスケジュール調整だけでは、調整できなく事務局と打ち合わせをして、早退1.0Hを認めてもらい全開催に参加（体験）する事ができた。れあるファミリースクールにボランティアでは、こま遊びを教えることになった、「ペー駒」である自分も最初は、なかなか土俵に乗らずにいたが、開園前になると練習を繰り返した事で、自信もついていたのだが。

自分でやるのと人に教えるのは全然違う、なかなか上手くない中、1人の子供が真剣な表情で悔しがり何度も何度も教えていた、やり方を見せながら一緒にやっていたが、最後は彼の手を持ち同じ視線になって一つ「ペー駒」を投げると見事土俵の上で回った、次から彼は1人で回せるようになっていた、教え方が真剣でなかった事に気がついた、やり方を見せて、見ている事で教えたつもりになっていたのである、手を持ち同じ目線でやる事で多くの子供、そして大人（女性もいた）も「ペー駒」を回せるようになった、回せるようになった人達からの「ありがとう」は心地よかった（でも、次の仕事には見事遅刻してしまった）。製造現場でも人を教えるときに教える人がどれだけ近づけるかだと思ふ、時間が無いとつい「こんなことも出来ないの」と心の中で思っている事が知らず知らずのうちに教え方に出てしまう、その一瞬の出来事が、その人の今後の働き方を変えるかもしれない、教える人の責任は大きいし、人材育成に時間を惜しんではいけない、これは企業も組合も家庭でも同じ事だと思ふ。

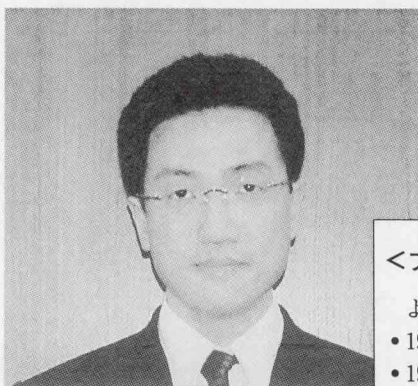
見事に当初に掲げた「全ての開催に参加」を達成することが出来た、「アッ」と言う間であった、半年前の頭が可笑しくなる様な事を、考え無くて済んだのは産政塾に行くことが、楽しかったからだと思ふ、すばらしいメンバーとの出会いに感謝と、違う会社・組合の人と出会えた事は、会社生活にどっぴり漬かって仕事が「中心」になっていた自分には、産政塾はとても心地よい居場所であった。

今後、どんな仕事をしていくかわからないが「自分がこの人の立場だったら」と考えてみる、ゲー

ム感覚で楽しくとらえてみる、「相手に変わって欲しい」から「自分がまず変わろう」、「これも人生だ」と割り切るなど沢山の事を今回の産政塾に参加して感じましたが、殻が破れたかどうかは、これからの自分次第、殻を破ってもまた殻にあった事になると思うが、時には心のリフレッシュが必要ですね。

最後に中部産政研の小田桐理事長をはじめ、大変ご迷惑をおかけした事務局の松井さん、16期生の皆さんとの出会い、貴重な経験をさせて頂き有難うございました。

第16期産政塾を振り返って



株式会社松坂屋

吉原 昭 浩

<プロフィール>

よしはら あきひろ (29歳)

- 1975年11月 愛知県岡崎市生まれ
- 1998年 4 月 (株)松坂屋入社
岡崎店 婦人カジュアルウェア
売場に配属
- 2000年 9 月 外販統括部へ異動
- 2004年 5 月 本社人事部へ異動
- 2005年 9 月 営業統括本部顧客政策室へ異動
現在に至る

<家族> 妻、長男(4歳)、長女(2歳)

<趣味> プロ野球観戦、モノポリー

1、はじめに

やはり、というべきなのか、歴代の数多くの先輩方と同様、とうとう産政塾誌提出期限まであと3日という今、ようやく机に向った。縁あって「30歳」という人生における1つの節目を迎える年に参加することができた。産政塾という団体でなければまず体験できないと思われる企画ばかりであった。この論文を2つ書けばもう1回参加できる、というのであれば喜んで提出するくらい、全5回それぞれが貴重な企画であった。これから、「第16期産政塾」について感じたことを中心に振り返ってみようと思う。

2、各企画に参加して

私は、職場の理解を得て、幸いにも全ての企画に参加することができた。せっかく全て参加できたのであるから、1つ1つ振り返ってみたい。

○第1回：開塾式

もとより緊張しやすい性分のため、職場の外に出て、全く面識のない人達に囲まれて何かをするということ自体にストレスを感じていた。実際、自己紹介のときはカチコチに固まっていた（昔から「よしはら」は名簿順でもいつも最後で、この辺はいくつになっても成長しない）。自己紹介の内容も今となつては思い出せないが、たぶん、今までみたいに、動揺して少し早口になり、言おうと思っ

ていたことも半分も言えていないものだったのだろう（このあがり症とは早く決別したいものである）。そんな私も、グループごとに打合わせる頃には緊張もほぐれ、懇親会では初対面の方達とは思えないくらいに打ち解け、次回以降の活動に期待して1日が終わった。

○第2回：「官民の社会福祉への取り組みを学ぶ」

この回は、産政塾での初回の企画ということもあり、強く印象に残っている。そんななかでも、電ウイング(株)で働くスタッフの「笑顔」は忘れられない。百貨店という接客業に身を置く私にとって、最も大事なものを再認識させてもらった。私も明日からあの笑顔を職場で実践しよう（笑顔なら負けない自信あり）。

○第3回：「世界を目指す選手から夢に向って挑戦する姿勢を学ぶ」

企画担当グループであり、フォーラム係だったのでこれも印象深い企画だった。選手の方達との合同練習は本当にきつかった。日頃の運動不足解消を通り越し、3日間ほど体のあちこちが痛かった。それはともかくとして、中京女子大の選手達のように「夢」を持ち、その実現に向けて懸命に努力するということが、これまでの私の人生においてあったのだろうか、と家に帰ってから考えてみた。無い。我ながら寂しいが、無い。来月で早くも30歳になる。いや、まだ30歳。節目の誕生日を迎えるにあたり、ひとつ「夢」を掲げることにしよう。それに向って邁進する、熱い30代にしていこう。こんな気持ちになれたことだけでも、この企画に参加した価値があったというものである。

○第4回：「CSと経営学を学ぶ」

職場からは「旅行」とからかわれながら参加したが、実際、楽しい企画であった。なぜ楽しかったかといえば、それは「おもてなし」を受け、満たされたからである。

笑顔とおもてなしは、やはり接客業の基本である。はるばる城崎という遠方まで、多くの方がリピーターとして足を運ぶのは、このサービスによって癒されたいからであり、私も実際にそんな接客を受け、なるほど、と思った。これは私ども百貨店にも通ずるものがある。私の今後の百貨店人としての職務にこの経験を活かしていきたいと思う。

第3回に引き続き、ここでも女将になるという「夢」を持ち、努力している同年代の方と話すことができ、私のなかではかなり啓発させられた。彼女たちに負けてはいられない。自分に与えられたポジションのなかで、もっと大きくなるう。

○第5回：「殻を破る、夢と挑戦の姿を仙台に学ぶ」

新球団を地域ぐるみで盛り立てていこうという意気込みを強く感じた。みんなで一つの目標に向っている仙台という都市に、いまどきなかなが見られない「元氣」を見た。現状ではまだ遠い先の話かもしれないが、是非とも、優勝という「夢」を叶えてほしい。個人的にも、仙台という都市が好きになった。また行きたいものである。

○第6回：「ボランティアについて考える」

産政塾でのボランティア以外に、愛・地球博には2度行った。1回は家族で観光、もう1回は当社

で出店している売店への販売応援で行ったが、このボランティアでの参加は大変貴重な体験として心に残っている。もともと子供と遊ぶのは好きな方だが、ベーゴマやお手玉と一緒に遊んで（遊び方を伝授したなどと強がるつもりは毛頭ない・・・とうとう最後まで上達しなかった）、そのときの子供たちの笑顔が本当に嬉しかった。今までボランティアというものに対し、大変恥ずかしいことながら「偽善」としか考えていなかった。しかし、今回、そのボランティアを体験し、その間違いに気づいた。人に喜んでもらうことは自分の喜びにもなる。それを知ることができたこの企画には大変感謝している。

○第7回：閉塾式

産政塾テーマでもある「殻」について全員の意見が出た。様々な意見が出たが、私の「殻」は「自分だけの常識」である。それは「思い込み」とも置き換えられる。社会に出て8年目、会社という、大きくて狭い組織に属すると、自分や、自分を取り巻く職場の上司や先輩、後輩以外に日常の接点がなく、同じ組織にいる以上、多様性という点で乏しくなり、自分の考えが「常識」のように思えてしまう。それがいかに自分を「視野の狭い」人になっているかを客観的に知ることができた。

3、最後に

産政塾が終了した翌月に私は今の部署に異動した。そんな今だから言えるのは、私と産政塾の出会いが運命だったということである。というのも、当社でこれまでに参加している先輩がたは申込当時

所属していた本社人事部か、労働組合の方ばかりで、今の部署ではその存在すら知りえなかったからである。しかも私は本社人事部に1年あまりしかいなかったもので、私の産政塾参加はまさに運命の出会いであった。

最後になりますが、小田桐塾長、事務局の松井様、そして塾生の皆様と一緒に参加したこの第16期産政塾に心から感謝しています。本当にありがとうございました。



「16期産政塾の感想」

産政塾事務局

松 井 英 治

第16期産政塾が修了しました。1月の開塾式でそれぞれの組織から派遣された塾生が緊張な面持ちで初めて顔を合わせ、月1回の会合を通し、お互い打ち解けあいながら、あつという間に8月の閉塾式を迎えました。事務局の私自身も今期よりバトンタッチされ、今回から初めて塾の運営に関わりました。このような役割は、いままでの会社生活の中で、やったことがない経験でありました。

運営にあたる前は、産政塾に参加した諸先輩達から「産政塾は面白いぞ。もう一度参加したい。事務局ががんばれよ。」という声に、役割の重さを感じつつ、人付き合いが苦手な自分にできるのか不安だらけでありました。私自信、この産政塾の事務局は、産政塾のテーマでもある『殻の外へ飛び出そう』という言葉にあるよう「新たな挑戦」という意思で臨みました。また、16期産政塾生全員が、参加してよかったなと思える企画になればと取り組んで参りました。

さて、産政塾は、入社して10年前後。まあ、それなりに仕事は面白い時期であるが、何か物足りなさを感じている30代前後の若者が集い、「殻の外へ踏み出そう」をテーマに、人材交流する場です。今期の企画をふり返ってみますと、

第1回

16期産政塾が開塾。始めて顔を合わせることもあり、私を含め塾生24名みな、緊張した面持ちの中、それぞれ自己紹介を行い、自らをアピールし、お互いを知る機会となった。この時受けた各塾生への印象は、アピールの仕方も上手であり、優秀な人ばかりであると同様な感じを抱いた。塾生の感想を読むと、あの時みんな鎧を被り、お互いを探りつつ、不安や期待などいろんな思いを感じながら、始めの一步を踏み出したようである。

第2回・・・E班

『官民の社会福祉への取り組みを学ぶ』というテーマで開催されました。

この企画では、官民の社会福祉の取り組みを確認したところ、官民ともに、人を大切にし、みんなで助け合うことを基本に取り組んでおりました。一方、民間の取り組みの中で、働きたくても働けない障害者の加齢問題が今後の課題にあり、より一層、民間と行政と連携した社会福祉を整えていく必要性があることを認識しました。

また、障害を持った人達が、自らのハンデに臆することなく仕事を通し、自分の可能性を引き出そうとしているパワーに驚かされ、塾生みな感銘を受けました。

この気持ちを忘れぬため、中電ウイングの従業員による素晴らしいデザインのもと、一步踏み出そうTシャツをつくり、会合にて着用することを決め、強い決意を胸にひめました。

第3回・・・B班

『世界を目指す選手から夢に向かって挑戦する姿勢を学ぶ』というテーマで開催されました。

中京女子大学のレスリング部に訪問し、アテネで金メダルをとった選手とともに練習を実際に体験しました。輝かしい実績を持つ選手とはいえ、日頃は100メートルダッシュなど地道なトレーニングを毎日積み重ねていることがわかり、継続した取り組みが夢（目標）への絶対条件であることがわかりました。また、何より選手の負けん気の強さなどから、目標を持ちつづけること夢を諦めないという強い意思が重要であることもわかりました。

そして、監督から、指導者としての心得として、先を読みながら前向きな目標を選手に与えることが大切であることも教えられました。この会合での練習体験では、塾生みなお互いを励ましながら、最後の最後までやりきるぞという強い意志を持ち、体力の限界まで挑戦しました。結果はさて

おき、この会合は、16期産政塾の団結力を更に深めることになりました。

第4回・・・C班

女将塾を訪ねて、『CSと経営学を学ぶ』というテーマで開催されました。

この女将塾では、経営者としての女将を育てる塾であり、かつ女将塾生を旅館に派遣し、数々の不採算旅館を再建している企業でもあります。

この女将塾を訪問し気付いたことは、女将塾生の女将になるという心意気のすごさはもちろんのこと、社長と大女将の彼女達の夢を叶えさせてあげようという気持ちを感じることができました。事実、常に女将塾生の行動を厳しさとやさしさが混在する眼差しで目配りし、女将塾生と家族のような信頼関係を築いておりました。このことが、女将塾生のやる気を更に高めるのだらう。この会合の中で、経営学の座学講習もありましたが、企業を運営する上で、人を大切にすることというところが一番大事な要素であることを感じました。

また、女将の体験を通し、『マニュアルの通り、何気なくやるのではなく、相手の気持ちを考えて対応しなさい。人は、左利きの人もいれば、右利きの人もいる。どのようにしたら相手は喜ぶのだらうか、人それぞれ違うのです。』と指導され、あたりまえであるが、相手の気持ちをわかれとうとする気持ちがないと響きあわないことがわかりました。

産政塾においても、ちょうどその時期は、それぞれの塾生が個性を発揮し始めた時期でもあり、事務局として、人をまとめることの難しさを感じていたときであり、相手を知る（理解する）ことが重要であることなど、とても勉強になりました。

第5回・・・A班

『企業人として社会貢献の重要性、地域と接する心構えを学ぶ』というテーマで開催されました。この会合では、まさかの出来事が起った。産政塾が始まって以来の大事件かと思う。想定外の出来事により、私も含め一部の塾生が、予定していた仙台行きフライトに間に合わず、当初計画に対し、大幅な変更が余儀なくされた。この想定外の出来事に対し、塾生たちは、各々周囲を確認し、自分がやるべきことを冷静に判断し、なおかつお互いが連携し合い行動しておりました。まさに、この異常事態に、個々の力がうまく連携し、フレキシブルに対応できる強い組織になっていたのだ。この危機を乗り越えることができたのは、いままでの会合や懇親会を通して、塾生みんなの仲間意識が築かれていたこと、殻をやぶろうという志を持った集いであったこと、何よりも企画実現に向けた思いを共有することにより、塾生みなこの産政塾を自らの手で作り上げていくという気持ちがあったからであろう。当初計画とかなりの変更があったが、個々の力が連携すれば、大きな成果をもたらす（壁をうちやぶる）事を体得することができました。

第6回・・・D班

『愛知万博でボランティアを実践!!』というテーマで開催されました。

最後の企画ということで、あらたな領域に一步踏み出そうということで、ボランティアに挑戦することになりました。塾生のほとんどが、ボランティアの必要性はわかるが、なかなか自ら進んでボランティアをすることができなかったようである。

このボランティア経験を通し、私をはじめ塾生の中には、子供の扱いに慣れていないこともあり、大変苦労する一方で、子供達との触れ合いを通じ、喜び楽しさを感じるなど新たな発見を見出すことができました。一步踏み出すことにより、困難もあるが、何らかの発見があることを学びました。

自分自身、世の中の動きが速く、自分のことで精一杯になり、人のことを考える余裕がない時もある。しかし、こんな世の中であるからこそ、『みんなが人として尊重しともに支えあう関係が大切であること』を忘れてはいけなさと改めて感じました。

第7回

最後に、みんなで『殻の外へ飛び出そう』について論議しました。

この時は、第1回とは違いみんな自分の言葉で表現しました。それぞれの意見は、画一的でなく、皆それぞれ考え方に違いがありました。生きてきた環境も違う、視点・見方も違う、それにより考え方も違うわけで、あたりまえである。それが面白いですね。自分の考え方とは違うけれども、妙になるほどと感じ、新たな発見になりました。ただ、全員に共通していたことは、『一歩踏み出そう』という決意があつたことである。この産政塾を通し、いろんな人と出会い、またいろんなことを体験することで、そこで様々な刺激を受けることにより、自分を見つめ直す機会ともなり、なんらかの自分の考え方・マインドに影響を与え、強い決意になったのではなからうか。

ちなみに私自身は、殻とは、思い込みとあきらめから生まれるものだと思う。この殻をやぶるには、まず、自分を見つめ直し、知るべきかと思う。その上で、自分の可能性を広げていくために、目標を持ち挑戦しつづける。これが結果として、殻をやぶることに繋がるのではなからうか。

自分の決意として、強い意志を持ち一歩踏み出し、たとえ大きな壁にぶつかり、立ち止まったとしても、絶対あきらめないことをここに決意する。

全体を通して、前述したようにどの企画も、「現地・現物・現認」を主体に、何かを感じ考えることができ、大変意義ある企画となりました。また、会を重ねるごとに、塾生みんなの信頼関係が醸成

されていくのが、身にしみて感じることができました。

16期産政塾とは

『殻の外へ飛び出そう』というテーマのもと、『企画メンバーの企画への思い』、それを感じた塾生たちの『この企画を成功させてやる』という気持ちが一快感を醸成させ、さらに企画実現したときの喜びと達成感をみんなで味わうことで、次の企画メンバーも企画実現に向け頑張ろうとする。このような良きサイクルが16期産政塾にはあったのではなからうか。もちろん、このサイクルが回ったのは、塾生達が、「思う」「感じる」「考える人」、すなわち自立していた人であったからこそできた。つくづく、みんなでつくり上げた16期産政塾であった。

16期産政塾のみなさんへ

私自身事務局として、企画実現に向け、塾生の皆さんからたくさんパワーを頂きました。とくに企画を実現する上で、企画メンバーとの調整する際、事務局として苦言をていし、かなり難航した企画もありましたね。しかし、その企画実現に向け、お互いが向き合い議論を通し、それぞれが認め合い本音でものを言えるような組織・仲間として変容してきたことや、みんなとともに企画を実現した時の喜びを感じることができ、今では良き思い出となっております。確かに、プレッシャーを感じた時もありましたが、逃げることなく、前進すれば、何か得るものはあると確信しました。たとえば失敗

しても、それは成功の糧にもなる。勇氣と自信を持つて、目標に向つてチャレンジしつづけることが大事であることに気付かされました。また、皆さんから、「参加してよかったです。この繋がりを今後も大切にしていきたい」という言葉を頂いたことは、とても嬉しかったです。事務局冥利に尽きます。

いづれにせよ、この16期産政塾が無事成功したのも、多士済々たる塾生の皆さんがいたからこそであります。

それぞれの職場で、勇氣と自信を持つて、より一層のご活躍を楽しみにしています。万が一、大きな壁にぶつかり強い意志を忘れかけた場合、本音でものが言える仲間として、この16期産政塾の繋がりを大切にし、お互い論議し考え、壁を打ち破っていきましょうね。

最後に、塾生を派遣してくださったそれぞれの職場の皆様、そして企画を実行する上で大変お世話になった関係各位には、この場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

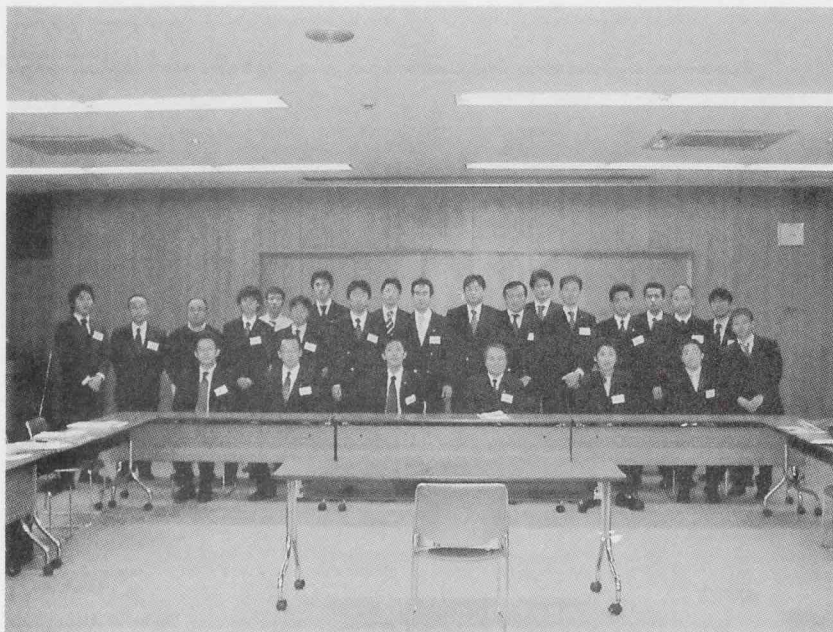
產政塾活動記錄

《第1回会合》

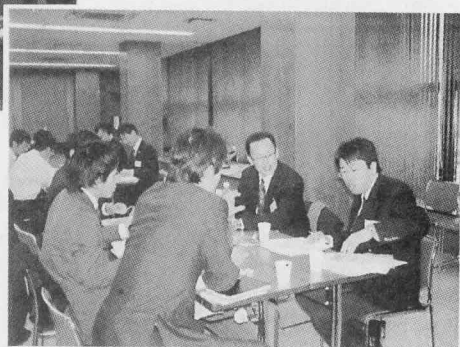
期日：2005年1月19日（水）

場所：全労済豊田会館

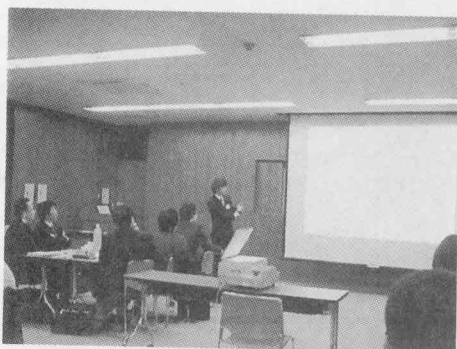
内容：第16期産政塾開塾式、
塾長挨拶、塾生自己紹介、
グループディスカッション
懇親会



第16期産政塾に集った塾生



グループ討議では議論も闊達に



各リーダー、企画への熱い思いを語る

《第2回会合》

期日：2005年4月8日（金）

場所：高浜市役所

中電ウイング(株)など

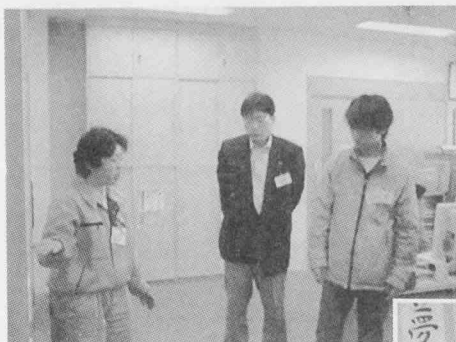
内容：「官民の社会福祉への取り組みを学ぶ」

講話、施設見学、討論、

懇親会



自助・共助・公助の精神と協働で、ともに助け合いながら、いきいきとした生活が送れるような街づくりに向けた高浜市役所の取り組みを市役所職員からご説明頂きました



中電ウイング㈱の従業員により
懇切丁寧に説明をして頂きなが
ら、工場見学を実施。どの従業
員も、チャレンジド精神のもと、
自らの可能性を楽しみに、いき
いきと働いていました

中電ウイング㈱石田専務を交え、
グループ討議／各自感じたこと、
発見したことを話し合い、お互い
の考え方を議論しました



介護福祉士を養成する専門学校を訪ね、介護体験を実施

《第3回会合》

期日：2005年5月11日（水）

場所：中京女子大学

内容：中京女子大学レスリング部を訪ねて

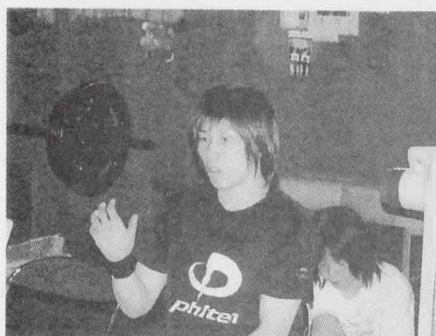
夢・希望への挑戦

「世界を目指す選手から夢に向かって

挑戦する姿勢を学ぶ」



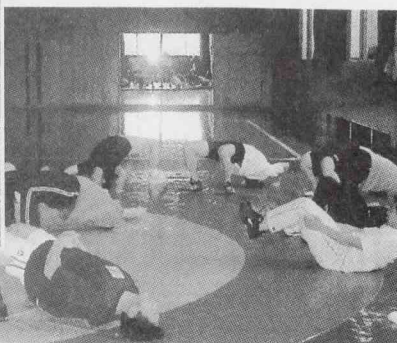
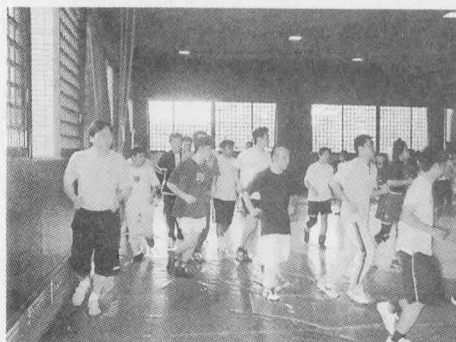
選手との交流も図ることができました



アテネ金メダル吉田選手との対談
—強さの秘訣を学ぶ—



栄監督との対談
—選手への指導の仕方について学ぶ—



世界が誇るレスリング部の練習に参加させて頂きました



さすがに、塾生みな疲れた表情で
ありました

《第4回会合》

期日：2005年6月24（金）、25（土）

場所：女将塾（城崎町）

内容：女将塾を訪ねて、「CSと経営学を学ぶ」

講和、女将体験、討論、

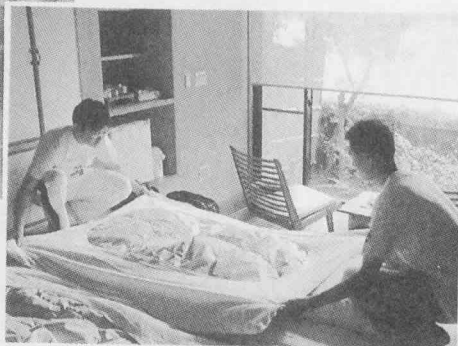
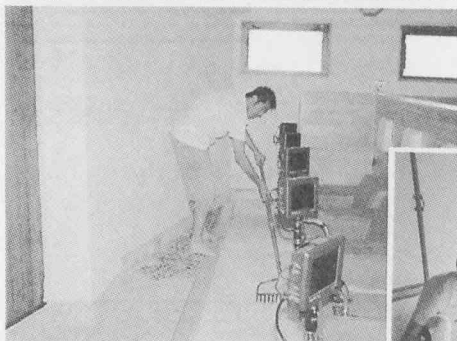
懇親会



女将塾生から、“女将になる”心意気を語って頂きました



山本社長と三宅大女将からもて
なしの極意をご講演頂きました



女将の1日を体験し、お客様への心づかいなど、より上質へのこだわり
を体験しました

城崎温泉旅館「銀河」に宿泊し、
日常を忘れ、一時のやすらぎを
味わうことができました



《第5回会合》

期日：2005年7月10（日）、11日（月）

場所：楽天球団事務所、仙台市役所（仙台市）

内容：楽天球団と仙台市役所を訪ねて、

『『殻を破る』夢と挑戦の姿を仙台に学ぶ』

講話、討論、懇親会（野球観戦）



楽天球団では、プロ野球に風穴をあけようとしている楽天球団から、地域密着を主体とした新時代に適合した球団運営の取り組みについてお話を伺いました

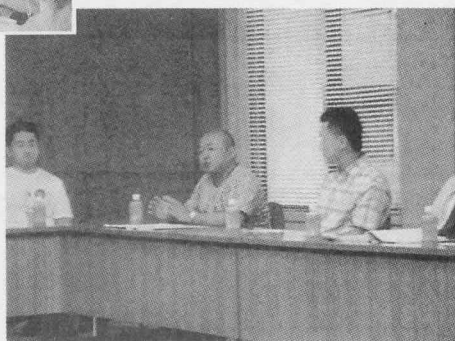


楽天×ロッテ戦を観戦



仙台市役所では、球団を応援することで地域とのつながりを形成することができたこと、またこの連携を活かし、環境整備など地域活性化に寄与していく取り組みについてお話を伺いました

今回の企画を通してお聞きした活性化への取り組みについて、塾生間で闊達な議論を行いました



想定外の出来事に遭遇しましたが、産政塾生の判断力と団結力で、乗り越えました。今回の出来事に対し、みんなで情報を共有し、一体感を更に高めました

《第6回会合》

期日：2005年8月19（金）、20日（土）

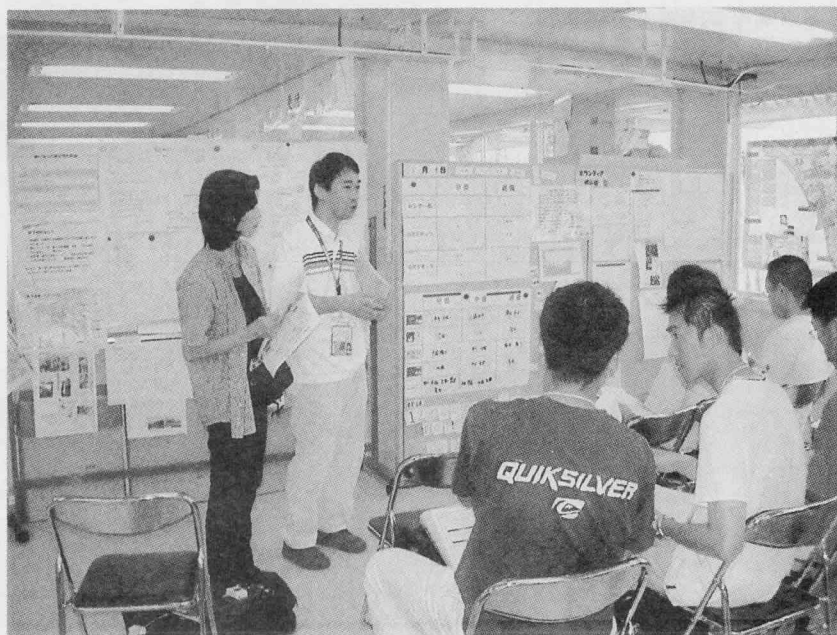
場所：愛知万博会場（長久手町）

内容：愛知万博でボランティアを実践!!

「ボランティア」について考える。

講話、ボランティア、討論

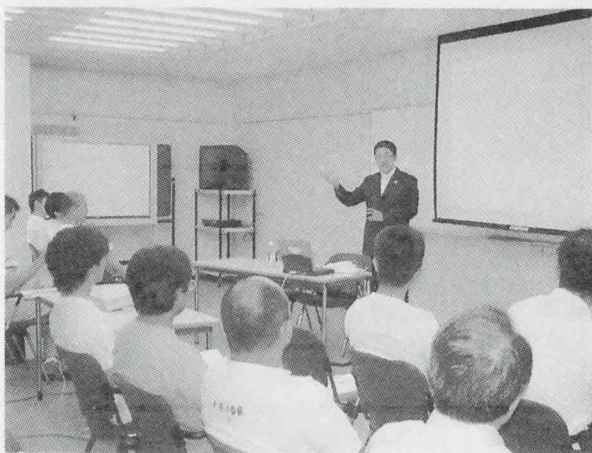
懇親会



ボランティアの運営している協会を訪ね、立ち上げまでの苦労話などを話して頂きました



ボランティアを通して、子供達のふれあいの中で、塾生は自然に笑顔が溢れ、喜びや楽しさを感じるとともに、やりとげた満足度を味わうことができました



塾生と同世代であり
県立養護学校の講師
をしながら福祉活動
をしている河合先生
から、『障害者教育
とスポーツ』につい
て熱く語って頂きま
した

《第7回会合》

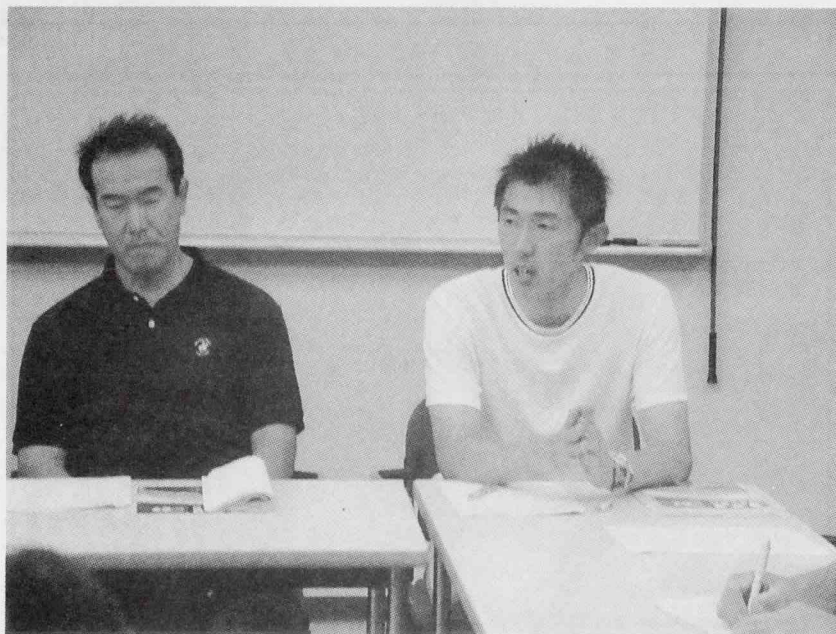
期日：2004年8月19日（金）

場所：つどいの丘（豊田市）

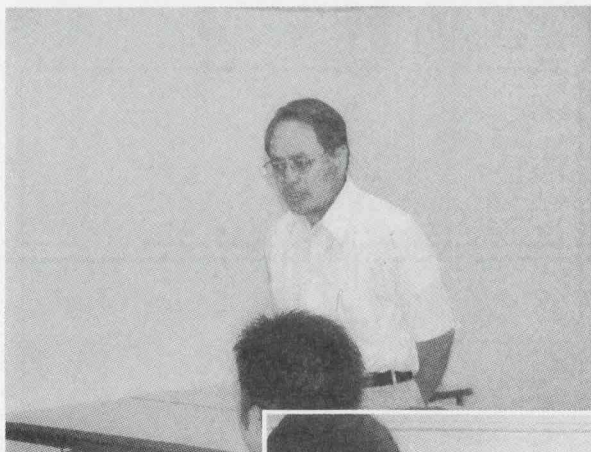
内容：第16期産政塾閉塾式、

「殻の外に踏み出そう」について討論

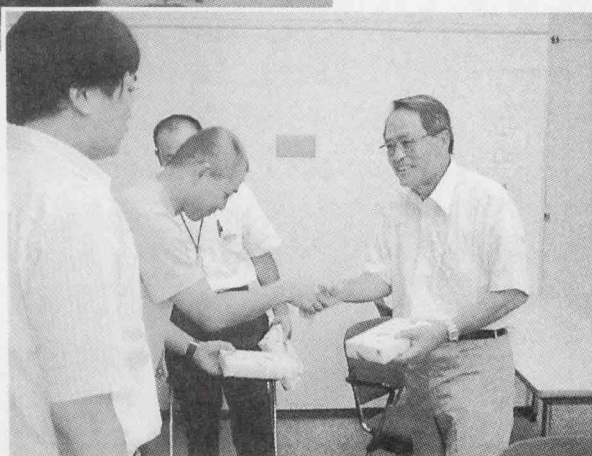
懇親会



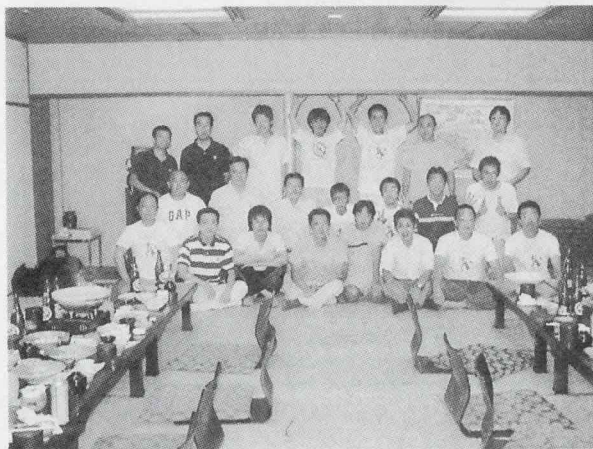
産政塾のテーマ「殻の外に踏み出そう」についてみんなで議論



小田桐塾長より贈る
言葉



記念品の贈呈



みなさんお疲れ様でした。
みなさんの今後の
ますますのご活躍を期
待しております!!

産政塾歴代卒業生

※ 組織名は参加当時の名称

第2期生 (14名)

朝位 克 トヨタ自動車(株)
 伊藤 哲 全トヨタ労働組合連合会
 太田 雅也 名古屋鉄道(株)
 大町 重人 アイシン精機(株)
 桑山 幸次 (株)東海銀行 ((株)UFJ 銀行)
 小西 正晃 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 高橋 恭弘 トヨタ自動車労働組合
 種市 章 豊田合成(株)
 丹羽 漸 中部電力(株)
 松下 恭規 日本電装(株) ((株)デンソー)
 水野 和明 全松坂屋労働組合
 水野 真二 アイシン労働組合
 山内 潔 トヨタ車体(株)
 萬谷 孝之 (株)松坂屋

第1期生 (14名)

江口 光市 全トヨタ労働組合連合会
 尾関 勝隆 (株)松坂屋
 加藤 宏幸 日本電装(株) ((株)デンソー)
 甲村 正男 トヨタ車体労働組合
 清水 和博 松坂屋労働組合
 鈴木 智博 中部電力(株)
 高木 英樹 名古屋鉄道(株)
 土屋 昇大 (株)東海銀行 ((株)UFJ 銀行)
 中山 直人 トヨタ自動車労働組合
 平野 富広 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 本田 文利 豊田合成労働組合
 前沼 聡 アイシン労働組合
 宮崎 直樹 トヨタ自動車(株)
 安井 雅章 アイシン精機(株)

第4期生 (16名)

北村 直久 日本電装労働組合
(デンソー労働組合)

竹内 順治 豊田合成労働組合

朝日 和寛 日本電装(株) (株デンソー)

田中 義和 トヨタ自動車労働組合

村田 滋 (株東海銀行) (株UFJ 銀行)

沢田大八郎 豊田自動織機労働組合

原 年幸 トヨタ自動車(株)

中村 武司 アイシン精機(株)

宮坂 和行 松坂屋労働組合

山田 法夫 名古屋鉄道(株)

秋葉 覚 中部電力(株)

駒沢 修 アイシン労働組合

岡 啓視 中部電力労働組合本部

加藤 秀夫 トヨタ車体労働組合

松野景之介 トヨタ車体(株)

相原 康伸 全トヨタ労働組合連合会

第3期生 (14名)

石鍋 寿久 トヨタ自動車労働組合

大島 一峰 アイシン精機(株)

大西 勝彦 豊田自動織機労働組合

神谷 直 アイシン労働組合

岸田 竜茂 中部電力(株)

雲井 浩 丸栄労働組合

近藤 郁也 トヨタ車体(株)

島川誠一郎 トヨタ自動車(株)

関谷 俊司 日本電装(株) (株デンソー)

竹下 裕之 トヨタ車体労働組合

塚本 和宏 全松坂屋労働組合

遠山 泰弘 日本電装労働組合
(デンソー労働組合)

深谷 修 豊田合成(株)

宮川 学 名古屋鉄道(株)

第6期生 (15名)

林 恭吾 丸栄労働組合
 竹内 秀明 中部電力(株)
 近藤 均 トヨタ車体(株)
 光岡 博 アイシン労働組合
 向井 克行 日本電装(株) ((株)デンソー)
 説田 公人 トヨタ自動車(株)
 中村 文彦 松坂屋労働組合
 高橋 誠 トヨタ自動車労働組合
 本田 武志 アイシン精機(株)
 伊藤 裕章 豊田合成(株)
 大島 秀一 名古屋鉄道(株)
 森 晴哉 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 横田 晴充 (株)東海銀行 ((株)UFJ 銀行))
 桑山 完治 中部電力労働組合本部
 石川 勝幸 全トヨタ労働組合連合会

第5期生 (17名)

斉藤 正彦 丸栄労働組合
 橋本 亨 トヨタ車体(株)
 田島 健一 松坂屋労働組合
 稲川 敦之 名古屋鉄道(株)
 荒谷 育三 日本電装(株) ((株)デンソー)
 高井 信弘 豊田合成(株)
 長尾 基晴 アイシン精機(株)
 洲崎 典之 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 渡辺 潔 アイシン労働組合
 上田 信也 全トヨタ労働組合連合会
 杉浦 一成 トヨタ車体労働組合
 内田 厚 中部電力労働組合
 加藤 泰孝 中部電力(株)
 荻野 勝彦 トヨタ自動車(株)
 加藤 昭夫 トヨタ自動車労働組合
 磯部 謙二 日本特殊陶業(株)
 二木 芳樹 (株)東海銀行 ((株)UFJ 銀行)

第8期生 (22名)

有賀 文昭 中部電力労働組合
 伊藤 賢一 トヨタ車体(株)
 伊藤 友博 松坂屋労働組合
 岩城 史憲 名古屋鉄道(株)
 植松 良太 全トヨタ労働組合連合会
 粕谷 浩二 豊田市役所
 川村 淳一 豊田工機労働組合
 栗栖 秀人 (株)東海理化
 佐野 弘忠 中部電力(株)
 杉浦 公紀 アイシン労働組合
 中條 喜之 (株)デンソー
 所 秀樹 関東自動車工業(株)
 丹羽 広志 豊田合成労働組合
 根本 恵司 トヨタ自動車(株)
 服部 健司 デンソー労働組合
 早川 範一 (株)松坂屋
 廣瀬 登 (株)東海銀行 (株)UFJ 銀行)
 船戸 正巳 アラコ(株)
 前田 孝広 丸栄労働組合
 前田 直人 トヨタ車体労働組合
 百瀬 和典 トヨタ自動車労働組合
 森本 浩二 アイシン精機(株)

第7期生 (17名)

川村 博隆 アイシン労働組合
 阿久津正典 豊田市役所
 村瀬 俊 日本電装(株) (株)デンソー)
 河路 直人 豊田合成労働組合
 小林 雅昭 全トヨタ労働組合連合会
 臼井 満 松坂屋労働組合
 星野 悟 中部電力(株)
 柴田 伸彦 中部電力労働組合
 小倉 克幸 トヨタ自動車(株)
 勝美寿美子 アイシン精機(株)
 西田 明生 トヨタ自動車労働組合
 高橋 剛 日本特殊陶業(株)
 吉田 茂 トヨタ車体(株)
 三川 高市 丸栄労働組合
 高井 康之 (株)東海銀行 (株)UFJ 銀行)
 吉川 篤史 名古屋鉄道(株)
 田中 英司 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)

第10期生 (21名)

石川 輝彦 アイシン労働組合
 奥田竜太郎 トヨタ車体(株)
 糟谷 道広 (株)デンソー
 門 孝裕 松坂屋労働組合
 川上 茂浩 中部電力(株)
 小坂 好伸 アイシン精機(株)
 近藤 理史 豊田市役所
 杉本 道男 日本特殊陶業(株)
 鈴木 亨 トヨタ車体労働組合
 鈴木 康紀 アラコ(株)
 高橋 勝将 デンソー労働組合
 丹下 隆吉 トヨタ自動車(株)
 徳増 達生 アスモ(株)
 戸田 覚 (株)東海銀行 (株)UFJ 銀行)
 西井 俊哉 丸栄労働組合
 船間 淳也 名古屋鉄道(株)
 松田 斉 全トヨタ労働組合連合会
 武藤 成洋 豊田合成(株)
 安田 幸治 トヨタ自動車労働組合
 矢田 勝弘 フタバ産業(株)
 常 兆 名古屋大学

第9期生 (21名)

足立 貴彦 松坂屋労働組合
 石井 直生 トヨタ自動車(株)
 伊藤 裕介 豊田工機労働組合
 宇野 庄一 全トヨタ労働組合連合会
 江口 淳 豊田合成(株)
 見城 篤 中部電力(株)
 榊原 悦人 丸栄労働組合
 坂口 登 (株)東海銀行 (株)UFJ 銀行)
 柴田 徹哉 豊田市役所
 須崎 辰彦 トヨタ車体労働組合
 玉木 健二 中部電力労働組合本部
 恒川 智行 アイシン労働組合
 中出 裕之 関東自動車工業(株)
 浜口 誠 トヨタ自動車労働組合
 林 克憲 (株)デンソー
 平岡 典明 アイシン精機(株)
 古川 豊 日本特殊陶業(株)
 本多 篤 トヨタ車体(株)
 前川 武治 デンソー労働組合
 山田 泰準 名古屋鉄道(株)
 山本 雅章 アラコ(株)

第12期生 (22名)

内田 幸代 豊田市役所
 江尾 国博 名古屋鉄道(株)
 梶川 拓也 中部電力(株)
 柏谷 幸彦 豊田合成(株)
 加藤 秀人 トヨタ車体労働組合
 後藤 泰司 丸栄労働組合
 近藤 雅人 (株)豊田自動織機
 高橋 正典 デンソー労働組合
 武田 純康 トヨタ自動車労働組合
 竹中 隆志 松坂屋労働組合
 鶴見 実男 アイシン労働組合
 寺西 知雄 東邦ガス労働組合
 中里 浩一 (株)UFJ銀行
 中村 明史 中部電力労働組合本部
 芳賀 章弘 トヨタ車体(株)
 長谷部知英 フタバ産業(株)
 羽根 章人 アラコ(株)
 本田 隆英 アイシン精機(株)
 松尾 正樹 (株)デンソー
 水野 勝博 全トヨタ労働組合連合会
 村瀬 政彦 トヨタ自動車(株)
 若松 真理 全ユニー労働組合

第11期生 (25名)

池浦 芳一 トヨタ車体(株)
 石本 誉 デンソー労働組合
 板倉 智宏 全ユニー労働組合
 上別府伸一 アイシン労働組合
 大嵐 隆之 (株)豊田自動織機
 岡本 雅典 アスモ労働組合
 小野田和広 丸栄労働組合
 柴田 博 フタバ産業(株)
 締次 顕治 松坂屋労働組合
 常 兆 名古屋大学大学院国際開発研究科
 杉下 昌明 東邦ガス労働組合
 大東 輝彦 (株)東海銀行 ((株)UFJ銀行)
 高木 敏光 名古屋鉄道(株)
 高田 学 アイシン精機(株)
 滝野 仁 日本特殊陶業(株)
 武田 和則 中部電力労働組合本部
 鶴岡 光行 トヨタ自動車労働組合
 中村 英行 アラコ(株)
 林 賢士 豊田合成(株)
 三谷 建介 中部電力(株)
 武藤 俊和 トヨタ車体労働組合
 森 崇博 全トヨタ労働組合連合会
 山崎 一生 トヨタ自動車(株)
 横井 雅弘 (株)デンソー
 渡辺 明子 豊田市役所

第14期生 (22名)

浅野 清輝 東海理化労働組合
 大川 博 デンソー労働組合
 奥 丈治 (株)松坂屋
 梶田 進 トヨタ車体(株)
 梶原 昭二 豊田自動織機労働組合
 川崎 貴之 (株)デンソー
 栗原 尚子 アイシン精機(株)
 小嶋 直樹 松坂屋労働組合
 佐藤 源信 アラコ(株)
 白井 崇夫 刈谷市役所
 鈴木 輝行 全トヨタ労働組合連合会
 鈴木 利幸 中部電力労働組合
 苑田 隆之 中部電力(株)
 千種 徳充 トヨタ車体労働組合
 柘植 孝悦 豊田市役所
 長岡 享史 トヨタ自動車(株)
 藤原 誠二 アラコ労働組合
 堀田 大祐 名古屋鉄道(株)
 山口 健 トヨタ自動車労働組合
 山下 邦彦 アイシン労働組合
 吉田 研太 (株)豊田自動織機
 渡辺 憲司 丸栄労働組合

第13期生 (21名)

井上 正勝 トヨタ自動車労働組合
 内田 恭介 中部電力労働組合本部
 梅田 清孝 フタバ産業(株)
 太田 正樹 松坂屋労働組合
 門井 徳孝 デンソー労働組合
 熊崎 俊哉 トヨタ車体(株)
 佐野 智弘 アイシン精機(株)
 鈴木 定晴 トヨタ車体労働組合
 鈴木 武 名古屋鉄道(株)
 田中 亘人 (株)豊田自動織機
 彗和田光紀 豊田市役所
 出口 隆浩 全トヨタ労働組合連合会
 中川 年史 アイシン労働組合
 野坂 利次 トヨタ自動車(株)
 服部 淳二 豊田工機労働組合
 水野 雅通 アスモ労働組合
 宮城 英樹 (株)デンソー技研センター
 村口 文希 刈谷市役所
 森 章浩 (株)UFJ銀行
 森 勝 東邦ガス労働組合
 山本 徹真 アラコ(株)

第16期生 (24名)

青山 泰孝 全ユニー労働組合
 赤川 直也 トヨタ紡織労働組合
 安東 英二 松坂屋労働組合
 大橋 弘章 中部電力株式会社
 小川 恵孝 トヨタ紡織株式会社
 加藤 基成 株式会社豊田自動織機
 小西 圭造 トヨタ自動車労働組合
 小林竜太郎 デンソー労働組合
 酒井 推幾 豊田工機労働組合
 佐宗 晋治 アイシン精機株式会社
 佐々 慎治 トヨタ車体株式会社
 高橋 鉦二 トヨタ自動車株式会社
 竹下太郎 全トヨタ労働組合連合会
 田中丸 庸 株式会社デンソー
 富田 晃弘 名古屋鉄道労働組合
 中根 陽造 東邦ガス労働組合
 中野 将 豊田市役所
 服部 敦哉 豊田自動織機労働組合
 番条 喜芳 中部電力労働組合
 平野 元章 刈谷市役所
 宮川修一郎 フタバ産業株式会社
 山口 覚 アイシン労働組合
 吉續 武俊 トヨタ車体労働組合
 吉原 昭浩 株式会社松坂屋

第15期生 (25名)

池田 真生 刈谷市役所
 石原 英児 名古屋鉄道労働組合
 海野 孝宏 アイシン精機株式会社
 越田 弘幸 松坂屋労働組合
 大河原宏樹 アラコ株式会社
 大橋 一之 全トヨタ労連組合連合会
 片山 伸子 豊田市役所
 倉沢 範行 中部電力労働組合
 洲崎 浩一 アイシン労働組合
 洲崎 晃嘉 豊田合成労働組合
 千田 路征 トヨタ車体労働組合
 立松 学 トヨタ自動車労働組合
 棚橋 克成 株式会社松坂屋
 奈須 克昭 トヨタ車体株式会社
 野々垣 一 株式会社豊田自動織機
 早矢仕 環 豊田工機労働組合
 原 誠治 アスモ株式会社
 藤牧 知広 中部電力株式会社
 別宮健一郎 丸栄労働組合
 水越 宏明 デンソー労働組
 山浦 宏行 トヨタホーム株式会社
 山添 勇人 株式会社デンソー
 山本 浩晃 全ユニー労働組合
 吉川 浩二 豊田自動織機労働組合
 吉本 雅教 トヨタ自動車株式会社

産 政 塾

2006年1月 第7刷発行

編 者 財団法人 中部産業・労働政策研究会

住 所 〒471-0833

愛知県豊田市山之手8丁目131番地

全労済豊田会館 3F

T E L 0565-27-2731

印刷所 (有) 第一プリント社

製本所 山 本 製 本

塾 政 産

塾 長 小田桐勝巳

塾 生

全ユニー労働組合	青山 泰孝
トヨタ紡織労働組合	赤川 直也
松坂屋労働組合	安東 英二
中部電力株式会社	大橋 弘章
トヨタ紡織株式会社	小川 恵孝
株式会社豊田自動織機	加藤 基成
トヨタ自動車労働組合	小西 圭造
デンソー労働組合	小林竜太郎
豊田工機労働組合	酒井 推幾
アイシン精機株式会社	佐宗 晋治
トヨタ車体株式会社	佐々 慎治
トヨタ自動車株式会社	高橋 鉦二
全トヨタ労働組合連合会	竹下太一郎
株式会社デンソー	田中丸 庸
名古屋鉄道労働組合	富田 晃弘
東邦ガス労働組合	中根 陽造
豊田市役所	中野 将
豊田自動織機労働組合	服部 敦哉
中部電力労働組合	番条 喜芳
刈谷市役所	平野 元章
フタバ産業株式会社	宮川修一郎
アイシン労働組合	山口 覚
トヨタ車体労働組合	吉續 武俊
株式会社松坂屋	吉原 昭浩

中 部 産 政 研 松井 英治